

2023 年 8 月

食料安全保障月報

(第 26 号)



令和 5 年 8 月 31 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2023 年 8 月食料安全保障月報（第 26 号）

目 次

概要編

I	2023 年 8 月の主な動き	1
II	2023 年 8 月の穀物等の国際価格の動向	5
III	2023/24 年度の穀物需給（予測）のポイント	5
IV	2023/24 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	5
V	今月の注目情報「黒海穀物イニシアティブ停止等を受けた中国の穀物輸入」	6

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	1 0
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	1 1
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	1 2
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	1 4
5	食品小売価格の動向	1 8
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC 提供）	1 9
7	FAO 食料価格指数	2 1

今月のコラム

「豪州の食料事情①：食料安全保障をめぐる考え方」

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	＜米国＞	2023/24 年度の生産量は前月予測から下方修正され 47.2 百万トン
	＜カナダ＞	2023/24 年度の生産量は前年度に比べ 1.8%減の 33.2 百万トン
	＜豪州＞	2023/24 年度の生産量は前年度比 26.9%減の 29.0 百万トン
	＜EU27＞	東欧 5 か国：ウクライナ産小麦の輸入規制を継続
	＜中国＞	2023/24 年度の生産量は、豪雨の影響で 3.0 百万トンの下方修正
	＜ロシア＞	2023/24 年度の輸出量は史上最高の 48.0 百万トン
	＜ウクライナ＞	2023/24 年度の生産量は上方修正され 21.0 百万トン
2	とうもろこし	9
	＜米国＞	単収の引下げにより、生産量は 5.3 百万トン上方修正
	＜ブラジル＞	2022/23 年度の冬とうもろこしの収穫に遅れ
	＜アルゼンチン＞	2023/24 年度の生産量は、前年度から回復する見通し
	＜中国＞	主産地の降雨過多の影響を受け、生産量は 3.0 百万トン下方修正
	＜ウクライナ＞	2023/24 年度の生産量は、侵攻前の 2021/22 年度より 34.7%減
3	コメ	1 5
	＜米国＞	2023/24 年度の生産量は単収の増加見込みから前年度比 27.1%増
	＜インド＞	降雨不足と高温から作柄に懸念

- <中国> 一期作稲、南部の二期作晩稲の生育は順調
- <タイ> 雨季米の土壌水分量は十分も、乾季米向け灌漑用水不足が懸念
- <ベトナム> 北部、南部とも雨季米は良好な生育状況

II 油糧種子

- 大豆・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 1
- <米国> 単収の引下げを受け、生産量は 2.6 百万トン下方修正
- <ブラジル> 2022/23 年度の収穫はほぼ完了し、生産量は史上最高の見通し
- <アルゼンチン> 2022/23 年度の輸入量は、減産により史上最高の見通し
- <中国> 2023/24 年度の実産量・消費量は史上最高
- <カナダ> 作付面積の増加により、生産量は前年度から 6.1%増

- (参考 1) 本レポートに使用されている各国の穀物年度について(2023/24 年度)・・・ 2 7
- (参考 2) 単位換算表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 7
- (参考 3) 各国のクロップカレンダー一覧（主要品目毎）・・・・・・・・・・・・ 2 8

特別分析トピック

「世界のコメをめぐる事情」

【利用上の注意】

表紙写真：米国オレゴン州の冬小麦（ソフトホワイト）の収穫。
撮影者：ローリー・シュロック氏

(概要編)

I 2023 年 8 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2023/24 年度の作況について、北半球では冬小麦等が収穫期、とうもろこしや大豆等の作物が生育期から成熟期を迎えている一方、南米では 2022/23 年度産が収穫期を迎えている。

品目別にみると、8 月の米国農務省（USDA）の需給報告によれば、小麦については、前年度豊作だった豪州やロシアで減産となるものの、前年度高温乾燥の被害を受けたインドや EU 等で増産となり、世界の生産量は前年度を上回る見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、前年 3 月には過去最高を更新した小麦の国際相場も侵攻時の水準を下回ったものの、ウクライナの穀物輸出に関する 4 者合意が 7 月 17 日に期限を迎える中で、ロシアが離脱を表明。今後の代替ルートでの輸出動向も含め注視が必要。

とうもろこしについては、ロシア等で減産となるものの、米国や EU 等で増産となり、世界の生産量は前年度を上回る見通し。大豆については、米国で減産となるものの、今後作付けが行われる南米で前年度の干ばつから回復し、世界全体での生産量は前年度を上回る見通し。いずれの品目も、旺盛な消費により期末在庫は依然としてタイトな状況の中で、エルニーニョなどの天候の影響を受け生産量が下方修正されており、引き続き注視する必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数については、6 月の 122.4 から、7 月(最新値)は 123.9 に上昇（参考：2022 年 7 月 140.6、2021 年 7 月 124.6、2020 年 7 月 94.0）。

海上運賃については、バルチック海運指数（穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数）が、直近 5 カ年の平均値の約 6 割の水準で推移。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021 年 7 月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、**2023 年 8 月も引き続き適用**。

【参考】早期注意段階について（農林水産省 HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

米国農務省（USDA）の8月見通しによれば、2023/24年度の小麦の生産量は7月見通しから収穫面積や単収の引上げを受けて上方修正され 2,100 万トン（対前年度比 2.3%減）。とうもろこしの生産量は、天候に恵まれ上方修正され 2,750 万トン（同 1.9%増）。輸出量は黒海穀物イニシアティブの停止はあるものの、小麦、とうもろこしそれぞれ 1,050 万トン（同 38%減）、1,950 万トン（同 30%減）で前月から変わらず（参考1）。

ウクライナ農業政策食料省の8月10日時点の予測によると、2023/24年度の穀物・油糧種子の生産量は天候に恵まれ 7,670 万トンと、2022/23年度の 7,618 万トンより 1%増となる見通し。ロシア侵攻以前の過去最高だった 2021/22年度（1億600万トン）と比較すると 28%減。

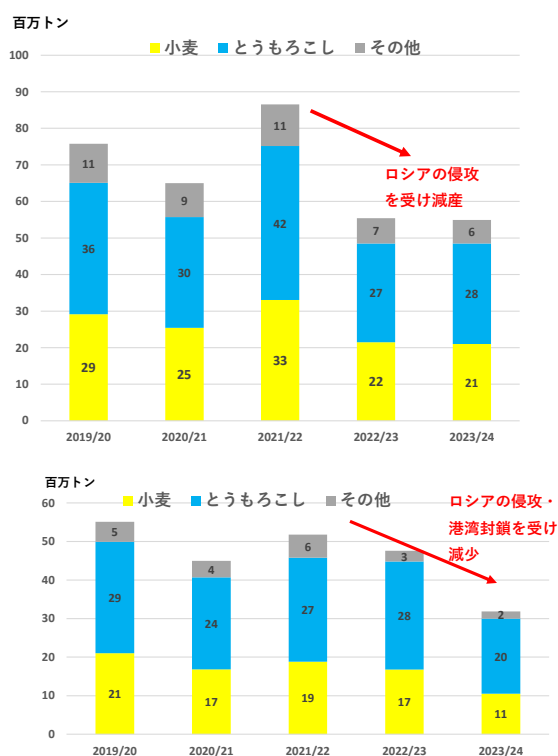
品目別には、小麦は単収の上昇により 2,095 万トン（2021/22年度 3,300 万トン、2022/23年度 2,073 万トン）、とうもろこしも同様に単収の上昇により 2,806 万トン（2021/22年度 3,760 万トン、2022/23年度 2,767 万トン）と前年度より増産の見通し。

冬小麦の収穫が開始され、ウクライナ農業政策食料省によれば、2023年8月11日時点で 1,770 万トン収穫された。とうもろこし等は9月以降収穫が本格化する。

黒海穀物イニシアティブの状況（7月17日にロシア離脱で停止）

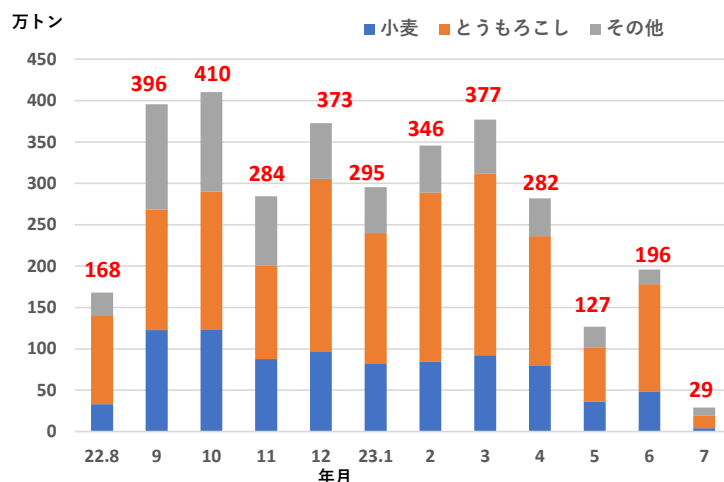
2022年7月22日の国連、ウクライナ、ロシア、トルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意を受け、同年8月以降、オデーサ港等3港から輸出を再開。2022年8月～23年7月累計の輸出量は3,283万トン（うち、とうもろこし1,687万トン、小麦891万トン他）。目的地は中国、スペイン、トルコ等（参考2）。本合意（当初の期限は2022年11月18日、その後計3度に亘り延長）は、2023年7月17日にロシアの離脱で停止。その後、再開については、決定されていない。

（参考1）小麦ととうもろこしの生産量（上）、輸出量（下）の推移（年度）



出典：米国農務省「PS&D」（2023.8） 注：その他は他の穀物（大麦等）

（参考2）黒海穀物イニシアティブでの輸出量の推移（月毎）（2022.8.1～23.7.16）



出典：国連資料（2023年7月17日時点） ロシアの離脱で停止

注：その他はひまわり油・大麦など。陸路による輸出を除く。

1 黒海穀物イニシアティブへのロシアの復帰は難航

「黒海穀物イニシアティブ」は、7月17日にロシアが離脱を表明し停止。それ以降、国連の働きかけに加え、7月27日・28日に開催されたロシア・アフリカ会議、8月2日に行われたトルコ・エルドアン大統領とロシア・プーチン大統領との電話会談等で各国が働きかけたものの、ロシア側は、イニシアティブと同時に締結された「ロシア産の食品及び肥料の世界市場への展開についての協力に係るロシア連邦と国連事務局の間の相互理解に関するメモランダム」にある輸出への障害の除去が履行されていないとの従来の立場を繰り返している。

一方、ウクライナは、ルーマニアとの国境に面したドナウ川沿い港からの出荷や、EU 経由の陸路等での代替輸出ルートでの代替輸出ルートの拡充を試みている。しかし、ロシアの攻撃がドナウ川沿いの穀物輸出施設まで及んでおり、また、鉄道の軌道幅がウクライナと EU で異なる等のインフラの制約のほか、東欧諸国がウクライナ産穀物等の輸入禁止を9月15日以降も引き続き求めるなど、ウクライナ産農産物輸入に対する強い反発もあり、イニシアティブ実施期間中の3,283万トン（2022年8月～2023年7月）全てを代替することは難しいとみられる。なお、16日にはウクライナのオデーサ港から穀物輸出船が出航し、ウクライナが独自に黒海に設けた臨時回廊を通過した。今後の動向に注視が必要。

※黒海穀物イニシアティブ停止後、代替輸出ルートとして、以下に掲げるものが実施又は検討されている。（France Agrimer 他より）

- 1 トラックや鉄道輸送、ドナウ川の運河等を利用し、ルーマニアのコンスタンツァ港経由で輸出
⇒現実性の高いルートとみられる
- 2 ポーランドを経由し、バルト海のグダニスク港等経由で輸出
⇒遠距離でコスト高



2 米国のとうもろこし、大豆の生産見通し、期末在庫率とも引下げ

米国農務省（USDA）の8月穀物等需給見通しによれば、今年度第1回目の作柄実地調査を受け、米国のとうもろこし、大豆とも単収が下方修正された。受粉期を迎えたとうもろこしの生産量は、前月より532万トン下方修正され3億8,383万トン（前年度比10.1%増）となり、2015/16年度に次ぐ史上2位となる見通し。一方、着莢期を迎えた大豆の生産量は260万トン下方修正され1億1,445万トン（前年度比1.7%減）の見込み。また、春小麦の収穫が開始された小麦は、乾燥天候により春小麦の生産量が10万トン下方修正されたものの、前年度比5.1%増の4,720万トンと見込まれている。

期末在庫率は8月見通しで、とうもろこし、大豆ともそれぞれ15.3%（前年度10.6%）、5.8%（同6.0%）に引下げられた。一方、小麦は33.6%（同30.7%）に引き上げられた。とうもろこし、小麦の在庫は回復しつつあるが、大豆は1ヶ台の低水準で推移している。

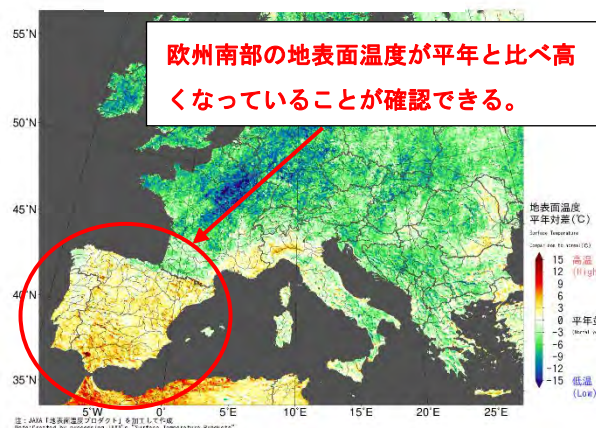
3 EUの高温乾燥で小麦、とうもろこし生産量下方修正

USDAの8月需給見通しによれば、欧州南部の乾燥等により、EUの小麦生産量は前月より300万トン下方修正され1億3,500万トン、とうもろこし生産量は前月より370万トン下方修正され5,970万トンの見通し。特にスペインなどでの高温乾燥による影響が大きいとされている。

EUのとうもろこしは、前年度干ばつの影響を受け大きく減算（5,223万トン）となっており、現時点では本年度は前年度を上回るものの、地域によっては、2年連続で高温乾燥の影響を受けたとみられる。EUによるウクライナ産とうもろこしの輸入も含め、今後の動向に注視が必要。

（参考3） 欧州の地表面温度平年対差

2023年8月1～15日



出典：JASMAI (<https://jasmai.maff.go.jp/>)

衛星データを活用し、世界の気象状況を可視化

II 2023 年 8 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、7 月末、240 ドル/トン台半ばで推移。8 月に入り、米国産冬小麦の収穫の進展やロシア産小麦の輸出量の増加等から一時 230 ドル/トン前後に値を下げたものの、ウクライナとロシアとの戦闘の激化による黒海からの輸出懸念により 240 ドル/トン前半に値を戻した。その後、黒海からの輸出懸念を受けながらも、8 月米国農務省需給報告で米国産の期末在庫量が上方修正されたことや、米国産の低調な輸出需要から値を下げ、8 月中旬現在、220 ドル/トン台半ばで推移。

とうもろこしは、7 月末、190 ドル/トン台後半で推移。8 月に入り、米国中西部での降雨予報等から 180 ドル/トン台前半まで値を下げたものの、黒海からの輸出懸念や米国中西部での乾燥懸念等から値を上げ、8 月中旬現在、180 ドル/トン台後半で推移。

コメは、7 月末、580 ドル/トン台後半で推移。8 月に入り、インドの非バスマティ米の精米の輸出禁止措置（7 月 20 日より）を受けたタイ産米等への需要の集中から、一時、660 ドル/トン台半ばまで急上昇した。その後、パーツ安や価格高騰による需要停滞等から値を下げ、8 月中旬現在、620 ドル/トン台後半で推移。

大豆は、7 月末、530 ドル/トン台で推移。8 月に入り、米国中西部での作柄改善予想等から 480 ドル/トン台半ばに値を下げたものの、その後、米国中西部での乾燥懸念等から値を上げ、8 月中旬現在、500 ドル/トン台前後で推移。

（注）小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、米はタイ国家貿易委員会価格

III 2023/24 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前年度より 2.4% 増の 28.1 億トン。消費量は、前年度より 1.3% 増の 28.1 億トン となり、2019/20 年度以来、4 年ぶりに生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は、前年度より増加するが、消費量が増加するため、期末在庫率は、前年度を下回り 27.6% となる見込み（資料 2 参照）。

生産量は、前年度より、小麦、とうもろこし、コメで増加し、穀物全体で増加となり、28.1 億トンの見込み。

消費量は、前年度より、小麦、とうもろこし、コメで増加し、穀物全体で増加となり、28.1 億トンの見込み。

貿易量は、前年度より、小麦、コメで減少も、とうもろこしで増加し、穀物全体で増加し、5.0 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.7 億トンと前年度より増加、期末在庫率は、前年度より減少する見込み。

（注：数値は 8 月の USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による）

IV 2023/24 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.6 億トン。消費量は前年度を上回り 6.4 億トン となり、前年度に引き続き、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は、前年度より増加し、期末在庫率は 2 年ぶりに前年度を上回る 21.2% となる見込み。

（注：数値は 8 月の USDA 「Oilseeds : World Markets and Trade」による）

V 今月の注目情報：黒海穀物イニシアティブ停止等を受けた中国の穀物輸入

黒海穀物イニシアティブについて、7月17日にロシアが離脱を表明し、ウクライナの黒海からの穀物輸出が事実上停止している。一方、同イニシアティブを通じた穀物輸入で最大のシェアを占めていた中国は、インドのバスマティ米以外のコメ輸出の禁止、中国河南省での収穫期にかけての降雨過多による小麦の減産等を受けて、ブラジル産への代替など輸入穀物の手当の動きがあるとみられる。世界最大の穀物輸入国である中国の動向を中心に穀物貿易への影響をまとめた。

注：文中の「2023/24 年度」等は穀物年度で、中国の小麦は 2023 年 7 月から 2024 年 6 月。国や作物によって異なる（品目別需給編 P. 27 参照）。

1 中国の穀物輸入状況

米国農務省（USDA）の 8 月需給見通しによれば、2023/24 年度の中国の輸入量は、小麦 1,200 万トン、とうもろこし 2,300 万トン、コメ 400 万トンで、とうもろこし（EU に次いで 2 位）を除き世界 1 位の輸入国となっている。

特に小麦は、国家統計局の 7 月 15 日公表資料によれば、2023 年産冬小麦の生産量は、単収が前年より 1.3% 低下し、1 億 3,453 万トン（対前年度比 0.9% 減、122.6 万トン減）となった。主産地である河南省等の収穫期における降雨過多が影響している。このため、食用向けのカナダ産小麦などを中心に輸入が増加すると見込まれている。

一方、世界の貿易の 6 割近くを占める大豆の輸入量については、2022/23 年産が史上最高の豊作となったブラジル産を中心に中国の 2023/24 年度の輸入量は前年度（1 億トン）から 1% 減であるものの、9,900 万トンと高水準となる見通しである。

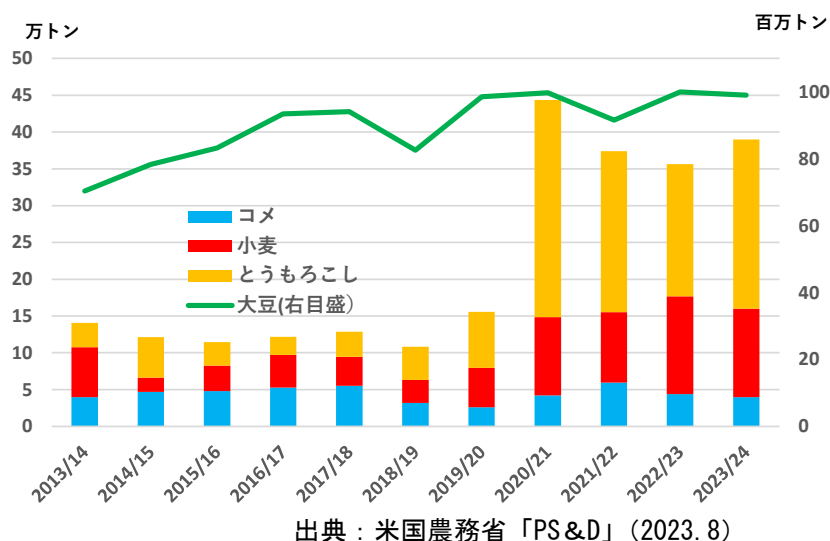
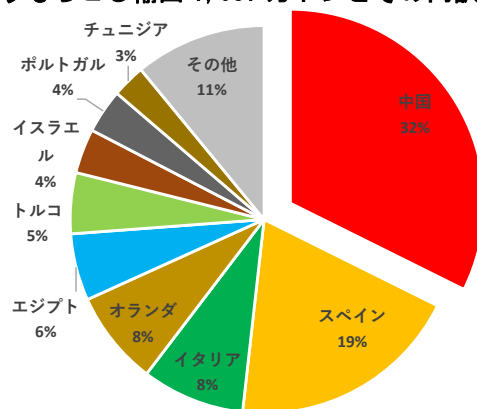


図2 黒海穀物イニシアティブ（2022. 8～2023. 7）
によるとうもろこし輸出 1,687 万トンとその内訳



2 黒海穀物イニシアティブ停止の影響

(1) 黒海穀物イニシアティブを通じた輸入状況

中国は、黒海穀物イニシアティブの実施されていた期間（2022 年 8 月 1 日から 2023 年 7 月 16 日までの間）のウクライナの農作物全体の輸出量 3,283 万トンのうち、796 万トンを入力し、シェアは 1 位の 24% となった。特に同イニシアティブ下での中国による輸入の大半を占めたものはとうもろこしで 546 万トンと、同イニシアティブによるとうもろこし輸出の 32% を占めた。

(2) イニシアティブの履行停止による影響とブラジル産への切替え

中国は、7月17日の同イニシアティブからのロシアの離脱表明とその後のロシアによるウクライナ穀物輸出港への攻撃等の影響を受け、黒海経由でのウクライナ産穀物の輸入が事実上困難になったとみられる。ウクライナはルーマニア等経由による陸路での輸出をすすめているが、EUとウクライナで鉄道の軌道幅が異なるなど割増の輸送コストを要することから、ブラジル産に切り替えるとみられる。

3 インドのコメ輸出禁止

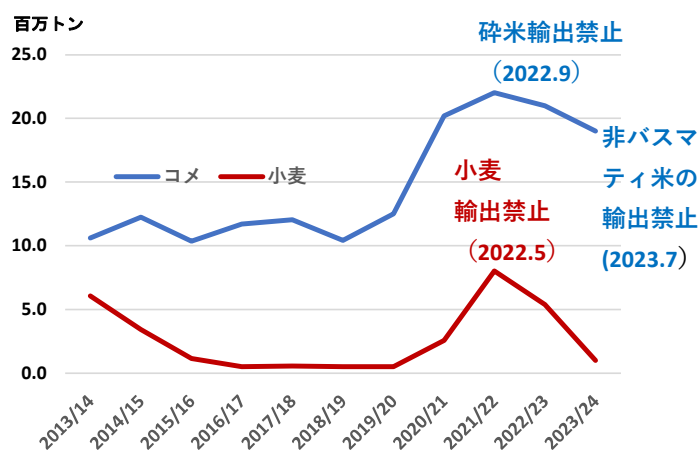
(1) 輸出規制の経緯

インドは、2022/23年度の高湿乾燥による小麦の減産から、2022年5月に小麦輸出を禁止したほか、小麦の供給減に伴い、国内の穀物配給制度におけるコメの比率を増加させた。更に、2022年2月のロシアによるウクライナ侵攻によりとうもろこし価格が上昇すると、代替需要として中国向けの碎米の輸出が増加した。これらを受け、インド国内のコメ価格が上昇したため、同年9月には碎米の輸出禁止とバスマティ米とパーボイルド米（蒸し米）を除くコメの輸出税賦課に踏み切った。

他方で、20%の輸出税を賦課しても、タイ産やベトナム産と比べ輸出競争力があり、輸出にブレーキがかからなかったため、国内のコメ価格は上昇し、インド政府によると、7月のコメ国内小売価格は、前年同月比11.5%、前月比3%の上昇となった。このような状況から、7月20日には、非バスマティ米の輸出禁止と輸出規制を強化した。

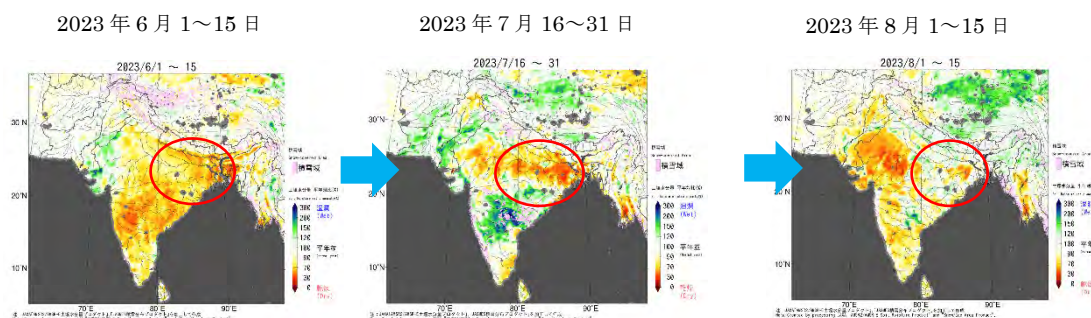
禁止の対象外となるのは、アラブ諸国など向けの高級品種バスマティ米とパーボイルド米である。インド政府によると、輸出規制の対象となるのは、インドのコメ輸出（2,200万トン～2,300万トン）の25%を占める精米600万トン弱であり、世界のコメ貿易（5,600万トン）の1割強に相当する。100年に一度ともいわれている8月の降雨不足がインフレにさらに拍車をかけている。

図3 インドのコメ・小麦輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」(2023.8)

図4 インドの6月～8月の土壌水分推移 北部（コメ等の穀物主産地）の土壌水分が継続して少ない



出典：JASMAI (<https://jasmai.maff.go.jp/>)：衛星データを活用し、世界の気象状況を可視化

(2) 中国の輸入への影響

中国は、基本的にはコメは国内産で自給しており、不足する品質のものを輸入している。2022 年 2 月以降、ロシアのウクライナ侵攻等によるとうもろこしの価格高騰の際に、飼料向け需要を満たすためインドなどから砕米を輸入していた。

しかし、砕米以外のインド産米の輸入は少なく、2022 年 9 月のインドによる砕米の輸出禁止前の 8 月に黒海穀物イニシアティブが合意となり、ウクライナ産とうもろこしの輸入が可能となったため、ウクライナ産とうもろこしの輸入に切り替えたとみられる。その後、本年 7 月の黒海穀物イニシアティブの停止を受け、今後はブラジル産に切り替えると思われる。

4 ブラジルのとうもろこし増産とインフラ整備による輸出拡大

(1) 大豆に加えとうもろこしも世界一の輸出国へ

ブラジルは従前から、大西洋岸の海岸地域で栽培されているコーヒーやさとうきびの生産・輸出で有名であるが、内陸地域のマットグロッソ州等を中心として大豆やとうもろこしに関しても生産量・輸出量を増加させてきた。USDA によれば、2022/23 年度以降、大豆はもとより、とうもろこしについても米国を抜き、世界一の輸出国となる見通しである。中国等からの需要増による作付けの増加が要因である。

(2) 穀物輸出増に合わせインフラ整備

ブラジルの穀物輸出に関しては、内陸から港への輸送手段がトラック輸送に依存していたことから、はしけ輸送でコストの安い米国と比較して割高となっていた。

しかしながら、40 億レアルの投資により、完成まで長期間を要していた南北鉄道が 2023 年 6 月に開通した。北部のイタキ港と南部のサントス港を結び、ブラジルの鉄道システムの基幹となるとみられる。現地の報道によると、この路線において、サン・シマオ（穀物、大豆粕）、リオ・ベルデ（穀物、肥料）、イトゥラマ（砂糖）といった農産物輸送ターミナルがこの 2 年間で操業を開始した。

本完成により、穀物主産地のマットグロッソ州等内陸部から港湾までの穀物輸送インフラが大きく改善したとみられている。特に、今年の後半から本格化する対中国向けとうもろこし輸出に大きく活用されるとみられるが、その背景としては、中国企業がブラジルのインフラ整備に投資を行っているとの報道もあり、今後の動きを注視する必要がある。



5 世界貿易への影響

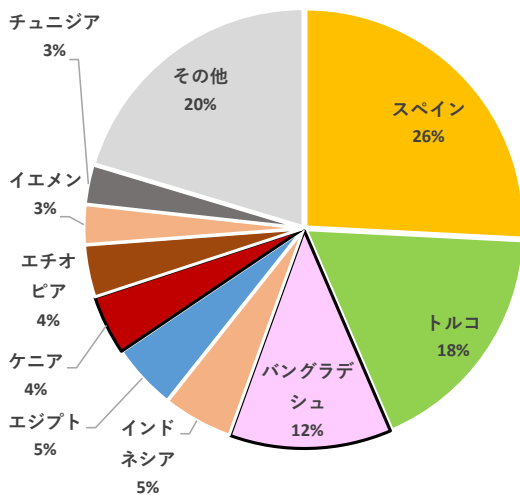
中国の穀物輸入は、基本的に、国家貿易企業の COFCO（糧油グループ）が担っている。輸出規制を措置する国や黒海穀物イニシアティブが停止するなどの不安定な情勢の中、2022 年前半はインド産砕米の輸入、2022 年 8 月以降の黒海穀物イニシアティブによるウクライナ産とうもろこしの輸入、2023 年 8 月以降の南北鉄道開通によるブラジル産とうもろこしの輸入等を行うなど、安定調達に向けた臨機応変な対応を実施している。

一方、アジア・アフリカ諸国の中には、バングラデシュやケニアのように、黒海穀物イニシアティブを通じてウクライナから小麦を、インドからは非バスマティ米を、それぞれ輸入

していた国もあるが、7月17日から20日までの間の短い4日間のうちに米と麦の両方の輸入が滞ることになった。このほか、ウクライナ産小麦ではエジプト、エチオピアといった輸入国、また、インド産非バスマティ米ではベナン、セネガル、コートジボアール、トーゴといったアフリカ諸国が上位を占めているが、これらの国々は、資金力のある中国とは異なり、今後代替の輸入先から穀物輸入ができるか予断を許さない面もあるとみられる。

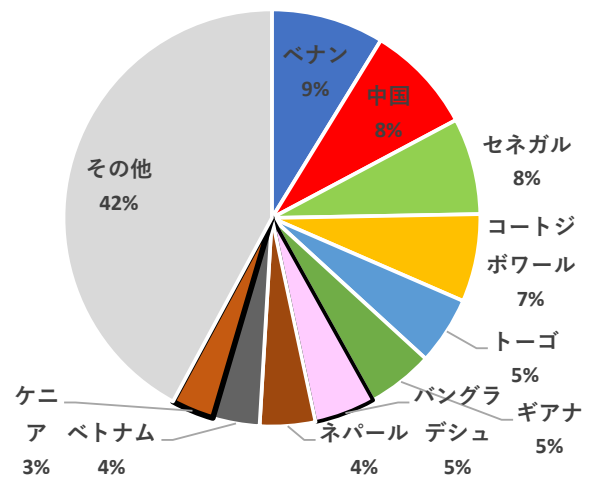
8月22日からは、南アフリカにて BRICS の首脳会談が開催された。穀物貿易も議題に上がったとみられる。世界の穀物の主要プレーヤーであるブラジル、ロシア、インド、中国といった国々が今後どのような動きをするか、また、7月中旬の黒海穀物イニシアティブ停止とインドの精米輸出規制を受け、アジアやアフリカ諸国にどのような影響があるか、引き続き注視していく。

図6 黒海穀物イニシアティブ（2022.8～2023.7）
によるウクライナの小麦輸出 891 万トンの内訳



出典：国連資料（2023.7）

図7 インドの非バスマティを除く精米の輸出先 1,770 万トンの内訳
(2022 年 4 月～2023 年 3 月)

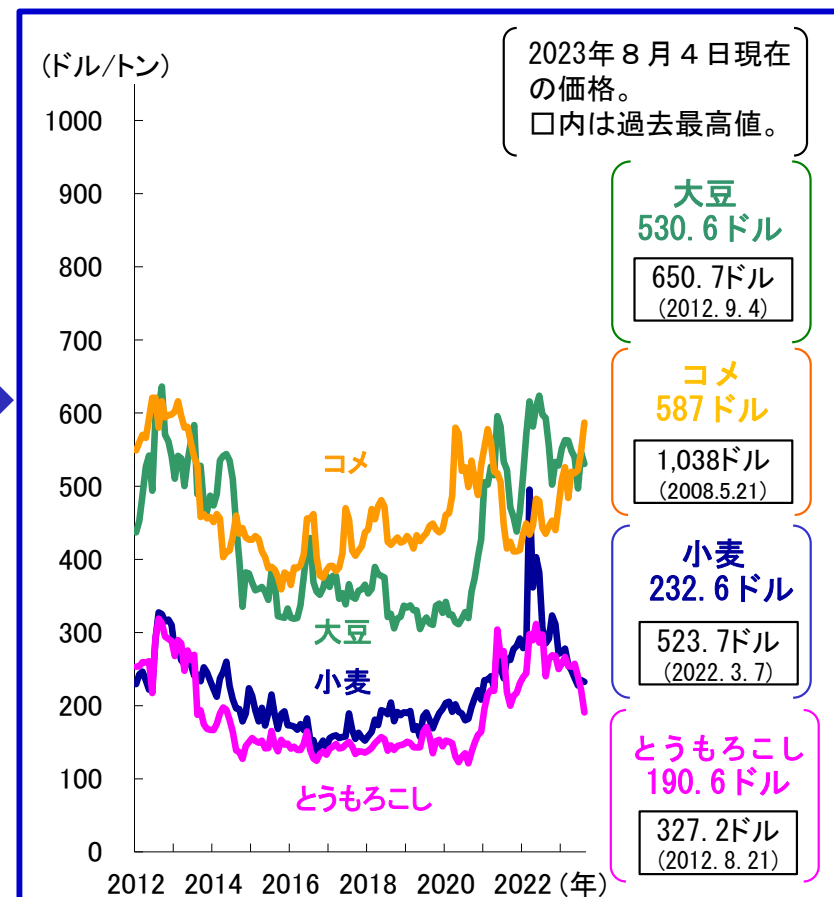
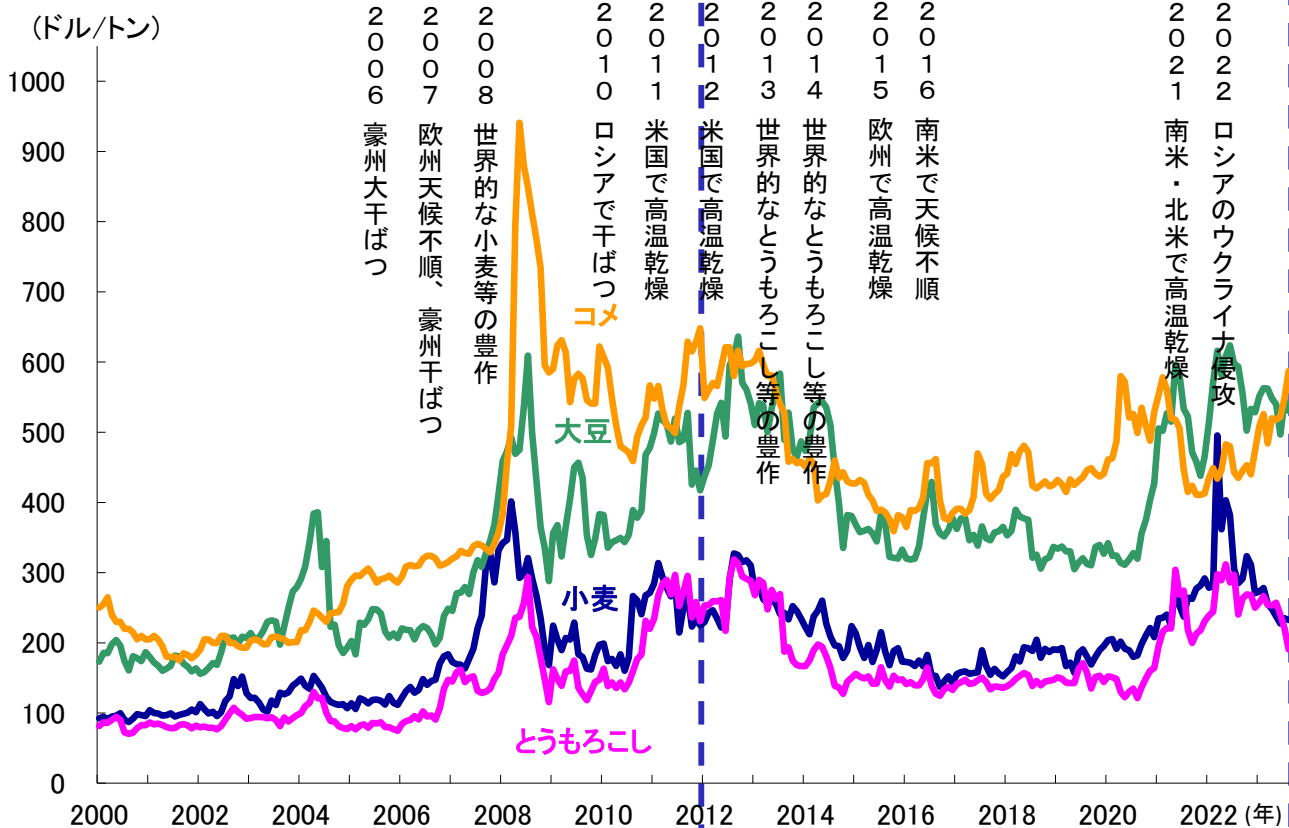


出典：インド政府統計

資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年、ロシアのウクライナ侵攻により、小麦は史上最高値を更新も、4者協議による黒海からの輸出再開などもあり侵攻前の水準まで低下。一方で、とうもろこし、大豆は、アルゼンチンの干ばつから依然として高水準。コメは、2013年以降低下で推移も、2022年9月以降、インドの輸出規制やインドネシアの需要増、2023年7月のインドの輸出規制の強化から上昇。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要に加え、ウクライナ情勢により、2008年以前を上回る水準で推移。

□ 穀物等の国際価格の動向



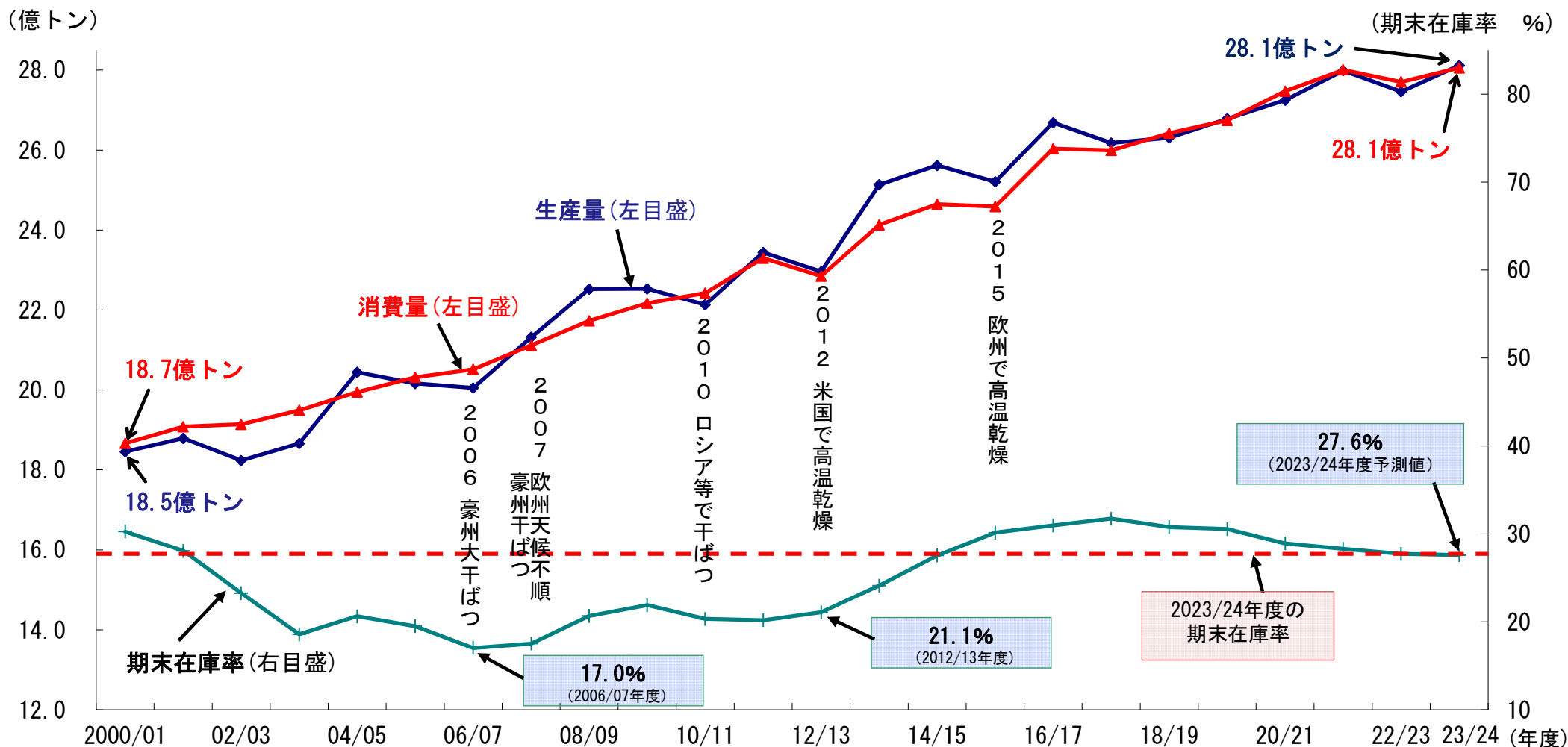
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である（但し、4月は7日が休場であったため、6日の価格）。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。なお、米価格は、8月2日の価格が未公表のため、7月26日の価格。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2023/24年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2023/24年度の期末在庫率は、生産量が消費量を上回ったものの消費量が増加したことから前年度より減少し、27.6%。過去の価格高騰年の2012/13年度(21.1%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

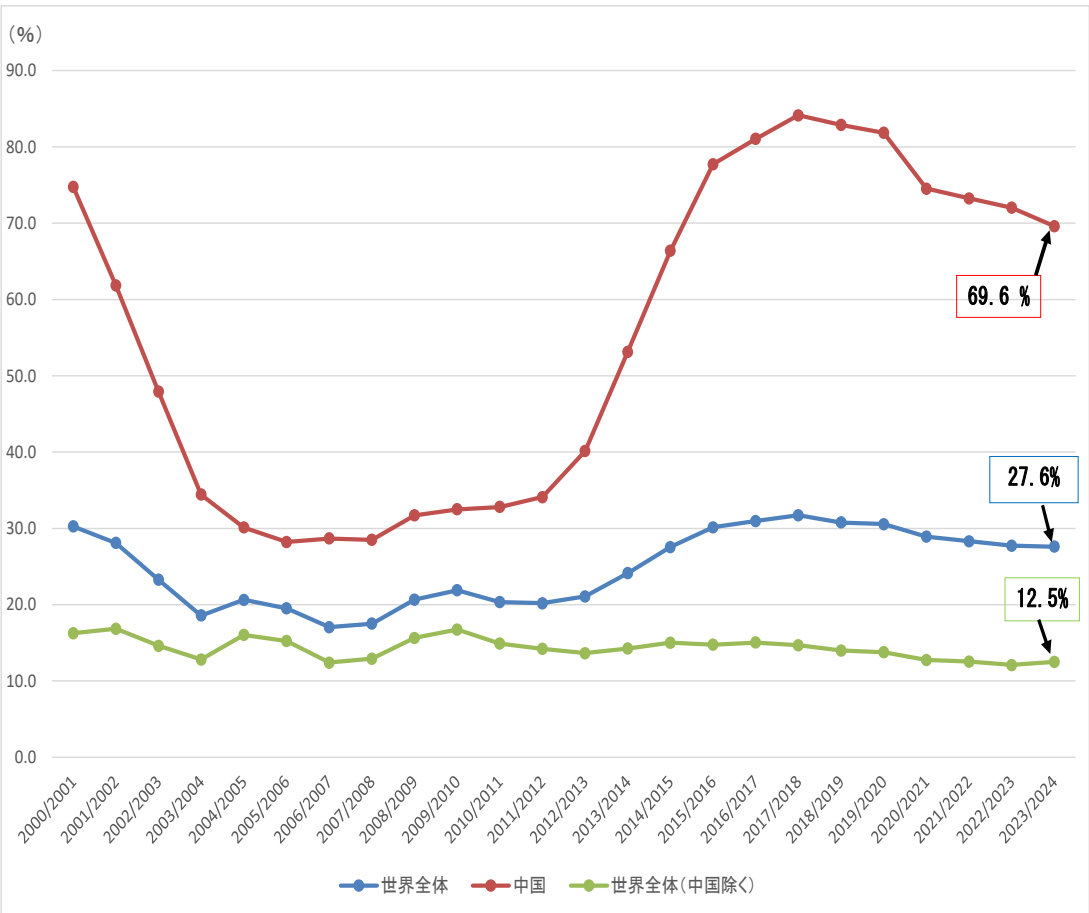


資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(August 2023)、「PS&D」

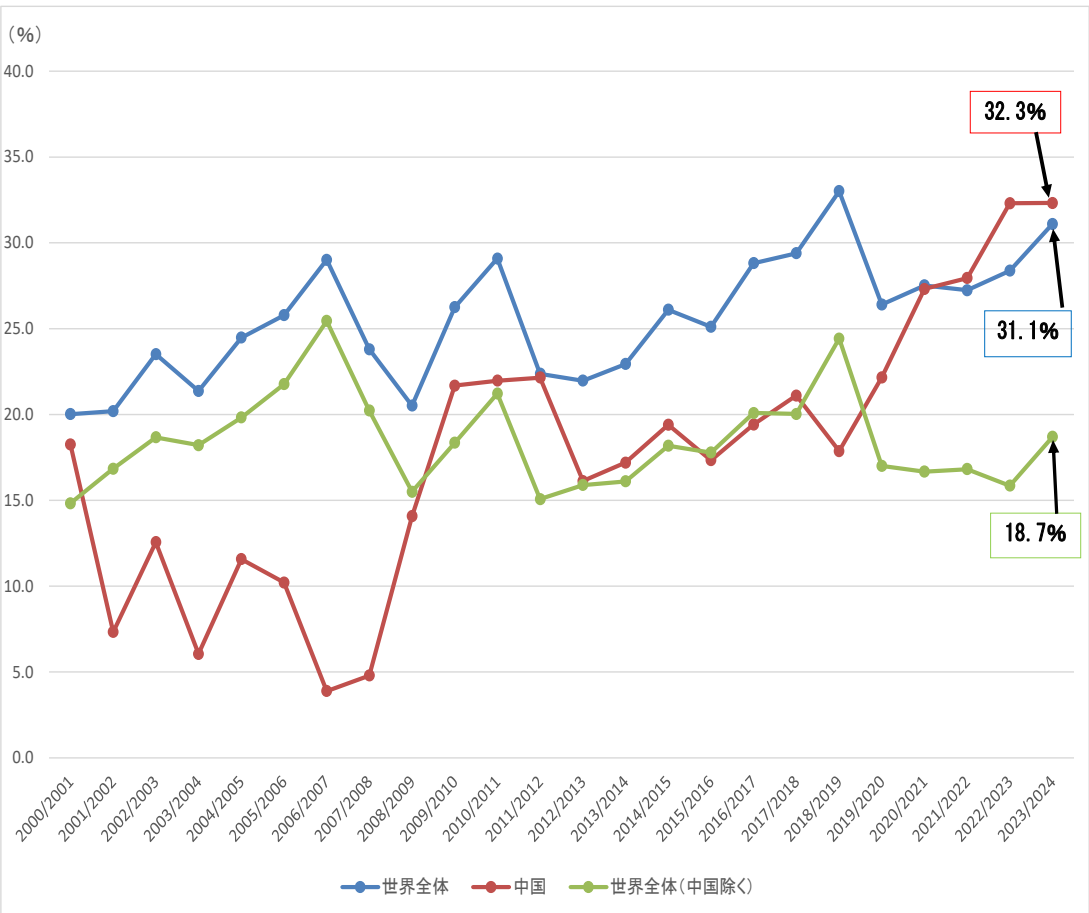
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(August 11, 2023)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

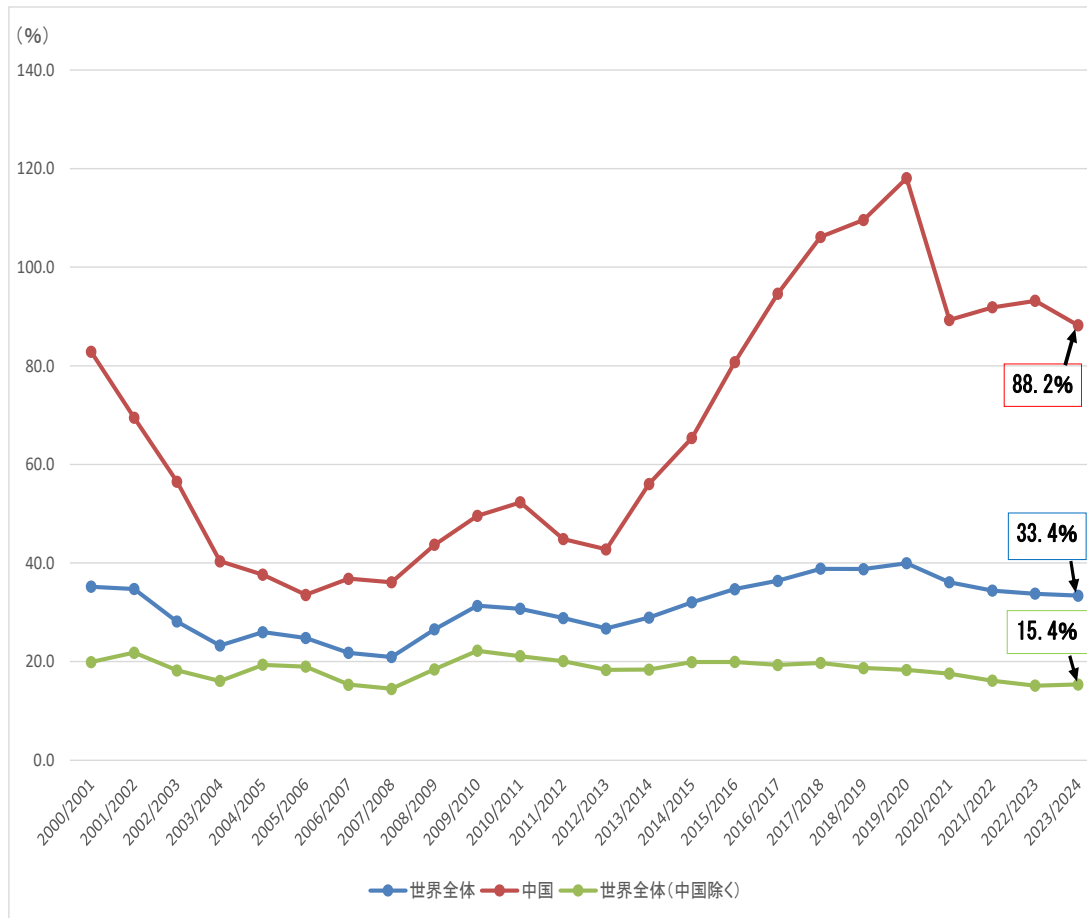
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

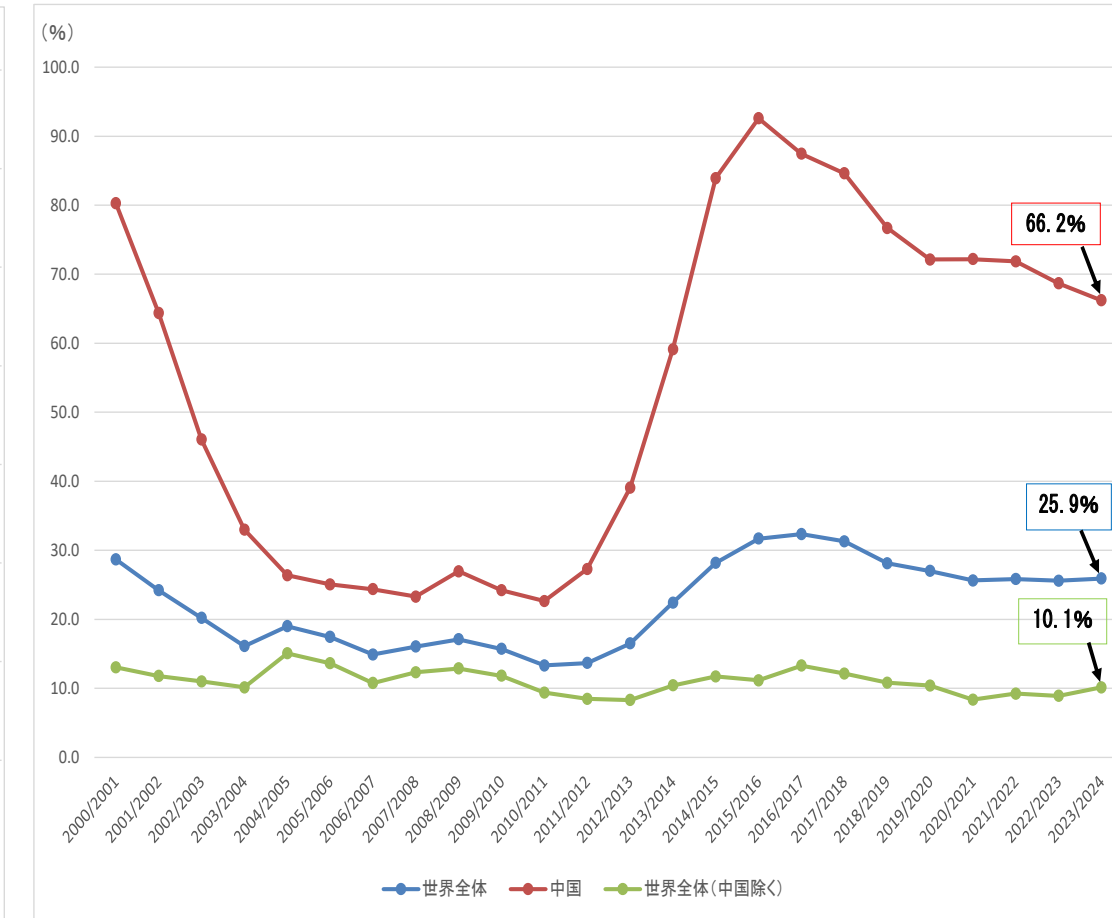
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料：米国農務省「PS&D」(August 11, 2023)

注：1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

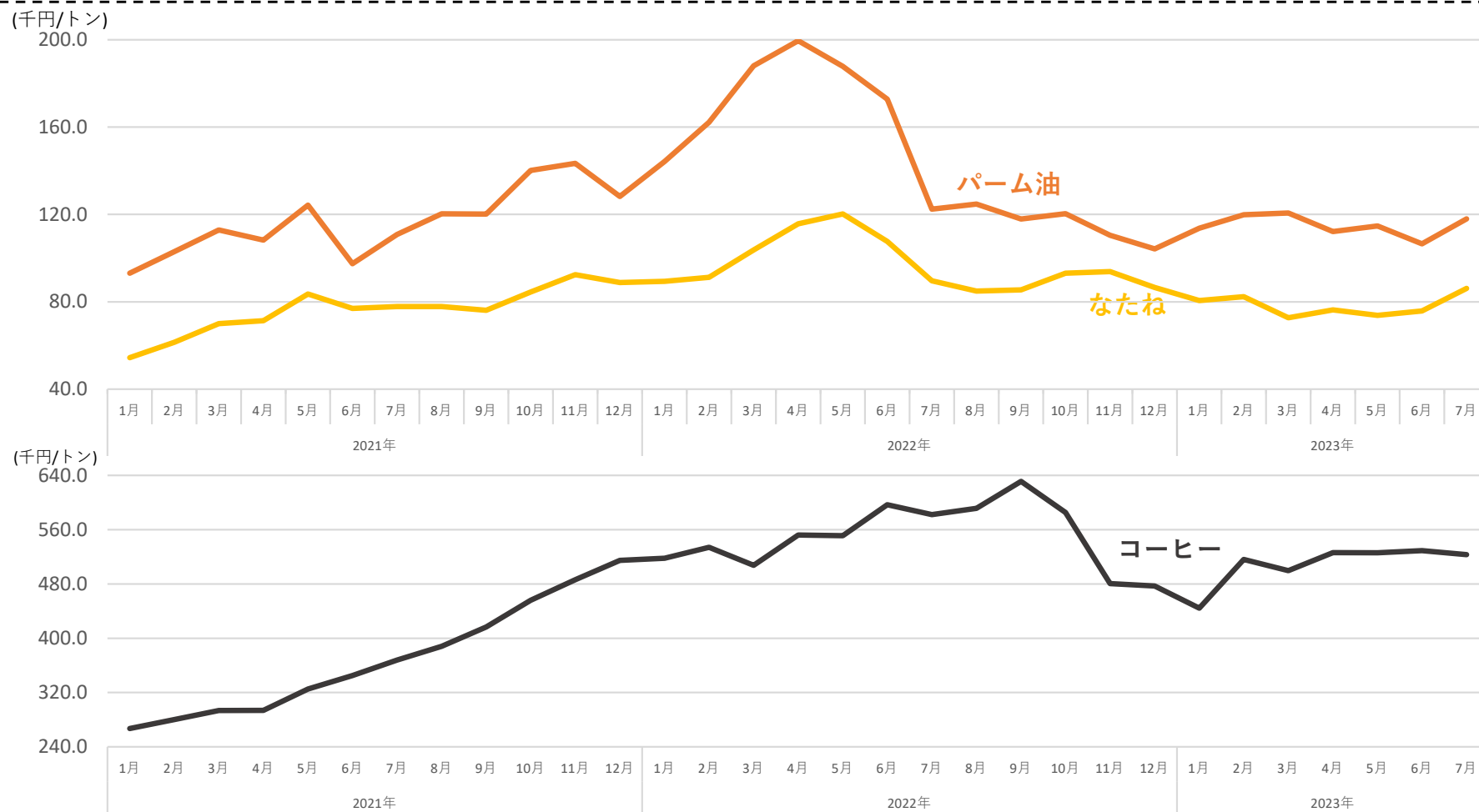
2)世界の期末在庫率(%)＝期末在庫量／(消費量＋輸出量－輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)＝中国の期末在庫量／(中国の消費量＋中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)＝中国除く期末在庫量／(中国除く消費量＋中国除く輸出量)×100

資料 4－1 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油について、需要の面では世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加などが市場価格上昇の要因であった。
- 供給面では、なたねについて、主産地であるカナダでは**2021年に熱波による減産があったが、2022年は回復基調から平年並みの収量に近づいた**。また、パーム油について、インドネシアの輸出禁止措置（**2022年5月23日解除**）があったが、マレーシアの生産量の増加によって供給不足の懸念が払拭された。いずれも前年の高値からは落ち着きが見られるものの、依然高止まりしている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面ではワクチン接種による経済活動の回復からコーヒー消費量が増加したことにより市場価格が上昇した。その後、消費地のインフレによる景況感の悪化やブラジルでの生産の回復によって市場価格は下降したが、高値が続いている。



2023年8月20日現在
□内は2020年4月以降の最高値。

パーム油
117.9 千円/トン
199.5千円/トン
(2022.4)

なたね
86.2千円/トン
120.3千円/トン
(2022.5)

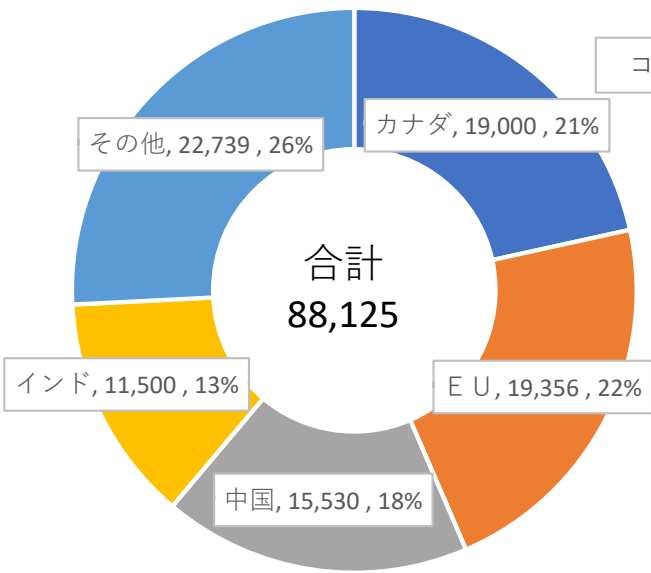
コーヒー
523.3千円/トン
631.1千円/トン
(2022.9)

※ なたねの国際価格についてはカナダウィニペグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料 4－2 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

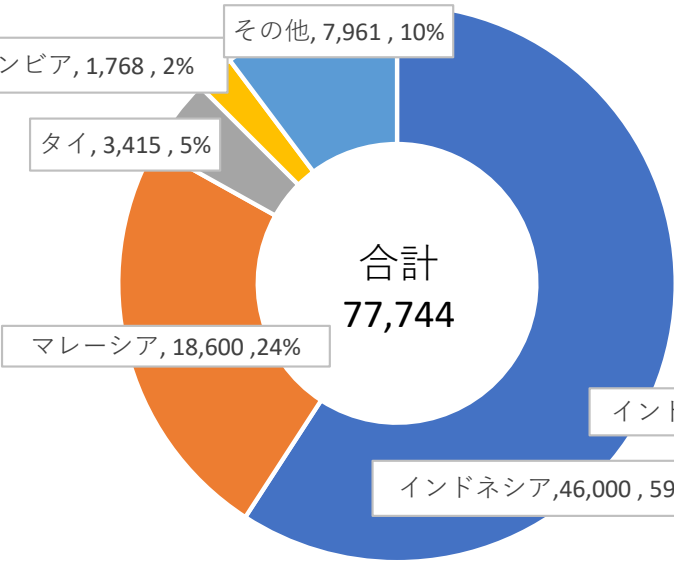
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2022/23）
（単位：千トン）



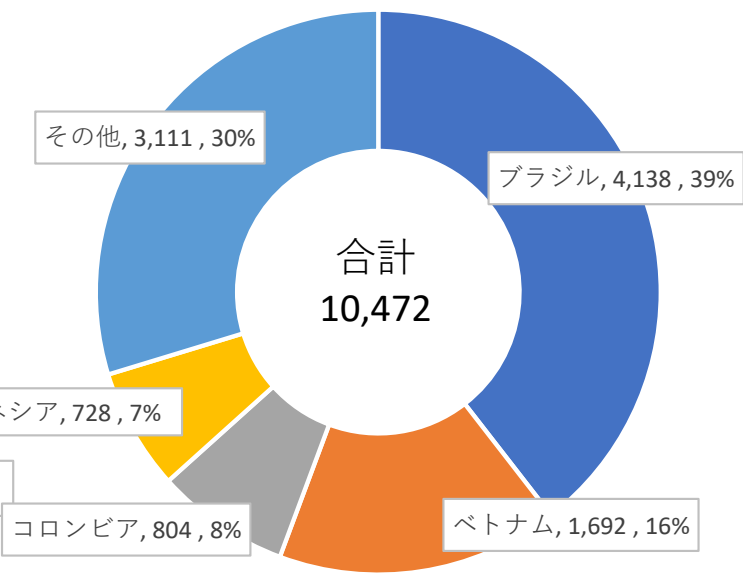
※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

パーム油生産量（2022/23）
（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

コーヒー生産量（2020/21）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2022年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	1,248	59.4%
オーストラリア	853	40.6%
その他	0	0.0%
合計	2,101	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	500	78.7%
インドネシア	135	21.3%
その他	0	0.0%
合計	635	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	112	28.7%
ベトナム	106	27.2%
コロンビア	47	12.1%
その他	125	32.1%
合計	390	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）

資料 4－3 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね 単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年												2023年						
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月
なたね	34.9	35.2	37.1	37.6	39.2	41.2	42.5	45.0	49.5	54.4	61.5	70.0	71.4	83.6	77.0	77.8	77.9	76.2	84.5	92.4	88.8	89.4	91.2	103.7	115.7	120.3	107.7	89.6	85.0	85.5	93.1	93.8	86.6	80.6	82.4	72.8	76.4	73.8	75.9	86.2
前月比	99.7	100.9	105.4	101.4	104.2	105.1	103.0	106.1	110.0	109.9	113.0	113.9	101.9	117.1	92.2	101.1	100.0	97.8	111.0	109.3	96.2	100.6	102.0	113.8	111.5	104.0	89.5	83.3	94.8	100.6	108.9	100.8	92.3	93.1	102.2	88.3	105.0	96.7	102.7	113.6
前年同月比	92.1	98.4	101.8	102.0	109.7	112.6	112.3	119.6	128.9	136.4	162.7	200.1	204.6	237.4	207.6	206.9	198.5	184.9	199.2	205.2	179.3	164.3	148.3	148.1	162.0	143.9	139.8	115.1	109.1	112.3	110.1	101.5	97.5	90.2	90.4	70.1	66.0	61.4	70.5	96.1

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油 単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年												2023年						
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月
パーム油	57.1	52.1	60.0	65.4	70.1	75.8	75.5	88.8	91.8	93.1	102.9	112.9	108.2	124.2	97.4	110.8	120.3	120.1	140.1	143.4	128.2	144.2	162.2	188.0	199.5	187.8	172.8	122.4	124.7	117.9	120.4	110.4	104.2	113.7	119.9	120.6	112.1	114.7	106.5	117.9
前月比	102.1	91.1	115.3	109.0	107.2	108.1	99.6	117.6	103.4	101.4	110.6	109.7	95.9	114.8	78.4	113.8	108.5	99.9	116.6	102.3	89.4	112.5	112.4	115.9	106.1	94.1	92.0	70.9	101.9	94.5	102.1	91.7	94.4	109.1	105.4	100.7	93.0	102.3	92.9	110.7
前年同月比	100.0	98.9	115.0	129.8	129.3	131.9	135.9	134.6	121.7	117.0	143.8	201.8	189.4	238.6	162.3	169.4	171.5	158.4	185.5	161.5	139.7	155.0	157.5	166.6	184.4	151.2	177.3	110.5	103.7	98.1	85.9	77.0	81.3	78.8	73.9	64.2	56.2	61.1	61.7	96.3

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料 4－4 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③コーヒ－

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年												2023年						
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月
コ－ヒ－	257.1	247.9	235.5	241.8	267.7	270.0	244.0	251.9	260.9	266.8	280.2	293.5	293.7	325.2	345.1	367.9	388.1	416.7	455.9	486.3	514.7	517.9	534.1	507.5	552.1	551.2	596.8	582.3	591.6	631.1	585.4	480.6	477.0	444.4	516.3	499.6	526.2	526.1	529.1	523.3
前月比	99.5	96.4	95.0	102.7	110.7	100.9	90.4	103.3	103.6	102.3	105.0	104.7	100.1	110.7	106.1	106.6	105.5	107.4	109.4	106.7	105.8	100.6	103.1	95.0	108.8	99.8	108.3	97.6	101.6	106.7	92.8	82.1	99.2	93.2	116.2	96.8	105.3	100.0	100.6	98.9
前年同月比	111.0	111.4	99.1	98.0	119.0	116.0	105.3	97.4	92.9	104.6	115.4	113.6	114.2	131.2	146.6	152.2	145.0	154.3	186.9	193.0	197.3	194.1	190.6	172.9	188.0	169.5	172.9	158.3	152.4	151.4	128.4	98.8	92.7	85.8	96.7	98.5	95.3	95.4	88.7	89.9

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 国際コーヒ－機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出
2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和5年7月の国内の加工食品の消費者物価指数は108.0～160.3（前年同月比で8.1%～26.8%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省） （令和5年1月～令和5年7月）

	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R5							
品目	平均	平均	平均	平均	平均	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	100.2	101.1	100.0	99.2	110.3	115.0	115.0	114.3	114.8	115.3	115.0	121.3	8.4%
即席めん	95.3	98.5	100.0	100.1	107.6	113.1	114.6	113.1	113.9	111.4	124.3	125.5	10.4%
豆腐	98.8	99.1	100.0	101.3	105.3	110.3	110.4	112.0	114.5	114.6	115.2	115.1	9.7%
食用油 (キャノーラ油)	101.5	100.9	100.0	106.9	144.4	164.0	163.9	164.3	163.0	164.1	162.1	160.3	9.9%
みそ	97.4	99.1	100.0	99.3	101.3	104.5	105.9	106.5	107.1	107.7	107.7	108.0	8.1%
マヨネーズ	100.8	100.7	100.0	105.6	125.6	137.3	137.2	139.0	148.6	152.3	153.0	153.9	23.0%
チーズ	100.9	101.3	100.0	98.7	107.5	119.2	121.4	121.9	133.9	134.5	134.8	134.7	26.8%
バター	99.5	99.9	100.0	99.9	99.2	98.6	98.6	98.9	109.8	111.2	111.4	112.3	13.3%
生鮮食品を 除く食料	97.9	99.0	100.0	100.2	104.1	108.7	109.4	110.2	111.6	112.1	112.7	113.4	9.2%

注1：令和2年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】 食品価格動向調査（農林水産省） （令和5年1月～令和5年8月）

	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R5									
品目	平均	平均	平均	平均	平均	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	97.9	101.3	100.0	98.6	107.8	111.5	110.7	111.3	111.3	111.3	111.3	116.5	118.6	1.8%	6.8%
即席めん	92.4	97.9	100.0	99.2	105.6	111.2	111.2	110.6	110.6	111.8	121.6	122.8	122.8	0.0%	10.4%
豆腐	100.1	100.9	100.0	100.6	103.7	108.5	108.1	110.2	113.7	114.1	115.0	114.6	114.6	0.0%	10.5%
食用油 (キャノーラ油)	97.9	103.5	100.0	104.1	140.7	162.2	162.2	161.9	161.2	161.2	160.6	160.0	158.7	-0.8%	7.0%
みそ	96.6	100.4	100.0	99.2	100.1	102.3	103.4	103.6	105.2	105.0	105.2	105.0	105.2	0.2%	4.8%
マヨネーズ	97.9	103.1	100.0	102.2	117.7	129.6	128.9	130.3	137.9	142.7	144.4	144.1	143.7	-0.3%	21.5%
チーズ	98.6	100.9	100.0	98.1	105.7	116.9	118.4	117.9	129.3	130.3	130.7	130.3	130.7	0.3%	25.1%
バター	99.0	99.5	100.0	99.8	99.1	98.6	98.6	98.4	108.9	110.3	110.7	111.4	111.4	0.0%	12.2%

注1：令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2：調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3：調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4：令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

○独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）

○2023年9月号（8月25日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）牛群の縮小続き、肥育牛価格は今年最高値を更新

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002882.html

（EU）23年1～5月の牛肉生産量は減少、枝肉価格は高水準も軟化傾向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002883.html

（豪州）成牛と畜頭数は堅調、牛肉輸出量は米国向けが急増

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002884.html

（NZ）22/23年度の牛肉生産量、輸出量ともに前年度を下回る見通し

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002885.html

◆豚肉

（メキシコ）23年の豚枝肉価格は下落傾向も高値で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002886.html

（ブラジル）22年の豚肉輸出量は2年連続で100万トンに到達

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002887.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆牛乳・乳製品

（米国）乳価の下落続く、乳製品輸出量も減少傾向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002888.html

（EU）5月の生乳取引価格、2年3カ月ぶりに前年同月を下回る

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002889.html

（NZ）GDT価格が急落、チーズは2年ぶりの4000米ドル台割れ

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002890.html

（中国）生乳生産量は好調も、乳価下落はなお止まらず

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002891.html

注）GDT価格…グローバルデイリートレード価格

◆飼料穀物

（世界：トウモロコシ）米国などの増産見込みを受けて期末在庫は前年度からかなりの程度増加

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002892.html

（世界：大豆）米国の減産見込みから大豆期末在庫は下方修正も、前年度比大幅増

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002893.html

（米国）23/24年度の作付面積は1944年以来3番目の拡大見込み

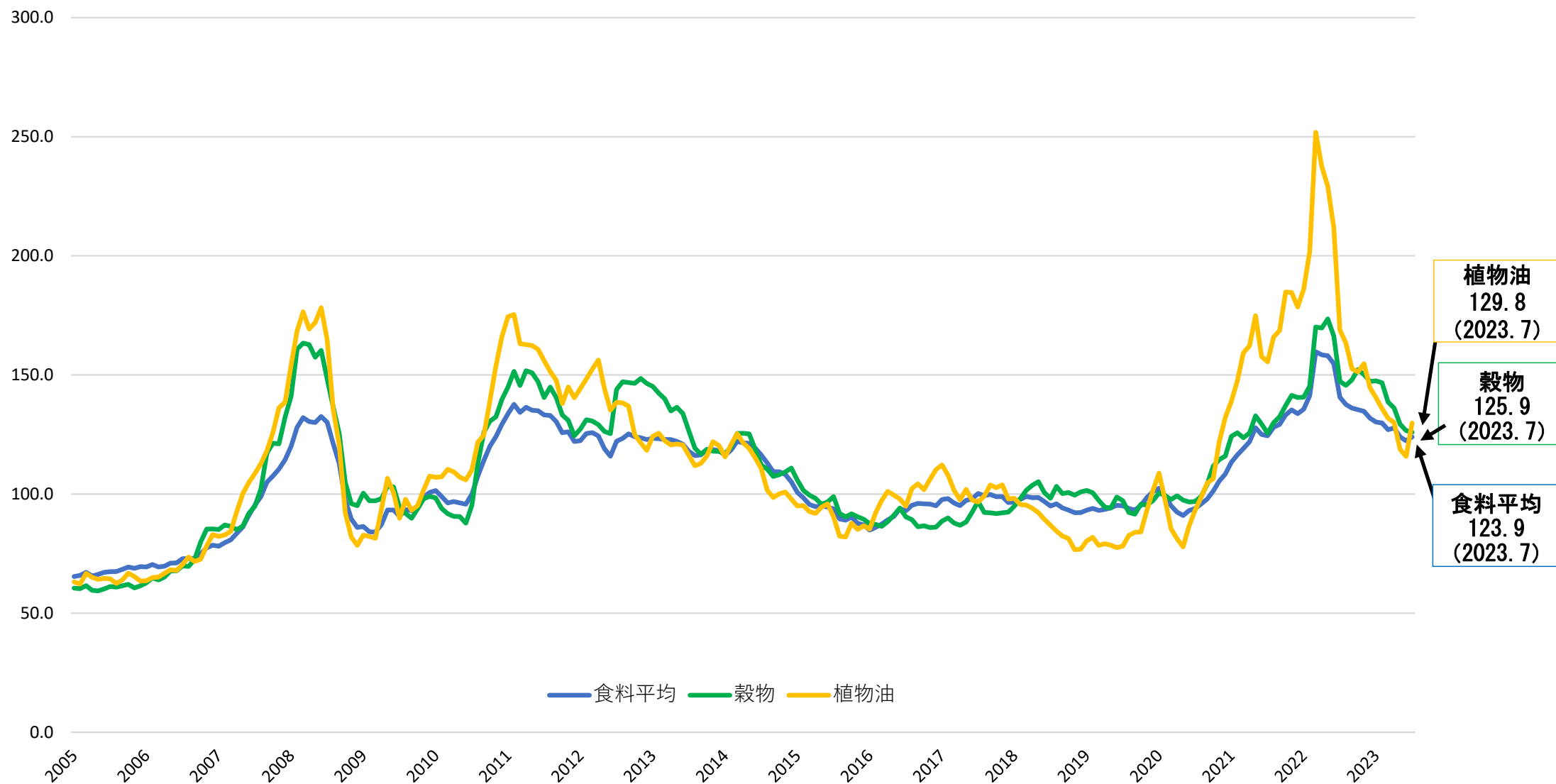
https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002894.html

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002895.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2023.8)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

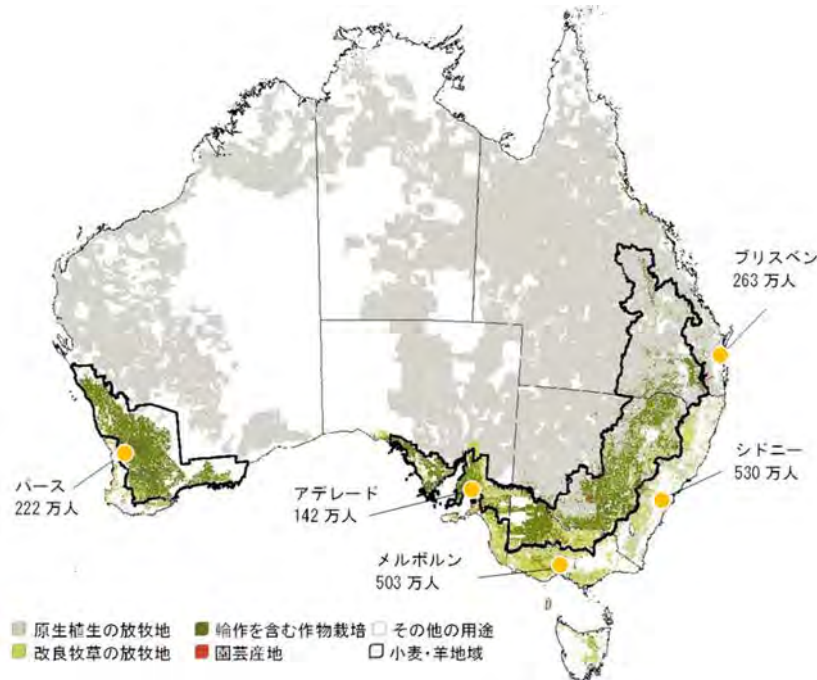
豪州の食料事情：食料安全保障をめぐる考え方

1. 広大な土地を生かした食料輸出大国

豪州の人口は、2,627 万人と日本の 2 割程度であり、シドニー、メルボルン、ブリスベン、アデレード、パースの五大都市に全体の 6 割以上の人口が集中しています。今後は移民の流入などにより、2033 年には 2,990 万人、2066 年には 3,740~4,920 万人まで増加する見通しとなっているほか、2022 年時点の平均年齢は 38.6 歳と先進国の中では比較的若く、2032 年にブリスベンでオリンピック開催が決定しているなど、今後も活気のある市場と言えます。

また同国の農畜産業は、国内総生産（GDP）の 2.4%、就業人口の 2.5%と、産業全体に占める割合は高くありませんが、国土面積が約 7 億 7,000 万ヘクタールと日本の約 20.3 倍の広さがあり、このうち約 55%に相当する 4 億 2,700 万ヘクタールが農業用地に利用されています。家畜の放牧は豪州のほとんどの地域で行われていますが、園芸作物などの栽培は比較的沿岸部に集中しています。この広大な土地を生かし、同国では農林水産物の生産が盛んで、農林水産業の総生産額の約 72%を輸出する輸出大国となっています。主な品目では、牛肉は生産量の 78%、小麦は 67%、砂糖は 84%、なたねは 65%、乳製品は 39%が、それぞれ輸出されています。

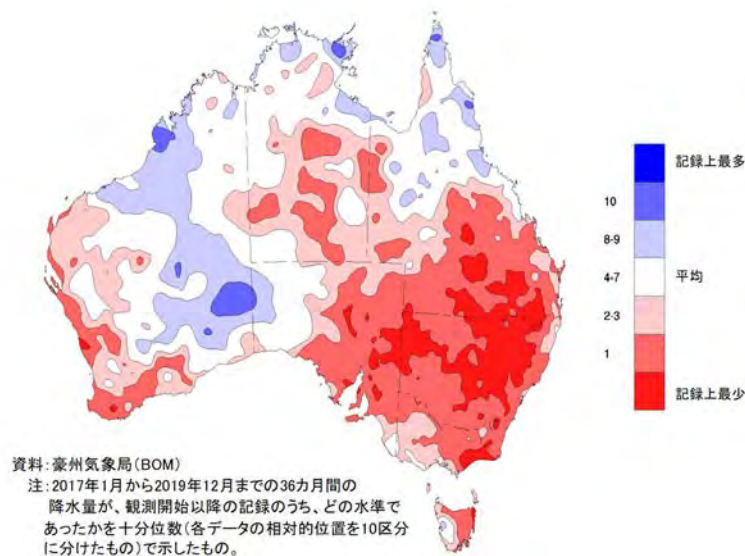
（豪州の農畜産業に利用されている土地）



2. 食料安全保障に対する影響要因と政府の基本姿勢

豪州の農畜産物生産を最も大きく左右する要素は気象変動ですが、主に豪州に干ばつをもたらすエルニーニョ現象や、豪雨や低温をもたらすラニーニャ現象などがあります。近年では 2017~2019 年にかけて、エルニーニョ現象に起因する大規模な干ばつにより、穀物生産や牧草の減少が見られました。2020 年以降はラニーニャ現象により、特に南東部で大雨による洪水などが発生し、農畜産物生産への影響やサプライチェーンの混乱が発生したため、レタス 1 玉が 11 豪ドル（1,075 円：1 豪ドル=97.77 円）になるなど、一部食料品が高騰しました。

(干ばつ時における降雨不足の状況)



このほか、新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) によるロックダウン下では、海外からの移民が自国に戻ったことなどにより、労働力不足が顕在化したことや、サプライチェーンの混乱により、スーパーマーケットの食料・商品棚が空になるなどの影響が出ました。

(COVID-19 のロックダウン下でのスーパーマーケットの商品棚 (2020 年 3 月))



こうした食料供給に支障を来す要因により一時的に消費者の選択肢が制限される可能性があるものの、豪州では国内消費量をはるかに超える、最大で約 7,500 万人分の食料を自国で生産していることから、食料安全保障の問題はないとしています。また、食品や飲料の 10% 強を海外から輸入していますが、豪州政府は加工品や季節外れの生鮮食品など、食の多様性に対する消費者の需要に応えるための輸入であるとしています。

3. 厳格な輸入等検疫体制

豪州は他国と比較しても、厳格な食品輸入規制を行っています。特に生の果物・野菜、乳製品、卵、肉製品、水産品等に対する規制が存在し、缶詰などのレトルト食品や調味料類でも、原則として 5% 以上の動物由来成分を含む場合は輸入許可が必要となります。

また豪州農林水産省では、特にバイオセキュリティに重点を置いた予算措置を行っています。農業団体も、気候変動対策とともに、バイオセキュリティは食料安全保障上、非常に重要な取り組みであるとしています。昨年、家畜疾病が発生しているインドネシアから入国した者が、検疫対

象物である食べかけのハンバーガーをカバンに入れて豪州に持ち込んだとして、2,664 豪ドル（26 万円）の罰金を課せられた事例が報道されていました。さらに豪州政府は、2022 年 11 月の法律改正により、違法食品を豪州に持ち込んだ者に対し、最高で 266,400 豪ドル（2,605 万円）の刑事罰または 4,440 豪ドル（43 万円）の過料に課すとして、罰則を強化しています。皆さんも豪州に旅行する際は、誤って検疫対象品を持ち込まないように、ご注意ください。

（空港での検疫探知犬による検疫対象物の探知活動）



今回は、食料安全保障をめぐる考え方や輸入等の検疫体制についてご説明させていただきましたが、次回は消費者トレンドと食品表示について、お話をさせて頂ければと思います。

文責：赤松 大暢
（日本貿易振興機構（ジェトロ）シドニー）

本稿は、世界各国・地域の駐在員の方々にご協力をいただき、最新の現地情報をご紹介します。日本とは異なる文化や経済、国土条件等を背景として、それぞれの国や地域における食料の生産、流通、消費の特徴や考え方、また、日本の食料品や文化等に対するイメージなどについてもご紹介したいと思います。

【データ・画像出典】

・豪州統計局

<https://www.abs.gov.au/statistics/people/population>

・豪州人口研究所

https://population.gov.au/sites/population.gov.au/files/2023-01/population_statement_2022_0.pdf

・豪州農業資源経済科学局（ABARES）

<https://www.agriculture.gov.au/abares/products/insights>

・豪州気象局

<http://www.bom.gov.au/climate/drought/knowledge-centre/previous-droughts.shtml>

- ・ 豪州連邦科学産業研究機構（CSIRO）

<https://www.csiro.au/en/work-with-us/services/consultancy-strategic-advice-services/CSIRO-futures/Agriculture-and-Food/Reshaping-Australian-Food-Systems>

- ・ マレー・ワット農業大臣メディアリリース

<https://minister.agriculture.gov.au/watt/media-releases/amendments-biosecurity-act>

- ・ ブリスベン空港

<https://www.bne.com.au/blog/behind-scenes/day-in-life-airport-detector-dogs>

(品目別需給編)

1 小麦

(1) 国際的な小麦需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2023/24 年度

生産量 前年度比  前月比 

- ・ウクライナ等で上方修正されたものの、EU、中国、カナダで下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

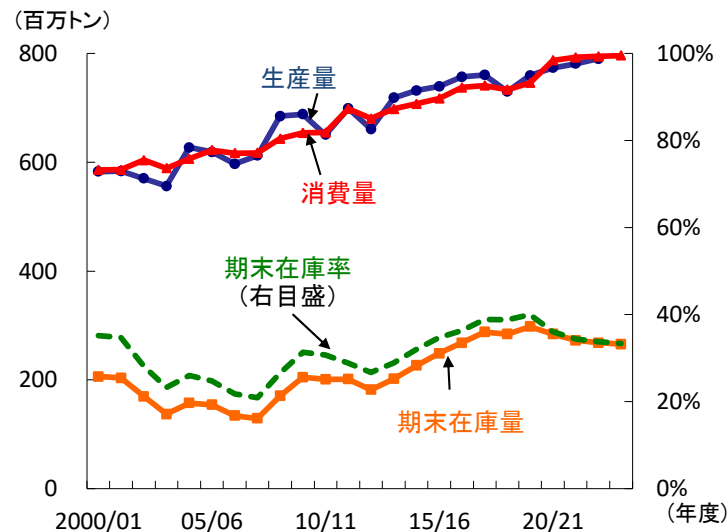
消費量 前年度比  前月比 

- ・ウクライナ等で上方修正されたものの、EU、中国等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比  前月比 

- ・ロシアで上方修正されたものの、カナダ、米国で下方修正され、前月から下方修正された。

期末在庫量 前年度比  前月比 



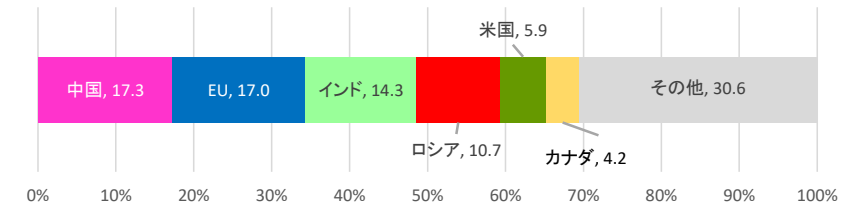
◎世界の小麦需給

(単位：百万トン)

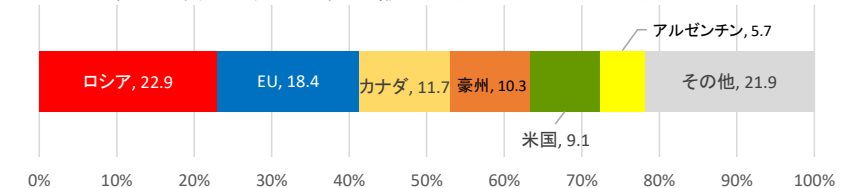
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	781.0	790.0	793.4	▲ 3.3	0.4
消 費 量	792.5	794.3	796.1	▲ 3.4	0.2
うち飼料用	161.1	156.7	156.6	▲ 0.5	▲ 0.0
輸 出 量	202.9	218.6	209.4	▲ 2.2	▲ 4.2
輸 入 量	199.4	211.0	207.4	▲ 0.6	▲ 1.7
期末在庫量	272.6	268.3	265.6	▲ 0.9	▲ 1.0
期末在庫率	34.4%	33.8%	33.4%	0.0	▲ 0.4

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (11 August 2023)

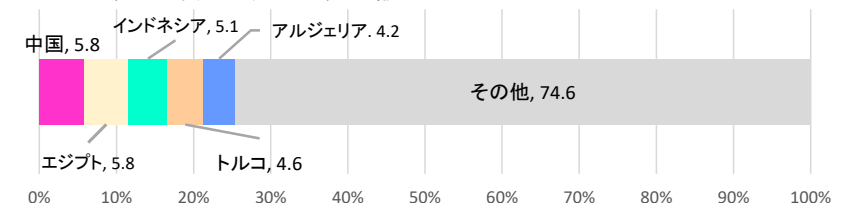
○ 2023/24年度の世界の小麦の生産量(793.4百万トン)(単位：%)



○ 2023/24年度の世界の小麦の輸出量(209.4百万トン)(単位：%)



○ 2023/24年度の世界の小麦の輸入量(207.4百万トン)(単位：%)



(2) 国別の小麦の需給動向

＜ 米国 ＞ 2023/24 年度の生産量は前月予測から下方修正され 47.2 百万トン

【生育・生産状況】米国農務省(USDA)によれば、2023/24 年度の実生産量は、乾燥天候による春小麦の減産から前月予測から 0.1 百万トン下方修正され 47.2 百万トンと、過去 5 年平均を 3.0% 下回るものの、前年度に比べ 5.1% 増加の見込み。

USDA「Crop Production」(2023.8.11)によれば、冬小麦は、前月予測から 0.6 百万トン上方修正され、33.4 百万トンと前年度に比べ 11.2% 増加も、春小麦は同 0.8 百万トン下方修正され 12.2 百万トンと同 6.8% 減少、デュラム小麦は同 0.1 百万トン上方修正され 1.6 百万トンとなるものの、同 10.3% 減少。品種別の前月予測からの変更は、冬小麦では、ホワイト小麦(WW)が下方修正されたものの、ハード・レッド・ウインター(HRW)、ソフト・レッド・ウインター(SRW)が上方修正され、春小麦ではハード・レッド・スプリング(HRS)等が下方修正された。

USDA「Wheat Outlook」(2023.8.14)によれば、春小麦の生育期間中の天候は、播種時には降雨が多かったものの、その後乾燥天候となり干ばつが広がった。8 月 8 日現在で、春小麦生産地帯の干ばつ地域の割合は、前月の 25% から拡大し 52% となり、前年度同期の 18% を大きく上回った。このため、単収は前月の 3.04 トン/ヘクタールから 2.81 トン/ヘクタールに低下した。

USDA の「Crop Progress」(2023.8.14)によれば、8 月 13 日時点で、主要生産 18 州の冬小麦の収穫進捗率は 92% と前年度同期(89%)を上回り、過去 5 年平均(92%)並みとなった。一方、主要生産 6 州の春小麦の収穫進捗率は 24% と、前年度同期(15%)を上回ったものの、過去 5 年平均(28%)を下回っている。

また、春小麦の作柄を示す「良～やや良」の割合は、42% と前週に比べ 1 ポイント上昇したものの、前年度(64%)を大きく下回った。州別には、特にワシントン州で前年度の 97% から 27% に大きく低下した。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の実輸出量は、輸出ペースが低調なことから前月予測から 0.7 百万トン下方修正され、19.1 百万トンと、前年度に比べ 7.7% 減少し、1972/73 年度以降最低となる見込み。輸出価格(HRW の FOB)は、冬小麦の収穫の進展から 7 月 7 日時点の 335 ドル/トンから、8 月 8 日時点で 322 ドル/トンに低下したものの、主要輸出国に比べると、ロシア、EU に比べ高く、世界市場において価格競争力がない。なお、米国産小麦の 2023 年 7 月の輸出量は 177.0 万トンと前年度同期(146.3 万トン)を上回るものの、過去 3 年平均(205.1 万トン)を下回った。

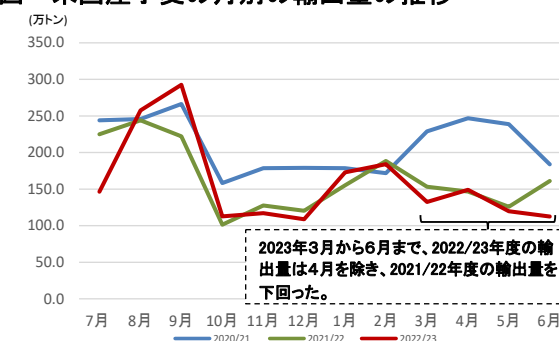
小麦－米国（冬小麦が全体の 7 割、春小麦は 3 割）

(単位: 百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年6月～24年5月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	44.8	44.9	47.2	▲ 0.1	5.1
消費量	29.8	30.8	30.7	▲ 0.1	▲ 0.2
うち飼料用	1.8	2.5	2.5	-	▲ 0.4
輸 出 量	21.7	20.7	19.1	▲ 0.7	▲ 7.7
輸 入 量	2.6	3.3	3.5	-	6.6
期末在庫量	19.0	15.8	16.8	0.6	6.1
期末在庫率	37.0%	30.7%	33.6%	1.8	3.0
(参考)					
収穫面積(百万ha)	15.03	14.36	15.33	0.06	6.8
単収(t/ha)	2.98	3.13	3.08	▲ 0.02	▲ 1.6

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」
「World Agricultural Production」(11 August 2023)

図 米国産小麦の月別の輸出量の推移



資料: USDA「Federal Grain Inspection Service Yearly Export Grain Totals」

表 米国産小麦の輸出量と輸出先国

2023年 (2023年7月)			2022年 (2022年1月～12月)			2021年 (2021年1月～12月)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
メキシコ	32.6	18.4	メキシコ	376.3	19.0	メキシコ	740.4	17.7
フィリピン	26.4	14.9	フィリピン	228.4	11.5	フィリピン	505.2	12.1
中国	15.2	8.6	日本	212.2	10.7	日本	435.1	10.4
チリ	11.6	6.6	韓国	122.1	6.2	韓国	293.3	7.0
台湾	10.8	6.1	ナイジェリア	117.3	5.9	中国	289.9	6.9
コロンビア	10.3	5.8	台湾	82.1	4.1	ナイジェリア	272.0	6.5
日本	10.1	5.7	イエメン	70.8	3.6	台湾	178.7	4.3
その他	60.0	33.9	その他	775.2	39.1	その他	1,476.6	35.2
計	177.0	100.0	計	1,984.4	100.0	計	4,191.2	100.0

資料: USDA「Federal Grain Inspection Service Yearly Export Grain Totals」

＜ カナダ ＞ 2023/24 年度の生産量は前年度に比べ 1.8%減の 33.2 百万トン

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2023.8.18)によれば、2023/24 年度の小麦全体の生産量は、乾燥天候の影響を受け、前月予測から 2.1 百万トン下方修正され、33.2 百万トンと、前年度に比べ 1.8%減少、過去 5 年平均に比べ 5.0%増加する見込み。

なお、カナダの西部、特にアルバータ州南部とサスカチュワン州西部で厳しい干ばつが継続しており、今後も単収に影響を及ぼす可能性がある。

品種別の生産量は、普通小麦（春小麦と冬小麦）、デュラム小麦とも干ばつにより単収が低下し、それぞれ前月予測から 1.3 百万トン下方修正の 28.3 百万トン(前年度比 0.3%減)、同 0.8 百万トン下方修正の 4.9 百万トン(前年度比 13.9%減)の見込み。

前年度に比べると、普通小麦、デュラム小麦とも減少するものの、デュラム小麦の減少幅が大きい見込み。なお、普通小麦は、収穫の進展に伴い平原三州の南部の干ばつによる被害の程度が判明し、単収が更に引き下げられる可能性がある。

カナダ各州政府によれば、①高温乾燥天候に見舞われていたサスカチュワン州では、8月中旬の各地の降雨が作物に好影響を与えたものの、収穫作業が一時中断し、収穫進捗率は、春小麦は 2%(同 n/a)、デュラム小麦は 2%(同 8%)となっている。②マニトバ州の収穫進捗率は、春小麦は 5%であり、州中央部で収穫作業が進展している。③アルバータ州では、乾燥天候であったものの、8月中旬にかけて降雨があり、小麦の成熟が徐々に進み、作柄状況を示す「やや良～良」の割合は、春小麦で 45%と前年度(77%)を大きく下回っており、デュラム小麦も 32%と前年度(46%)を下回っている。

【貿易情報・その他】AAFCによれば、2023/24 年度の輸出量は、生産量の減少による輸出余力の低下により、前月予測から 0.8 百万トン下方修正され、23.8 百万トンと、前年度と比べ 5.3%減少する見込み。

品種別の輸出量は、普通小麦は、前月予測から 0.1 百万トン下方修正され、19.8 百万トンと前年度に比べ 1.0%減少。また、デュラム小麦も、生産量の減少により、前月予測から 0.8 百万トン下方修正され、4.0 百万トンと同 15.8%減少する見込み。デュラム小麦は、乾燥天候による価格の高騰に伴い、相対的に安価な小麦を輸入してきた国々への輸出量が減少する可能性がある。

カナダ穀物委員会(Canadian Grain Commission)によれば、6 月の小麦（普通小麦、デュラム小麦）の輸出先国は、日本(10.8%)、アルジェリア(10.5%)、コロンビア(8.8%)の順。

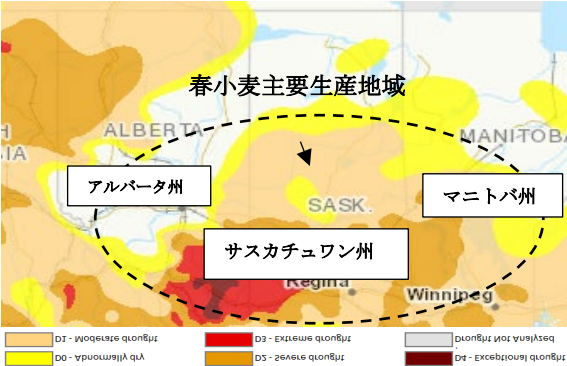
小麦－カナダ（春小麦を主に栽培）

(単位：百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24(23年8月～24年7月)			
			予測値、()はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	22.4	33.8	33.0 (33.2)	▲ 2.0	▲ 2.4	
消費量	10.2	10.0	9.1 (9.1)	-	▲ 9.0	
うち飼料用	5.2	4.5	4.0 (4.6)	-	▲ 11.1	
輸 出 量	15.1	25.5	24.5 (23.8)	▲ 2.0	▲ 3.9	
輸 入 量	0.6	0.6	0.6 (0.1)	-	9.1	
期末在庫量	3.7	2.5	2.5 (3.7)	-	-	
期末在庫率	14.5%	7.2%	7.6% (11.3%)	0.4	0.4	
(参考)						
面積(百万ha)	9.20	10.08	10.60 (10.72)	-	5.2	
単収(t/ha)	2.44	3.35	3.11 (3.10)	▲ 0.19	▲ 7.2	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 August 2023)
AAFC 「Outlook For Principal Field Crops」(18 August 2023)

図 カナダの干ばつ状況(2023 年 7 月 31 日現在)



資料：AAFC 「Canadian Drought monitor」

図 カナダ産小麦の輸出量、輸出先国

(輸入量：万トン、シェア：%)

2022/23年度 (2023年6月)			2022/23年度 (2022年8月～2023年6月)			2021/22年度 (2021年8月～2022年6月)		
国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア
日本	19.9	10.8	中国	271.3	11.9	日本	164.4	11.3
アルジェリア	19.3	10.5	インドネシア	183.1	8.0	インドネシア	137.9	9.5
コロンビア	16.2	8.8	日本	171.6	7.5	中国	106.6	7.3
チリ	11.0	6.0	ペルー	142.3	6.2	コロンビア	97.9	6.7
米国	10.6	5.8	イタリア	141.4	6.2	ペルー	84.2	5.8
ペルー	9.4	5.1	バングラデシュ	132.9	5.8	米国	82.9	5.7
その他	97.7	53.1	その他	1,246.0	54.4	その他	782.5	53.7
計	184.1	100.0	計	2,288.6	100.0	計	1,456.4	100.0

資料：Canadian Grain Commission

＜ 豪州 ＞2023/24 年度の生産量は前年度比 26.9%減の 29.0 百万トン

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく、29.0 百万トンと史上最高の前年度に比べ 26.9%減少する見込み。

また、豪州農業資源経済科学局 (ABARES)「Australian Crop Report」(2023.6.6)によれば、2023/24 年度の実生産量は、収穫面積の減少(前年度比 1.6%減)と単収の低下(同 32.8%減)から 26.2 百万トンと史上最高の前年度から 33.9%減少するものの、過去 10 年平均(26.4 百万トン)の水準となる見込み。

主要生産州では、ウェスタンオーストラリア州 (WA 州)の実生産量は、播種面積が前年度から 2 %減少(4.65 百万ヘクタール)し、単収も乾燥天候により減少するため、9.5 百万トンと前年度の史上最高の 14.0 百万トンから 32%減少するものの、過去 10 年平均 (9.6 百万トン) の水準となる見込み。また、ニューサウスウェールズ州 (NSW 州)の実生産量は、乾燥天候による単収の低下と播種面積の減少から、7.2 百万トンと前年度に比べ 30%減少するものの、過去 10 年平均 (7.4 百万トン) の水準となる見込み。

GIWA(西豪州穀物産業協会)(2023.8.18)によれば、WA 州の実生産量は、州中央部の大部分で気温が高く、乾燥天候となっているため、前月予測から 0.8 百万トン下方修正され、9.2 百万トンの見込み。

2023/24 年度の実小麦の播種は 7 月に全ての地域で完了している。7 月は WA 州や NSW 州では降水量が平年を下回った一方、土壌水分が豊富であった NSW 州(北部を除く)や ヴィクトリア州 (VIC 州)での作柄は良好であった。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、21.5 百万トンと前年度に比べ 33.8%減少の見込み。この輸出量の減少により、2022/23 年度に小麦輸入量の 46%を豪州から輸入したインドネシアでは、2023/24 年度の実輸入量が減少する見込み。また、豪州の伝統的な市場であるインドネシア、タイ、ベトナム等では、豪州産から生産量の回復したアルゼンチン産にシフトする可能性がある。

また、2022/23 年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく 32.5 百万トンであるも、中国やアジア諸国の需要増の見込みから、前年度を 18.2%上回る見込み。同年度の各月の輸出量は、豊富な輸出余力から、2022 年 10 月から 2023 年 5 月まで前年度同期を上回っていたが、2023 年 6 月の輸出量は 257.3 万トンとなり前年度を 5.2%下回った。輸出先国は、インドネシア(19.8%)、タイ(14.8%)、ベトナム(12.1%)の順。なお、6 月の中国向け輸出量は前月の 79.5 万トンから 13.7 万トンに減少した。

小麦－豪州(冬小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24(23年10年～24年9月)			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	36.2	39.7	29.0 (27.9)	-	▲ 26.9	
消 費 量	8.5	8.0	7.7 (8.2)	-	▲ 3.8	
うち飼料用	5.0	4.5	4.2 (4.5)	-	▲ 6.7	
輸 出 量	27.5	32.5	21.5 (21.0)	-	▲ 33.8	
輸 入 量	0.2	0.2	0.2 (0.3)	-	-	
期末在庫量	3.5	2.8	2.8 (1.8)	-	-	
期末在庫率	9.6%	7.0%	9.7% (6.3%)	-	2.7	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	12.73	13.05	12.50 (12.8)	-	▲ 4.2	
単収(t/ha)	2.85	3.04	2.32 (2.18)	-	▲ 23.7	

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 August 2023)
IGC 「Grain Market Report」(20 July 2023)

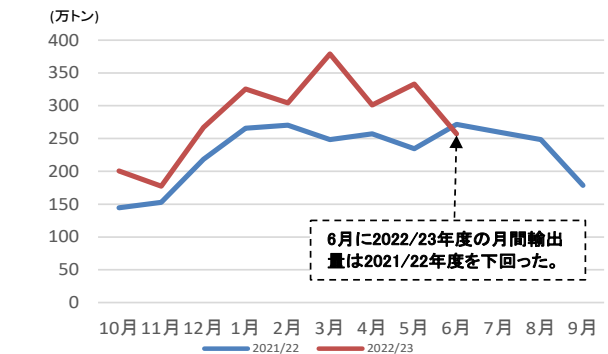
写真：施肥作業中の小麦圃場 (NSW 州 2023. 7. 30)



NSW 州中央部の圃場。同地域は、冬期にまとまった降雨があったが、同州北部では降雨が必要である。肥料散布では、圃場のスキヤニングとデータの視覚化による可変施肥法(不足部分に施肥)で行っている。この結果、肥料の利用効率も向上している。

写真: Profarmer Australia

図：豪州産小麦の月別輸出量 (2021/22 年度, 2022/23 年度)



資料：豪州統計局及び Profarmer Australia のデータをもとに農林水産省で作成

< EU27 > 東欧5か国：ウクライナ産小麦の輸入規制を継続

【生育・生産状況】欧州委員会(2023.7.27)によれば、2023/24年度のEU27の生産量は、前月予測から2.5百万トン下方修正され、前年度に比べ0.6%増加の134.7百万トンの見込み。

そのうち、普通小麦は前月予測から2.5百万トン下方修正され127.4百万トンと、前年度に比べ0.5%増加する見込み。また、デュラム小麦は前月予測からわずかに下方修正され7.3百万トンであるものの、同1.8%増加する見込み。国別では、普通小麦は、スロバキア等で上方修正されたものの、降雨不足によりドイツ、デンマーク、ポーランドで下方修正された。また、デュラム小麦は、スロバキアで上方修正されたものの、降雨不足によりフランス等で下方修正された。

主要生産国では、8月にヨーロッパ中央部、北部、東部で降雨があり、冬小麦の収穫が遅延した。

フランスアグリメール(2023.8.7)によれば、8月5日現在、フランスでは、デュラム小麦は収穫が終了、普通小麦の収穫進捗率は89%と過去5年平均の94%を下回った。また、2023/24年度の作柄状況を示す「とても良い～良い」の状態は、普通小麦が77%、デュラム小麦が67%とそれぞれ前年度同期の63%、55%を上回り、前年度に比べ作柄状況は良好となっている。フランス農業・食料・主権省によれば、現時点のたんばく質含有量は、普通小麦で11.5%と過去3年平均(11.2%)を上回っており、デュラム小麦で14%以上となっている割合はサンプルベースで76%と、5年平均(72%)を上回っている。

なお、USDAによれば、スペインは高温乾燥に見舞われており、2023/24年度の実産量は3.5百万トンと、過去5年平均(7.2百万トン)を51.4%下回っている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく38.5百万トンと、前年度に比べ11.6%増加する見込み。なお、現地情報会社によれば、EU産小麦は輸出が増加しているロシア産小麦との競合が懸念されており、フランス産はEU域外への輸出は減少するものの、天候不順に見舞われているスペイン等への輸出は増加する見込み。

ウクライナ産農産物の東欧諸国への過剰流入問題に関し、欧州委員会は、2023年4月28日、ポーランド、スロバキア、ハンガリー、ブルガリア、ルーマニアでのウクライナ産の小麦、とうもろこし、菜種、ひまわり種子のトランジットを除く輸入禁止を決定。その後、ポーランド等5か国は9月15日までに段階的に規制を廃止することを決定したものの、7月にEU委員会に5か国の共同書簡を提示し、規制の期限について協議している模様。

小麦－EU27（冬小麦を主に栽培）

(単位：百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24(23年7月～24年6月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	138.2	134.1	135.0 (134.6)	▲ 3.0	0.6	
消費量	108.3	108.0	107.5 (107.8)	▲ 2.0	▲ 0.5	
うち飼料用	45.0	44.0	43.0 (43.5)	▲ 2.0	▲ 2.3	
輸 出 量	32.0	34.5	38.5 (35.7)	-	11.6	
輸 入 量	4.6	12.2	7.0 (5.9)	-	▲ 42.6	
期末在庫量	13.3	17.2	13.2 (15.9)	▲ 1.5	▲ 23.3	
期末在庫率	9.5%	12.0%	9.0% (11.0%)	▲ 0.9	▲ 3.0	

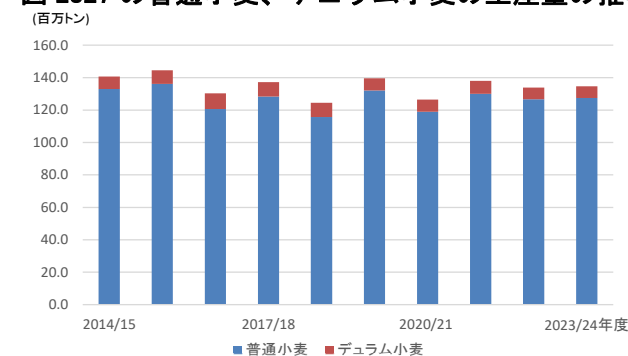
(参考)

収穫面積(百万ha)	24.28	24.32	24.30 (24.02)	▲ 0.05	▲ 0.1
単収(t/ha)	5.69	5.52	5.56 (5.60)	▲ 0.11	0.7

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 August 2023)

IGC 「Grain Market Report」(20 July 2023)

図 EU27 の普通小麦、デュラム小麦の生産量の推移



資料：EU委員会「Cereals Production Area and Yield」(2023.7.27)

写真 収穫を待つ小麦圃場（フランス 8月10日）



8月10日・11日に収穫を行った。
収穫作業は、小麦が乾燥した状態が望ましいものの、7月中旬から連日の少量の降雨があり、十分に乾燥させることは困難だった。収量は十分でなく、穂発芽しているものもあり、品質は悪い可能性がある。

＜ 中国 ＞ 2023/24 年度の生産量は、豪雨の影響で 3.0 百万トンの下方修正

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実産量は、収穫面積は増加したものの、収穫期にかけての豪雨により単収が低下し、前月予測から 3.0 百万トン下方修正され、137.0 百万トンの見込み。前年度に比べ、収穫面積は増加したものの単収の低下から、生産量は 0.5%減少。なお、農薬等の生産コストが増加しているものの、高価格水準による高収益性から、収穫面積は前年度に比べ増加している。

中国国家統計局によれば、播種面積は前年度に比べ 0.4%増加して 3.06 百万ヘクタール、単収は同 1.3%減の 5.83 トン/ヘクタールの見込みで、生産量は前年度に比べ 0.9%減少し 146.2 百万トンとなるものの、依然として高水準であり豊作となっている。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2023 年 6 月号」(2023.7.18)によれば、中国全土で冬小麦の収穫はほぼ終了した。なお、5 月下旬に河南省、陝西省中南部等で降雨により小麦の一部で穂発芽やカビが発生し小麦の品質が低下した。この降雨による被災面積は 1.86 万ヘクタールで、中国の小麦生産地の 8 %を占め、その 95%が河南省に集中した。国家統計局によれば、この影響により、河南省で 2.6 百万トン、陝西省で 0.1 百万トンの小麦を含む夏穀物の生産量がそれぞれ減少する見込み。

一方、国家気象センター「中国気象農業報道」によれば、春小麦は、8 月 7 日現在、黒竜江省で開花期から成熟期に入っており、甘粛省や新疆地区では乳熟期に入っている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく 12.0 百万トンと、期首在庫の減少により前年度に比べ 9.6%減少するものの、世界に占める中国の輸入量割合は 5.8%と、2 年連続の世界第 1 位となる見込み。

2022/23 年度の輸入量は、前月予測から 0.2 百万トン下方修正されたものの、13.3 百万トンと、1992/93 年度以降で最高となる見込み。中国税関統計によれば、2023 年 6 月の小麦の輸入量は 82.3 万トンと前月に比べ 28.6%減少した。2023 年 1 月から同年 6 月までの輸入量は 801.1 万トンと、前年同時期を 62.1%上回っている。この間の輸入先国のシェアは、豪州が 63.2%、カナダが 16.6%、フランスが 10.2%であり、この 3 か国で 90.0%を占めている。

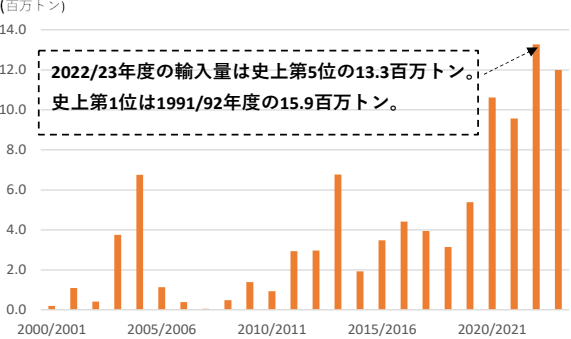
現地情報によれば、輸入国の多角化の一環で、輸入業者である中国の中糧集団（COFCO）とカザフスタンは中国への年間穀物輸出量を最大 100 万トンまで増やす計画を立てている。COFCO はカザフスタン農業省と協力し、中央アジアにおける農産物のサプライチェーンの構築を検討している。

小麦－中国（冬小麦を主に栽培）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24(23年7月～24年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	137.0	137.7	137.0 (136.5)	▲ 3.0	▲ 0.5
消 費 量	148.0	148.0	152.0 (149.5)	▲ 1.0	2.7
うち飼料用	35.0	33.0	36.0 (32.0)	-	9.1
輸 出 量	0.9	1.0	0.9 (1.1)	-	▲ 5.3
輸 入 量	9.6	13.3	12.0 (12.2)	-	▲ 9.6
期末在庫量	136.8	138.8	134.9 (139.1)	▲ 2.2	▲ 2.8
期末在庫率 (参考)	91.9%	93.2%	88.2% (92.4%)	▲ 0.9	▲ 5.0
収穫面積(百万ha)	23.57	23.52	23.70 (23.7)	0.10	0.8
単収(t/ha)	5.81	5.86	5.78 (5.76)	▲ 0.15	▲ 1.4

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 August 2023)
IGC 「Grain Market Report」(20 July 2023)

図 中国の輸入量の推移



資料：USDA 「PS&D」(2023. 8. 11)をもとに農林水産省で作成

表 中国の小麦輸入量と輸入先国

2023年6月			2023年1月～2023年6月			2022年1月～2022年6月		
国 名	輸入量	シェア	国 名	輸入量	シェア	国 名	輸入量	シェア
豪州	55.5	67.4	豪州	506.0	63.2	豪州	298.6	60.4
カナダ	7.9	9.6	カナダ	133.2	16.6	フランス	144.9	29.3
米国	7.3	8.8	フランス	82.0	10.2	カナダ	46.0	9.3
カザフスタン	5.4	6.6	米国	54.8	6.8	カザフスタン	1.8	0.4
フランス	4.5	5.4	カザフスタン	15.9	2.0	ロシア	1.3	0.3
ロシア	1.2	1.4	ロシア	5.7	0.7	日本	1.1	0.2
その他	0.6	0.7	その他	3.4	0.4	その他	0.5	0.1
計	82.3	100.0	計	801.1	100.0	計	494.1	100.0

資料：中国農業農村部資料をもとに農林水産省で作成

＜ ロシア ＞ 2023/24 年度の輸出量は史上最高の 48.0 百万トン

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の生産量(クリミア地域分を含まず)は、前月予測からの変更はなく、85.0 百万トンの見込み。播種期の降雨過多による収穫面積の減少と単収の低下から、生産量は史上最高であった前年度(92.0 百万トン)に比べ 7.6%減少するものの、過去 5 年平均(79.6 百万トン)を 6.8%上回る見込み。種類別の生産量は、冬小麦は前月予測から 1.0 百万トン下方修正の 60.5 百万トンと前年度に比べ 11.0%減少し、春小麦は前月予測から 1.0 百万トン上方修正され 24.5 百万トンと同 2.1%減少する見込み。なお、2023/24 年度は、冬小麦の収穫面積の減少が注目されるが、現地情報によれば、要因は低水準な小麦販売価格等による生産者の資金不足があるとみられている。

ロシア気象センターによれば、生育状況は、①ヨーロッパ部の中央連邦管区、南連邦管区等では、冬小麦や春小麦の一部が完熟期に達し、収穫が進展した。②アジア部のウラル連邦管区やシベリア連邦管区では冬小麦や春小麦の一部が黄熟期に入った。

ロシア農業省によれば、8 月 11 日時点までの小麦全体の収穫進捗率は 47.5%で、収穫済面積は降雨の影響を受け前年度同期を 0.2%下回る 14.15 百万ヘクタール。収穫済数量(品質調整前重量)は、前年度同期比 8.5%減少の 57.4 百万トン。なお、現地情報によれば、降雨により中央連邦管区等で冬小麦のタンパク質含有量が低い可能性もある。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、中東、北アフリカからの需要と輸出余力が十分なことから、前月予測から 0.5 百万トン上方修正され 48.0 百万トンと史上最高であった前年度を更に 4.3%上回る見込み。生産量は減少したものの、2023/24 年度のロシアの小麦供給量は、期首在庫と生産量とで 100 百万トンを超える見込み。現地情報会社によれば、黒海穀物イニシアチブ停止とそれに続くウクライナ河川港への攻撃後、ロシア産穀物の引き合いが強くなり、価格が上昇したことから、少なくとも一時的には穀物イニシアチブの履行停止はロシア産の利益率を高める結果になったとみられる。しかしながら、東欧諸国の大量の在庫等により、今後は欧州産の価格が低下し、ロシア産価格も低下する可能性があるとみられている。

現地情報会社によれば、2022/23 年度の輸出量は 4,806.8 万トンで過去 3 年平均(3,322.6 万トン)を 44.7%上回る。同年度の輸出先国は、エジプト(17.4 %)、トルコ(14.2%)、バングラデシュ(4.1%)の順。パトロシェフ農相によれば、ロシア産穀物の 96%は対口経済制裁を科していない国向けである。

小麦一口ロシア(主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年7月～24年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	75.2	92.0	85.0 (83.6)	-	▲ 7.6
消 費 量	41.8	42.3	42.0 (44.5)	-	▲ 0.6
うち飼料用	18.5	19.0	19.0 (19.5)	-	-
輸 出 量	33.0	46.0	48.0 (45.2)	0.5	4.3
輸 入 量	0.3	0.3	0.3 (0.2)	-	-
期末在庫量	12.1	16.1	11.4 (10.2)	▲ 1.0	▲ 29.1
期末在庫率	16.2%	18.3%	12.7% (11.3%)	▲ 1.2	▲ 5.6
(参考)					
収穫面積(百万ha)	27.63	29.00	28.30 (27.8)	0.80	▲ 2.4
単収(t/ha)	2.72	3.17	3.00 (3.01)	▲ 0.09	▲ 5.4

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 August 2023)
IGC 「Grain Market Report」(20 July 2023)

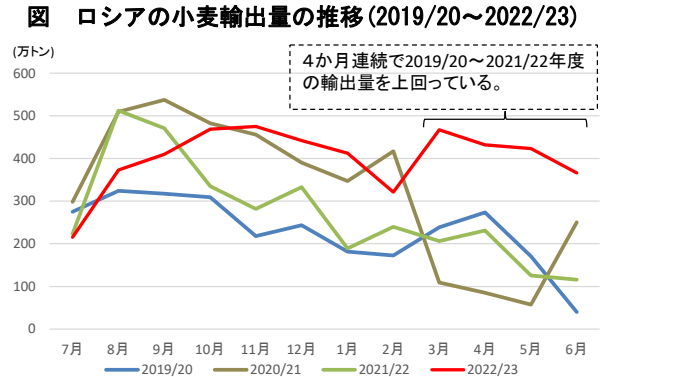


表 ロシア産小麦の輸出量と輸出先国

(輸入量: 万トン、シェア: %)

2023/24年度 (2023年7月)		2022/23年度 (2022年7月～2023年6月)		2021/22年度 (2021年7月～2022年6月)	
国 名	輸出量	国 名	輸出量	国 名	輸出量
トルコ	43.0	エジプト	836.8	トルコ	712.0
サウジアラビア	41.1	トルコ	682.1	イラン	586.7
エジプト	31.4	バングラデシュ	199.2	エジプト	504.0
イスラエル	14.7	パキスタン	155.2	カザフスタン	217.3
バングラデシュ	11.0	イラン	149.6	サウジアラビア	97.3
イエメン	10.4	アゼルバイジャン	136.9	アゼルバイジャン	95.9
タンザニア	9.4	カザフスタン	125.5	スーダン	71.2
その他	77.2	その他	2,521.5	その他	979.4
計	238.2	計	4,806.8	計	3,263.8

※7月は7月1日から21日
資料：現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

＜ウクライナ＞ 2023/24 年度の生産量は上方修正され 21.0 百万トン

【生育・生産状況】USDAによれば、2023/24年度の実産量(クリミア地域分を含む)は、良好な天候による単収の上昇と収穫面積の増加から、前月予測から3.5百万トン上方修正され、21.0百万トンとなるものの、前年度(21.5百万トン)を2.3%、5年平均(26.8百万トン)を21.7%それぞれ下回る見込み。

ウクライナ農業政策食料省によれば、8月10日現在、3.83百万ヘクタール(前年同期3.85百万ヘクタール)で冬小麦の収穫が行われ、収穫進捗率は82.4%(同81.7%)。また、単収は4.62トン/ヘクタール(同4.01トン/ヘクタール)で、収穫済数量は、17.7百万トン(同15.4百万トン)である。

【貿易状況・その他】USDAによれば、2023/24年度の輸出量は、生産量が上方修正されたものの黒海イニシアチブの履行が停止されたことから、前月予測からの変更はなく、10.5百万トンの見込み。前年度に比べ、期首在庫量が平年並みに減少するため、輸出余力が減少し、輸出量は37.5%減少する見込み。

ウクライナ政府等によれば、2023年7月の輸出量は82.4万トンと前年度同期に比べ119.1%増加したものの、戦争前の過去3年平均(2018/19年度～2020/21年度)に比べると26.9%の減少となった。7月の輸出先国は、ルーマニア(26.8%)、スペイン(20.6%)、トルコ(11.4%)の順。

現地報道によれば、黒海イニシアチブの履行停止により、鉄道、他国の港を活用するウクライナ産穀物の代替輸出ルートが検討されている。鉄道では、7月現在、ウクライナから近隣諸国を経由してEUの鉄道に接続するルートの選定、軌道幅工事の検討が行われている。海上輸送では、ドナウ川諸港を始め、バルト海諸港の利用拡大の動きがある。そのうち、ドナウ川ルート(ウクライナのレニ港等からドナウ川、スリナ運河を経由しルーマニアのコンスタンツァ港から輸出するルート等)の利用が最も期待されているものの、ロシアによる攻撃で穀物及び穀物施設が被害を受けるとともに、輸送料金が上昇している。また、バルト海諸港経由は物流コストが高いことが課題である。なお、2023年8月10日にウクライナ海軍は、ウクライナ側黒海諸港を利用する民間船舶のために臨時回廊を発表したものの、ウクライナ海運局は、ルーマニア、ブルガリア、トルコの領海に近いところを航行するように注意喚起をしている。

また、ウクライナ産農産物の東欧諸国への過剰流入問題に関し、欧州委員会は、2023年4月28日、ポーランド等5か国でのウクライナ産の小麦、とうもろこし、菜種、ひまわり種子のトランジットを除く輸入禁止を決定。その後、ポーランド等5か国は9月15日までに段階的に規制を廃止することを決定したものの、7月にEU委員会に5か国の共同書簡を提示し、規制の期限について協議している模様。

小麦－ウクライナ（主に冬小麦を栽培）

(単位:百万トン)

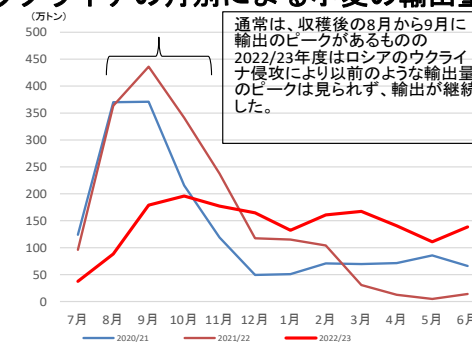
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24(23年7月～24年6月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	33.0	21.5	21.0 (23.2)	3.5	▲ 2.3	
消費量	10.5	8.4	8.1 (12.1)	1.0	▲ 3.6	
うち飼料用	4.5	3.4	3.5 (2.7)	1.0	2.9	
輸 出 量	18.8	16.8	10.5 (12.0)	-	▲ 37.5	
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	0.0	-	
期末在庫量	5.3	1.7	4.1 (2.0)	2.5	150.3	
期末在庫率	18.0%	6.5%	22.2% (8.1%)	13.2	15.7	

(参考)

収穫面積(百万ha)	7.41	5.60	4.80 (6.1)	0.50	▲ 14.3
単収(t/ha)	4.45	3.84	4.38 (3.83)	0.31	14.1

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 August 2023)
IGC 「Grain Market Report」(20 July 2023)

図 ウクライナの月別による小麦の輸出量の推移



資料: 現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

図 ドナウ川沿いのウクライナ産穀物の積み出し港



資料: Google をもとに情報会社で作成。

2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2023/24 年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・ウクライナで上方修正されたものの、米国、EU、中国等で下方修正され、前月から下方修正された。

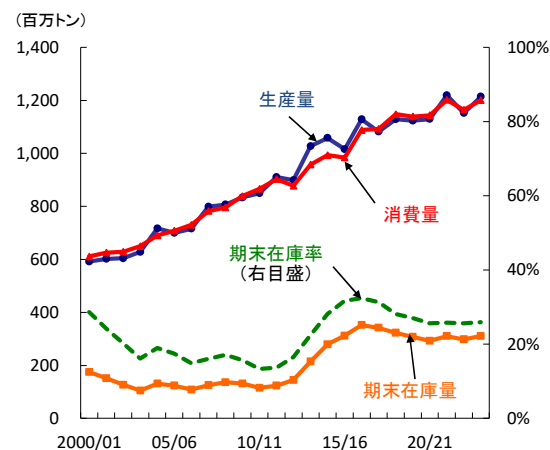
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・ブラジル等で上方修正されたものの、EU、米国等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・米国、EU で下方修正され、前月から下方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↑ 前月比 ↓



資料：USDA「PS&D」（2023.8.11）をもとに農林水産省にて作成

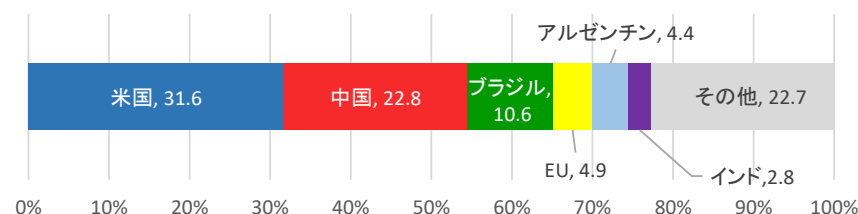
◎世界のとうもろこし需給

(単位：百万トン)

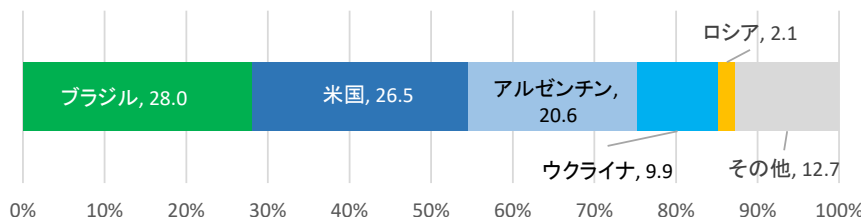
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生産量	1,218.7	1,151.8	1,213.5	▲ 11.0	5.4
消費量	1,201.4	1,164.1	1,200.4	▲ 6.3	3.1
うち飼料用	745.5	730.1	756.7	▲ 5.4	3.6
輸出量	206.6	177.5	196.2	▲ 2.1	10.5
輸入量	184.4	173.8	187.1	▲ 1.3	7.6
期末在庫量	310.2	297.9	311.1	▲ 3.1	4.4
期末在庫率	25.8%	25.6%	25.9%	▲ 0.1	0.3

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(11 August 2023)

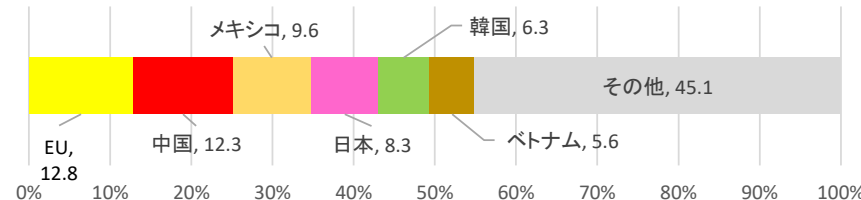
○ 2023/24 年度 世界のとうもろこしの生産量(1,213.5 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度 世界のとうもろこしの輸出量(196.2 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度 世界のとうもろこしの輸入量(187.1 百万トン) (単位：%)



（２）国別のとうもろこしの需給動向

＜ 米国 ＞ 単収の引下げにより、生産量は5.3百万トン下方修正

【生育・生産状況】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、今年度第1回目の作柄実績調査を受けて、単収が前月予測から0.15トン/ヘクタール引下げられたため、前月予測から5.3百万トン下方修正されたものの、収穫面積増等により前年度より10.1%増の383.8百万トンと、2016/17年度に次ぐ史上2番目の高水準となる見通し。

USDA「Crop Progress」（2023.8.14）によれば、8月13日現在で主要18州におけるドウ（ミルク上の穀粒が徐々に柔らかい固まりになっていく段階）進捗率は65%と、前年同時期（60%）、過去5年平均（63%）を上回っている。デント（穀粒に窪みができる段階）進捗率は18%と、前年同時期（15%）を上回り、過去5年平均（18%）と同水準。作柄評価が「良～やや良」の比率は59%と、7月から8月上旬にかけての降雨を受け前週（57%）から引上げられ、前年同時期（57%）を上回っている。9月以降、成熟期を迎えるとみられる。

【需要状況】USDAによれば、2023/24年度の消費量は、生産量の下方修正を受けた供給減により前月予測から1.1百万トン下方修正も、飼料用、エタノール用等の需要の増加により、前年度に比べ2.3%増の313.5百万トンの見通し。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の輸出量は、生産量の下方修正を受けて供給減により前月予測から1.3百万トン下方修正も、主要生産国の増産に伴う国際的なとうもろこし価格の低下を受けた輸出の回復期待から、前年度より26.1%増の52.1百万トンの見込み。2023/24年度に輸入が増加すると見込まれる中国への輸出をめぐり、ブラジル産等との輸出競争が激化する見通し。

USDA「Grain: World Markets and Trade」（2023.8.11）によれば、本年8月の米国産の輸出価格は、7月から8月上旬にかけての降雨を受け、前月から低下した。また、2023年輸出货量（1月1日～7月31日）は25.3百万トンと、前年同時期（2022年1月6日～8月6日）の39.3百万トンより36%減少。内訳はメキシコ（8.5百万トン）、日本（5.4百万トン）、中国（3.8百万トン）の順。

USDAによれば、2023/24年度の期末在庫量は、2023/24年の生産量が下方修正されたため、前月予測から1.5百万トン下方修正されたものの、前年度より51.2%増の55.9百万トンの見込み。期末在庫率は前年度より4.7ポイント上昇し、15.3%となる見込み。

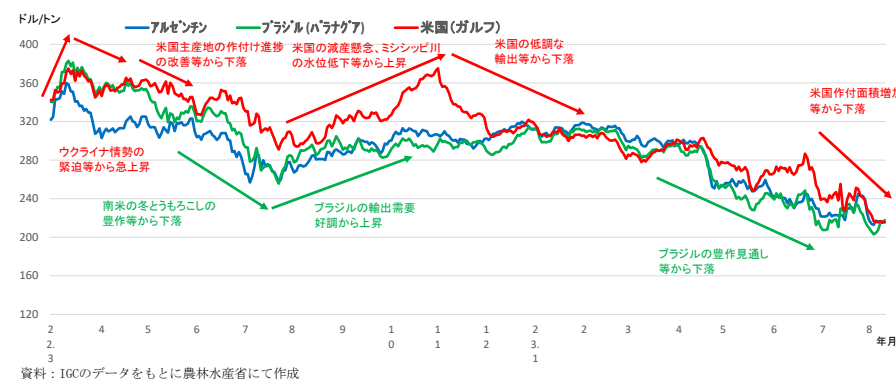
とうもろこし－米国

（単位：百万トン）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年9月～24年8月)		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	382.9	348.8	383.8	▲ 5.3	10.1
消 費 量	317.1	306.3	313.5	▲ 1.1	2.3
うち飼料用	145.3	137.8	142.9	▲ 0.6	3.7
エタノール用等	135.3	132.7	134.6	-	1.4
輸 出 量	62.8	41.3	52.1	▲ 1.3	26.1
輸 入 量	0.6	0.9	0.6	-	▲ 28.1
期末在庫量	35.0	37.0	55.9	▲ 1.5	51.2
期末在庫率	9.2%	10.6%	15.3%	▲ 0.3	4.7
（参考）					
収穫面積(百万ha)	34.53	32.05	34.93	-	9.0
単収(t/ha)	11.09	10.88	10.99	▲ 0.15	1.0

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」（11 August 2023）

図：米国、ブラジル、アルゼンチンのとうもろこし輸出価格（FOB）の推移



資料：IGCのデータをもとに農林水産省にて作成

＜ ブラジル ＞ 2022/23 年度の冬とうもろこしの収穫に遅れ

【生育・生産状況】USDAによれば、本年9月以降に作付けが開始される2023/24年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度より4.4%減の129.0百万トンの見通し。

ブラジル食料供給公社（CONAB）月例報告（2023.8.10）によれば、収穫がほぼ終了した2022/23年度の夏とうもろこしの生産量は、前年度比9.4%増の27.4百万トンの見込み。大豆収穫後の2月以降に作付けされ、収穫期を迎えている冬とうもろこしの生産量は、前年度比16.4%増の102.6百万トンの見込み。夏作・冬作の合計では前年度比14.9%増の130.0百万トンで史上最高の見込み（P.23 大豆－ブラジルのクroppカレンダー参照）。

夏とうもろこしについて、CONABによれば、収穫進捗率は99%であり、収穫が完了していた前年度同時期より遅れているものの、家族農業主体のわずかな地域を除きほぼ完了。

冬とうもろこしについて、USDAによれば、主要生産州の中西部のマット・グロッソ州では、7月に急速に収穫作業が進められ、収穫進捗率は95%となっているものの、6月の降雨の影響もあり、前年同時期（100%）は下回っている。一方、南部のパラナ州では、7月の降雨により収穫作業に遅れが出たが、7月末に乾燥した天候が広がり、作物の乾燥が加速し収穫が進展するとみられる。

【需要状況】USDAによれば、2023/24年度の消費量は、飼料用、加工用ともに需要増加等から、前年度より3.3%増の77.5百万トンと史上最高の見込み。なお、飼料用需要が前月予測よりさらに増加する見通しから前月予測から1.0百万トン上方修正された。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、史上最高となった前年度より1.8%減の55.0百万トンとなるものの、引き続き高水準の生産量と競争力のある安価な輸出価格から、2年連続で世界最大の輸出国となる見込み（右図参照）。

ブラジル貿易統計によれば、2023年1～7月の輸出量は15.9百万トンで、前年度比53%増。内訳は、日本（2.5百万トン）、中国（2.2百万トン）、韓国（1.4百万トン）の順。前年11月末以降開始された中国向けとうもろこし輸出は、大豆の輸出が一巡し、輸送や港湾の輸出キャパシティに余裕が出てきた7月以降、冬とうもろこしの輸出が本格化し始めている。7月の中国向け輸出量は0.9百万トンで、6月（0.2百万トン）の4.5倍。

とうもろこし－ブラジル

（大豆収穫後に栽培する冬とうもろこしが約8割、夏とうもろこしは約2割）

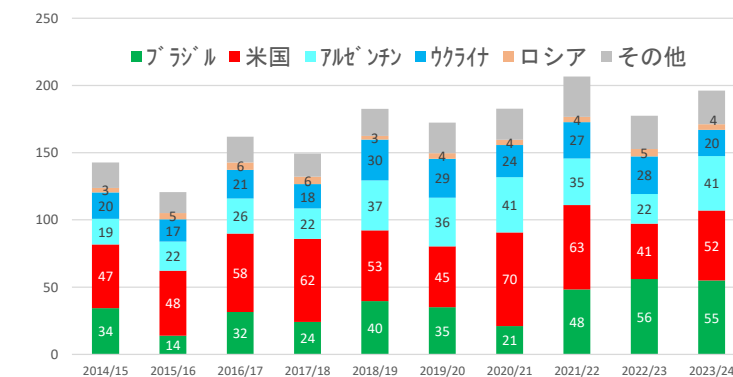
（単位：百万トン）

年 度	2021/22	2022/23 （見込み）	2023/24（24年3月～25年2月）			
			予測値、（ ）はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率（%）	
生産量	116.0	135.0	129.0 (130.2)	－	▲ 4.4	
消費量	70.5	75.0	77.5 (79.2)	1.0	3.3	
うち飼料用	59.5	62.5	63.5 (54.3)	1.0	1.6	
輸出量	48.3	56.0	55.0 (51.0)	－	▲ 1.8	
輸入量	2.6	1.0	1.2 (0.5)	－	20.0	
期末在庫量	4.0	9.0	6.7 (9.6)	－	▲ 25.6	
期末在庫率	3.3%	6.8%	5.0% (7.4%)	▲ 0.0	▲ 1.8	
（参考）						
収穫面積（百万ha）	21.80	22.50	22.90 (21.59)	－	1.8	
単収（t/ha）	5.32	6.00	5.63 (6.03)	－	▲ 6.2	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 August 2023)
IGC「Grain Market Report」(20 July 2023)

図：世界のとうもろこし輸出国の輸出量の推移

ブラジルが2年連続で世界第1位の輸出国となる見通し
（2023/24年度の輸出シェアは28%）



資料：USDA「PS&D」（2023.8.11）のデータをもとに農林水産省にて作成

＜ アルゼンチン ＞ 2023/24 年度の生産量は、前年度から回復する見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 9 月以降作付けが開始される 2023/24 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、高温・乾燥により生産量が激減した前年度から大きく回復する見通しから、58.8%増の 54.0 百万トンで史上最高となる見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所週報（2023.8.17）によれば、2022/23 年度の実収進捗率は 90%と、前年同時期（98%）を下回っている。生産量は、ブエノスアイレス州等主産地で長引く乾燥の影響で 34.0 百万トンとなり、2021/22 年度（52.0 百万トン）を 35%下回る見込み。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の実消費量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加に伴い需給が緩和し、飼料用需要が回復することから、前年度より 12.5%増の 13.5 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、高温・乾燥により減産した前年度から生産量が大きく回復し、供給余力が出てくる見通しから、前年度より 84.1%増の 40.5 百万トンの見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2023 年 1～6 月の輸出量は 10.5 百万トンで、2022/23 年度産が減産となった影響もあり、前年度同期比（18.6 百万トン）で 44%減。輸出先の内訳は、ベトナム（141.6 万トン）、ペルー（128.2 万トン）、アルジェリア（119.3 万トン）の順。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、2019 年 12 月 14 日、輸出税を約 7%から 12%へ引き上げ、継続している。2021 年 12 月 17 日、アルゼンチン農牧水産大臣は、とうもろこしと小麦の輸出に関し、国内向け穀物供給不足の回避と食料品価格の上昇を抑制するため、輸出上限数量を設定することを表明。2023 年 8 月中旬現在、とうもろこしの輸出上限数量は 2021/22 年度 36 百万トン、2022/23 年度 20 百万トンにそれぞれ設定されている。

なお、アルゼンチン政府は、今般の干ばつ対策として、農業関係者に対し、融資や減税、割引手形を発行するなどの救済施策を公表した。4 月 10 日には、各種税の支払い猶予措置などの救済施策を公表した。7 月 25 日、アルゼンチン政府は、輸出促進プログラムを発表し、優遇為替レート（1 ドル＝340 ペソ）にとうもろこしを追加した（期限は 8 月 31 日まで）。

とうもろこしーアルゼンチン

（単位：百万トン）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24（24年3月～25年2月）		
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	49.5	34.0	54.0 (61.0)	-	58.8
消 費 量	14.5	12.0	13.5 (20.4)	-	12.5
うち飼料用	10.5	8.0	9.3 (15.5)	-	16.3
輸 出 量	34.7	22.0	40.5 (40.9)	-	84.1
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.4)	-	-
期末在庫量	1.5	1.5	1.5 (4.8)	-	-
期末在庫率	3.0%	4.4%	2.8% (7.8%)	-	▲ 1.6
（参考）					
収穫面積(百万ha)	7.10	6.70	7.00 (8.50)	-	4.5
単収(t/ha)	6.97	5.07	7.71 (6.94)	-	52.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 August 2023)
IGC「Grain Market Report」(20 July 2023)

写真：北部サンタフェ州の遅植えとうもろこしの圃場風景 （7 月 26 日撮影）

本圃場のとうもろこしは完熟期にある。子実水分が多い状態であるため、
収穫作業は 8 月末を予定。



< 中国 > 主産地の降雨過多の影響を受け、生産量は3.0百万トン下方修正

【生育・生産状況】USDAによれば、2023/24年度の実産量は、7月の主産地の東北地区や華北平原における降雨過多により単収が引き下げられたため、前月予測から3.0百万トン下方修正され、前年度より0.1%減の277.0百万トンの見込み。

8月上旬現在、黒竜江省等が主産地の春とうもろこし、河南省等が主産地の夏とうもろこしともに、開花期からシルキング期を迎えている。

【需要状況】USDAによれば、2023/24年度の実消費量は、前月予測からの変更はなく、国際的なとうもろこし価格の低下と国内の経済成長を背景とした飼料用需要の増加から、前年度より1.7%増の304.0百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の実輸入量は、前月予測からの変更はなく、国内の飼料用需要の増加を背景として、国内価格が国際価格を上回っていることを受け、特に、前年末から開始されたブラジルからの輸入が増加すると予想されていることもあり、前年度より27.8%増の23.0百万トンの見込み。

農業農村部によれば、2023年1～6月の輸入量は、前年同期より11.5%減の1,203.3百万トン。内訳は、米国（469.4百万トン）、ウクライナ（433.5百万トン）、ブラジル（221.5百万トン）の順。2023年4月以降、米国産の輸入量が前年同月より大きく減少しており、背景として、米国産が他国産に比べて割高であることから輸入を取り止め、安価なブラジル産とうもろこしや豪州産小麦を飼料向けに代替する動きがあるとみられる。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報2023年6月号」によると、6月の国内価格は、豚価低迷と国内経済不調により飼料用需要と加工用需要が伸びず弱含みで推移しているものの、一部産地での高温と少雨が生育に対する市場の懸念を引き起こし、2,720元/トンと前月（2,720元/トン）から下げ止まった。また、6月の輸入価格は、2,520元/トンと前月（2,500元/トン）から上昇した。2022年12月以降、国内価格が国際価格を上回る状況が続いている。

USDAによれば、2023/24年度の期末在庫量は、供給量の引下げにより前月予測から3.0百万トン下方修正され、前年度より2.0%減の201.3百万トンの見込み。2023/24年度の期末在庫率は、前年度から2.5ポイント減の66.2%となる見込み。

とうもろこし—中国

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24（23年10月～24年9月）			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	272.6	277.2	277.0 (279.4)	▲ 3.0	▲ 0.1	
消 費 量	291.0	299.0	304.0 (305.5)	—	1.7	
うち飼料用	209.0	218.0	223.0 (205.0)	—	2.3	
輸 出 量	0.0	0.0	0.0 (0.1)	—	—	
輸 入 量	21.9	18.0	23.0 (20.0)	—	27.8	
期末在庫量	209.1	205.3	201.3 (169.9)	▲ 3.0	▲ 2.0	
期末在庫率	71.9%	68.7%	66.2% (55.6%)	▲ 1.0	▲ 2.5	

(参考)

収穫面積(百万ha)	43.32	43.07	43.00 (43.32)	—	▲ 0.2
単収(t/ha)	6.29	6.44	6.44 (6.45)	▲ 0.07	—

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 August 2023)
IGC「Grain Market Report」(20 July 2023)

表：中国のとうもろこし輸入量と輸入先国

2023年6月			2023年1月～2023年6月			2022年1月～2022年6月		
国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア
米国	122.7	66.5	米国	469.4	39.0	米国	843.5	62.0
ウクライナ	56.7	30.7	ウクライナ	433.5	36.0	ウクライナ	491.0	36.1
ブルガリア	4.8	2.6	ブラジル	221.5	18.4	ブルガリア	13.5	1.0
ロシア	0.3	0.2	ブルガリア	29.3	2.4	ミャンマー	5.4	0.4
ミャンマー	0.2	0.1	ロシア	20.2	1.7	ロシア	3.2	0.2
オランダ	0.0	0.0	ミャンマー	17.3	1.4	ラオス	2.3	0.2
その他	0	0.0	その他	12.1	0.9	その他	0.6	0.0
計	184.7	100	計	1203.3	100	計	1359.5	100

資料：中国農業農村部資料をもとに農林水産省で作成

＜ ウクライナ ＞ 2023/24 年度の生産量は、侵攻前の 2021/22 年度より 34.7%減

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実生産量は、降雨に恵まれたことから単収が上方修正されたことを受け、前月予測から 2.5 百万トン上方修正され、前年度より 1.9%増の 27.5 百万トンとなったものの、侵攻前の 2021/22 年度より 34.7%減となる見通し。

ウクライナ農業政策食料省によれば、8 月 10 日現在、2023/24 年度の実生産量は、前年度より 1.4%増の 28.1 百万トン。収穫予定面積は、前年度より 3.8%減の 4.06 百万ヘクタール。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の実消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 5.8%増の 5.5 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、供給量の減少及び主要輸出先である EU での増産による輸入需要の減少の影響を受け、前年度より 30.4%減の 19.5 百万トンの見込み。

ウクライナ政府等によれば、2022 年 10 月から 2023 年 7 月までの間の輸出量は 2,568 万トン（海上輸送、陸路等での全ての輸出が含まれる）。輸出先国は、中国（561 万トン）、ルーマニア（385 万トン）、スペイン（283 万トン）、イタリア（201 万トン）、エジプト（194 万トン）の順。

黒海穀物イニシアチブ「国連共同調整センター」によれば、輸出が再開された 2022 年 8 月 1 日から、停止された 2023 年 7 月 17 日までの間の黒海港湾からのとうもろこし輸出量は 1,687 万トン。主な輸出先は、中国（546 万トン）、スペイン（328 万トン）、イタリア（145 万トン）の順。

現地報道によれば、黒海イニシアチブの履行停止により、鉄道、他国の港を活用するウクライナ産穀物の代替輸出ルートが検討されている。詳細は、P.8 小麦－ウクライナ参照。

ウクライナ産農産物の東欧諸国への過剰流入問題に関し、欧州委員会は、2023 年 4 月 28 日、ポーランド、スロバキア、ハンガリー、ブルガリア、ルーマニアでのウクライナ産の小麦、とうもろこし、菜種、ひまわり種子のトランジットを除く輸入禁止を決定。その後、ポーランド等 5 か国は 9 月 15 日までに段階的に規制を廃止することを決定したものの、7 月に EU 委員会に 5 か国の共同書簡を提示し、規制の時期について協議されている模様。

とうもろこし－ウクライナ

（単位：百万トン）

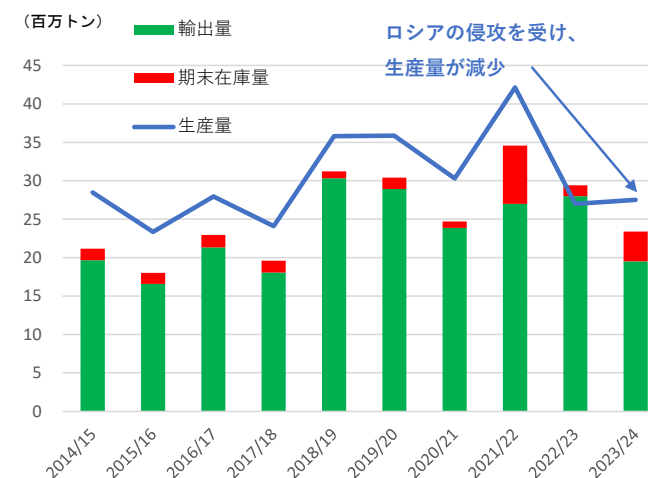
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)			
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	42.1	27.0	27.5 (24.0)	2.5	1.9	
消 費 量	8.4	5.2	5.5 (6.3)	-	5.8	
うち飼料用	7.2	4.0	4.5 (4.5)	-	12.5	
輸 出 量	27.0	28.0	19.5 (18.0)	-	▲ 30.4	
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-	
期末在庫量	7.6	1.4	3.9 (1.0)	2.5	179.9	
期末在庫率	21.5%	4.2%	15.6% (4.3%)	10.0	11.4	

(参考)

収穫面積(百万ha)	5.49	4.05	4.00 (5.46)	0.10	▲ 1.2
単収(t/ha)	7.68	6.67	6.88 (4.40)	0.47	3.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 August 2023)
IGC「Grain Market Report」(20 July 2023)

図：とうもろこしの生産量、輸出量、期末在庫量の推移

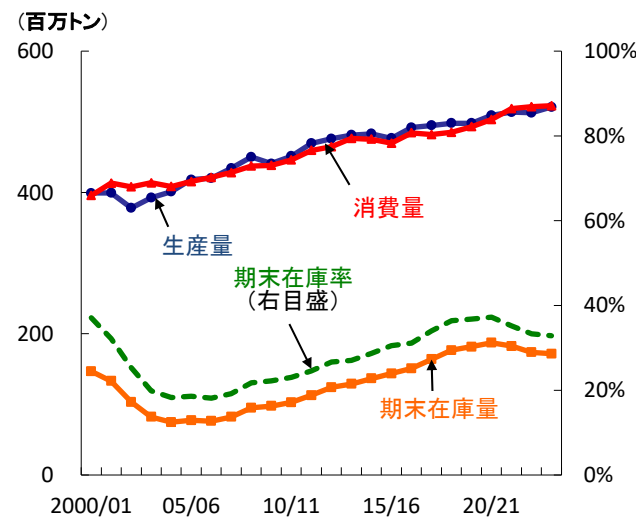


資料：USDA「PS&D」(2023. 8. 11) をもとに農林水産省にて作成。

3 コメ

(1) 国際的なコメ需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>			2023/24 年度	
生産量	前年度比	前月比	前年度比	前月比
・ 米国等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。				
消費量	前年度比	前月比	前年度比	前月比
・ インド等で上方修正されたものの、ベトナム等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。				
輸出量	前年度比	前月比	前年度比	前月比
・ パキスタン、ベトナム等で上方修正も、インド等で下方修正され、前月から下方修正された。				
期末在庫量	前年度比	前月比	前年度比	前月比



資料：USDA「PS&D」（2023. 8. 11）をもとに農林水産省にて作成

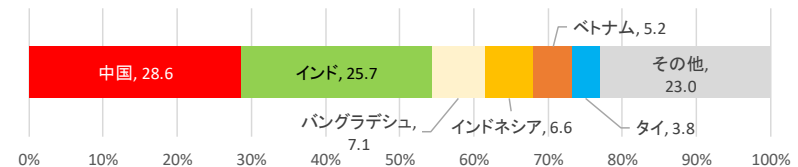
◎世界のコメ需給

（単位：百万精米トン）

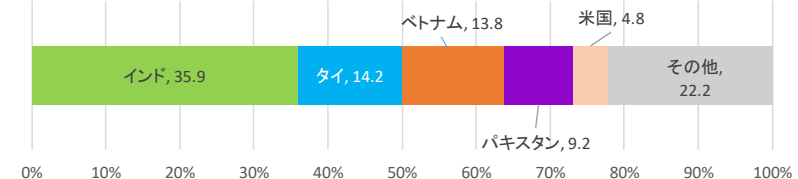
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	513.9	512.8	520.9	0.2	1.6
消 費 量	518.8	521.5	523.0	▲ 1.0	0.3
輸 出 量	56.9	54.6	53.0	▲ 3.4	▲ 2.9
輸 入 量	54.4	53.6	50.6	▲ 3.5	▲ 5.5
期末在庫量	182.5	173.8	171.8	1.4	▲ 1.2
期末在庫率	35.2%	33.3%	32.8%	0.3	▲ 0.5

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（11 August, 2023）

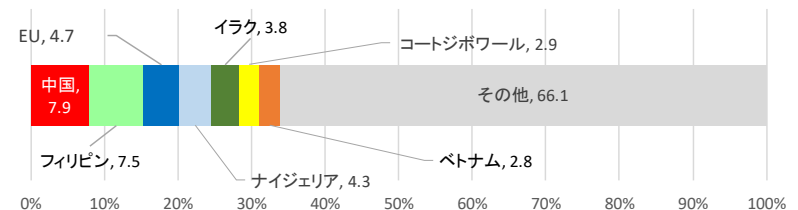
○ 2023/24年度 世界のコメの生産量(520.9百万トン) (単位：%)



○ 2023/24年度 世界のコメの輸出量(53.0百万トン) (単位：%)



○ 2023/24年度 世界のコメの輸入量(50.6百万トン) (単位：%)



(2) 国別のコメの需給動向

< 米国 > 2023/24 年度の生産量は単収の増加見込みから前年度比 27.1%増

【生育・生産動向】USDA によれば、2023/24 年度の生産量は、前月予測から 0.1 百万トン上方修正され、前年度比 27.1%増の 6.5 百万トンと、2020/21 年度以来の高水準の生産量となる見込み。7 月末から 8 月上旬にかけて行われた USDA の第 1 回目の作柄実績調査によれば、豊富な灌漑用水が確保されていると思料されること等から、単収が前年度比 4.2% (0.11 トン/ヘクタール) 増加する見込み。

同「Crop Progress」(2023.8.14) によれば、8 月 13 日時点で主要生産 6 州の出穂率は 87%と、前年同期 (82%)、過去 5 年平均 (83%) を上回っている。収穫進捗率は 14%と前年同期及び過去 5 年平均 (いずれも 10%) を上回っている。7 月から続く記録的な高温により、主としてアーカンソー州など長粒種の産地の作柄に影響があったため、主要生産 6 州の作柄評価は「良～やや良」が 67%と、前年同期 (75%) を下回っている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度比 3.4%増の 4.9 百万トンと、史上最高の見込み。増産による国内供給量の増加で国内取引価格が下落していることも背景にある。

2023/24 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、国内での生産量増加に伴う中・短粒種の輸入減少から、前年度比 0.8%減の 1.2 百万トンの見込み。

2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加と、それに伴う米国産米の新穀収穫後の価格低下の見通しから、前年度比 25.1%増の 2.5 百万トンの見込み。

USDA 「Rice Outlook」(2023.8.15) によれば、8 月 8 日までの週のイラク向け長粒種 (2 等、碎米 4 % 混入) の価格は 760 ドル/トンと、本年 1 月末より、2008 年 10 月初旬 (772 ドル/トン) 以来の高値となっている (P.20 の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照)。地中海向けカリフォルニア米 (1 等、碎米 4 % 混入) である中粒種の価格は 1,650 ドル/トンと、前年 12 月末より史上最高の価格水準が続いている。

なお、米国産米の国内農家出荷価格について、中・短粒種は前月から変更がないものの、長粒種の価格は、15.5 ドル/cwt (341.7 ドル/トン) と、前月から 1 ドル/cwt (22.0 ドル/トン) 上昇した。背景にはインドの輸出規制強化 (2023 年 7 月 20 日～) がある。

コメー米国

主に長粒種はミシシッピ川沿いで栽培、中・短粒種のシェアは 1/4
米国のコメ生産に占めるカリフォルニア州のシェアは約 2 割

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年 8 月～24年 7 月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	6.1	5.1	6.5	0.1	27.1
消 費 量	4.8	4.8	4.9	-	3.4
輸 出 量	2.7	2.0	2.5	-	25.1
輸 入 量	1.2	1.2	1.2	-	▲ 0.8
期末在庫量	1.3	0.8	1.0	0.1	26.9
期末在庫率	17.0%	11.5%	13.3%	0.7	1.8
(参考)					
収穫面積(百万ha)	1.01	0.88	1.07	-	21.6
単収(もみt/ha)	8.64	8.28	8.63	0.11	4.2

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」 (11 August, 2023)

写真：アーカンソー州の生育状況の風景 (8月2日撮影)。



撮影者：ケネス・グラベス氏 (アーカンソー州コメ生産者協会会長)

< インド > 降雨不足と高温から作柄に懸念

【生育・生産動向】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、史上最高であった前年度の収穫面積が減少する（前年度比 1.5%減）との予想から、前年度比 1.5%減の 134.0 百万トンの見込み。単収は、史上最高だった前年度と同水準の見込み。

7 月前半までは降雨不足により作付けが遅れていたが、7 月後半に降雨があり土壌水分が十分に改善したことから、7 月末には平年を上回る作付けペースとなった。8 月に入り、平年のような豪雨は北東部及びガンジス川沿いに限られ、他の地域は平年より少ない降雨、又は降雨が全くない状況。これを受けた土壌水分不足に加え、高温が作物に悪影響を与えている。インド気象局によると、8 月は 1901 年の統計開始以来、最も乾燥した天候となる見通し。

インド農業農民福祉省によると、カリフ米の作付済み面積は、8 月 11 日時点で 32.8 百万ヘクタールと、降雨不足で作付けが遅れた前年同期（31.2 百万ヘクタール）に比べ 1.6 百万ヘクタール多い状況。作付け進捗率は 82.2%（前年度は 78.3%）。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の消費量は、国内価格の高騰抑制を目的とする輸出規制強化を受けた消費量の増加から、前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、前年度比 1.8%増の 115.0 百万トンと史上最高の見込み。なお、前年度に引き続き、政府の低所得世帯向け食料配給（約 8 億人が対象）向けにコメが供給される見込み（2022/23 年度は 58 百万トンと消費量の半分に相当）。

2022 年 9 月 9 日に、カリフ米の生産減少による国内価格高騰を抑制する観点から、碎米の輸出禁止、及び、主に中近東向け等に輸出されるバスマティ米（香り米）やパーボイルド米（蒸米）以外のコメへ輸出税を賦課（20%）する輸出規制を発動した。更に、引き続き国内価格が上昇していることから、更なる国内価格抑制と国内の供給量確保のため、本年 7 月 20 日にバスマティ米・パーボイルド米以外の精米の輸出を禁止した。こうした動きを受け 2023/24 年度の輸出量は、規制強化による輸出量の減少から、前月予測から 4.0 百万トン下方修正され、前年度比 9.5%減の 19.0 百万トンの見込み。ただ依然として世界第 1 位の輸出国に変わりなく、世界の輸出量の 36%を占める見込み。

USDA「Grain: World Markets and Trade」（2023.8.11）によれば、インド産米（碎米 5 %混入）の価格は、輸出規制強化後はデータがないものの、規制前までの輸出価格は 485 ドル/トンと、アジア主要輸出国の中で依然として最低水準の価格となっている（P.20 の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照）。

2023/24 年度の期末在庫量は、前月予測から 4.0 百万トン上方修正され、前年度と同水準の 36.0 百万トンの見込み。

コメーインド

雨季をカリフ、乾季をラビと呼ぶ。北部はカリフ・ラビ（小麦）の二毛作、南部はカリフ・ラビの二期作。主にインディカを栽培

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年 9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	129.5	136.0	134.0 (136.8)	-	▲ 1.5	
消 費 量	110.5	113.0	115.0 (114.0)	1.0	1.8	
輸 出 量	22.0	21.0	19.0 (22.2)	▲ 4.0	▲ 9.5	
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-	
期末在庫量	34.0	36.0	36.0 (31.4)	4.0	-	
期末在庫率	25.7%	26.9%	26.9% (23.1%)	3.5	-	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	46.28	47.70	47.00 (47.00)	-	▲ 1.5	
単収(もみt/ha)	4.20	4.28	4.28 (2.88)	-	-	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 August, 2023)
IGC「Grain Market Report」(20 July, 2023)（単収は精米t/ha）

図：インドのコメ輸出量と輸出先国

(2022 年 4 月～2023 年3月)

(単位：万トン)

品種別	2022/23	シェア
非バスマティ米	1778.6	79.6%
バスマティ米	455.9	20.4%
合計	2234.5	100.0%

※年度は2022年4月～2023年3月

非バスマティ米輸出先国	2022/23	シェア
1 ベナン	155.8	8.8%
2 中国	150.4	8.5%
3 セネガル	133.3	7.5%
4 コートジボワール	121.1	6.8%
5 トーゴ	94.0	5.3%
合計	1778.6	100.0%

バスマティ米輸出先国	2022/23	シェア
1 イラン	99.9	21.9%
2 サウジアラビア	95.4	20.9%
3 イラク	36.4	8.0%
4 アラブ首長国連邦	31.5	6.9%
5 イエメン	29.0	6.4%
合計	455.9	100.0%

資料：インド政府統計をもとに農林水産省にて作成。

< 中国 > 一期作稲、南部の二期作晩稲の生育は順調

【生育・生産動向】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度の干ばつから回復して収穫面積が増加し、史上最高の単収が見込まれることから、前年度比2.1%増の149.0百万トンと、史上最高となる見込み。なお東北部では、政府の大豆作付け推進政策により、コメの作付面積が減少傾向にある。

中国中央气象台（2023.8.7）によれば、①一期作稲は7月末現在、生育状況は平年並みとなっており、平均単収は2022年と同水準と予想される。東北地域の一期作のほとんどが穂ばらみ期にあり、長江流域の大部分は分げつ期・節間伸長期に、その他一部地域では穂ばらみ期にそれぞれ入っている。また、西南地域では、ほとんどの地域が穂ばらみ期・出穂期にあり、一部地域は乳熟期に入っている。②二期作晩稲は7月末現在、成長段階は大部分の地域において平年並みか、若干早いペースで進んでいるものの、湖南省など一部の地域は約1週間遅れている。長江下流の大部分の地域の二期作晩稲は、移植期及び緑化期・分げつ期に入っており、また、長江下流の南部及び華南地域の大部分は、三葉期及び移植期・緑化期に入っている。

なお、二期作早稲米の収穫は終了した。国家統計局の「2023年早稲収量データ」（2023.8.23）によると、収穫面積は減少も、単収の増加から、総生産量は28.3百万畝トンと、前年から0.8%増加した。

USDA「Weekly Weather and Crop Bulletin」（2023.8.15）によれば、8月上旬から中旬にかけて平年並みの降雨があり、南部の水田の土壌水分量が改善され、生育期にある稲の生長に好条件となった。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、とうもろこしの前年度並みの生産見込みを受けた飼料用米の消費量の減少から、前年度比1.9%減の152.0百万トンの見込み。

2023/24年度の輸入量は、飼料用とうもろこしの需要増から、前月予測から0.1百万トン下方修正され、前年度比8.7%減の4.0百万トンの見込み。

中国海関統計によれば、2023年6月の輸入量は16.8万トン（前年同期比74.5%減）、1～6月の輸入量は180.5万トン（前年同期比49.3%減）となった。

なお、中国はこれまで、とうもろこし等飼料用穀物の価格高騰を背景に、飼料用等として低価格の碎米をインド等から輸入してきたが、2022年9月以降、インドの輸出禁止等により輸入量は減少している。

コメー中国

北部で一期作、南部で二期作。ジャポニカ(粳)米は東北地区、江蘇省等で栽培、生産シェアは3割程度

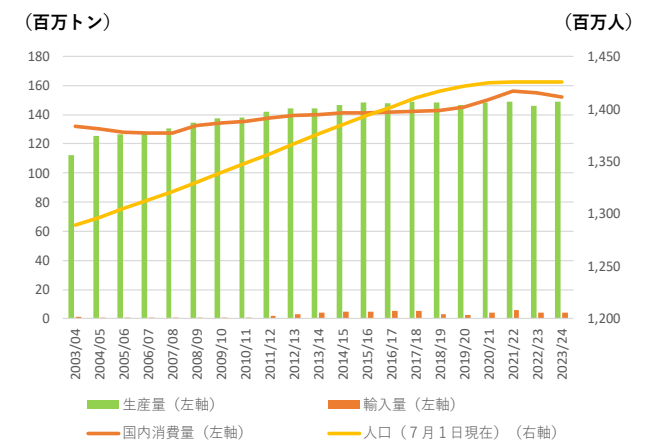
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年7月～24年6月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	149.0	146.0	149.0 (148.9)	-	2.1	
消 費 量	156.4	155.0	152.0 (150.8)	-	▲ 1.9	
輸 出 量	2.1	1.7	2.0 (2.0)	-	14.9	
輸 入 量	6.0	4.4	4.0 (4.5)	▲ 1.0	▲ 8.7	
期末在庫量	113.0	106.6	105.6 (105.8)	▲ 1.2	▲ 0.9	
期末在庫率	71.3%	68.0%	68.6% (69.3%)	▲ 0.8	0.6	

(参考)

収穫面積(百万ha)	29.92	29.45	29.85 (29.45)	-	1.4	
単収(もみt/ha)	7.11	7.08	7.13 (4.96)	-	0.7	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 August, 2023)
IGC「Grain Market Report」(20 July, 2023) (単収は精米t/ha)

図：中国のコメ生産量・消費量・輸入量と人口の推移（2017－2023年）



資料：USDA「PS&D」(2023.8.11)及び国連「World Population Prospects 2022」をもとに農林水産省にて作成。なお2022年、2023年の人口は予測値。

< タイ > 雨季米の土壌水分量は十分も、乾季米向け灌漑用水不足が懸念

【生育・生産動向】USDAによれば、2023/24年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、水不足や生産コスト上昇等により、雨季米の収穫面積が前年度比2.3%減少となり、前年度比2.5%減の19.7百万トンの見込み。

2022/23年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、良好な天候と十分な降雨により、2021/22年度比1.5%増の20.2百万トンの見込み。

7月から8月上旬にかけて、雨季米の主要産地であるタイ北東部においては平年並みの降雨があった。また、北部及び中部は平年より乾燥していたものの、8月中旬にはタイ北部でも平年並みの降雨があった。多くの水田は水が十分であるものの、降雨量に地域差があるため、今後の乾季米用の灌漑用水不足が懸念される。タイ北東部の2つの主要な貯水池は8月12日時点で前年の貯水量を下回っている。

アセアン食料安全保障情報システム（2023.8）によると、雨季米は現在、幼穂形成期にある。作付け進捗率は7月末までは降雨不足により遅れていたものの、8月に入り予定面積の55%まで進展した。作付面積は干ばつの影響を受けて前年度から減少する見込み。5～7月の降雨量はタイ全土で前年度より少なく、8月も減少する見込みであり、病虫害被害の発生の可能性が高く、穂数の減少が見込まれることから、前年に比べ、単収及び生産量が減少する見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2023/24年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比11.8%減の7.5百万トンの見込み。

2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、2021/22年度比10.4%増の8.5百万トン。

タイ米輸出業者協会によれば、2023年1～6月の輸出量は、前年同期比15.0%増の403.9万トンとなった。検疫問題で7年間停止していたタイ産米の輸入を2022年に再開したイラクは63.5万トン（前年同期66.0万トン）。また、政府備蓄の不足に対処するため輸入を拡大しているインドネシアは、前年同期の1.3万トンから大幅増の60.8万トンとなった。そのほか、南アフリカが40.9万トン（同34.1万トン）と増加している一方、米国は34.4万トン（同39.3万トン）と減少。

USDA「Rice Outlook」（2023.8.14）によれば、8月8日までの週のタイ産米（長粒、2等精米）の輸出価格は、インドの輸出規制強化（2023年7月20日～）により前月から126ドル/トン上昇し、657ドル/トンと、2008年10月初旬以来の高値となった（P.20の「長粒種のFOB価格の推移」を参照）。

コメータイ

夏期の雨季作と冬期の乾季作で行われる。主にインディカ米を栽培

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	(単位：百万精米トン)		
			2023/24 (24年1月～24年12月)	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	19.9	20.2	19.7 (21.1)	-	▲ 2.5
消 費 量	12.8	12.8	12.5 (12.9)	-	▲ 2.3
輸 出 量	7.7	8.5	7.5 (8.2)	-	▲ 11.8
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	-
期末在庫量	3.4	2.4	2.1 (6.1)	-	▲ 10.5
期末在庫率	16.7%	11.2%	10.7% (28.8%)	-	▲ 0.5

(参考)

収穫面積(百万ha)	10.70	10.85	10.60 (10.85)	-	▲ 2.3
単収(もみt/ha)	2.81	2.82	2.82 (1.86)	-	-

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 August, 2023)
IGC「Grain Market Report」(20 July, 2023)（単収は精米t/ha）

表：タイの国別輸出量

(単位：万トン)			
国名	2022 年 1～6月	2023 年 1～6月	増減量
1 イラク	66.0	63.5	▲ 2.5
2 インドネシア	1.3	60.8	59.5
3 南アフリカ	34.1	40.9	6.7
4 米国	39.3	34.4	▲ 5.0
5 中国	30.5	18.8	▲ 11.6
6 日本	15.0	18.0	2.9
7 セネガル	11.3	14.5	3.2
8 カメルーン	7.3	12.1	4.9
9 バングラデシュ	0.0	11.5	11.5
10 モザンビーク	8.6	9.1	0.5
計	351.4	403.9	52.6 (前年比15.0%増)

資料：タイ米輸出業者協会（2023.8）

< ベトナム > 北部、南部とも雨季米は良好な生育状況

【生育・生産動向】USDA によれば、2023/24 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積はわずかに減少も、単収は過去最高だった前年度の水準を維持する見込みから、前年度並みの 27.0 百万トンの見込み。肥料高騰や高収益作物等（果物・野菜・養殖）への転換等により、生産量は史上最高となった 2014/15 年度（28.2 百万トン）を境に、緩やかな低下傾向にある。

2022/23 年度の生産量は、前月予測から変更はなく、2021/22 年度比 1.1%増の 27.0 百万トンの見込み。

アセアン食料安全保障情報システム（2023.8）によると、①北部では夏秋作（雨季米）が幼穂形成期にあり、灌漑用水が十分なため、作柄は良好。②南部では、夏秋作（雨季米）が収穫期にあり、173 万ヘクタールの作付面積のうち 49 万ヘクタール（28.3%）が収穫され、温暖な天候と十分な灌漑用水により単収は前年度よりわずかに増加の見込み。③南部の雨季米（秋冬作）は良好な生育条件の下、成長期にある。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、2023 年にインドネシアへの備蓄向け輸出が終了すること等から、前年度比 7.6%減の 7.3 百万トンの見込み。ただし、2023 年 1～6 月までの出荷ペースが予想より早いことや、競争相手であるインドの輸出規制強化（2023 年 7 月 20 日～）により 2023/24 年度の輸出量が減少することで、ベトナムへの代替需要が発生することから、前月予測より 0.1 百万トン上方修正された。

2022/23 年度の輸出量も、競争相手であるインドの輸出規制強化により、前月予測から 0.4 百万トン上方修正され、7.9 百万トンの見込み。

ベトナム関税総局によれば、2023 年 1～7 月の輸出量は 489.5 万トンと、前年同期（407.6 万トン）に比べ 20.1%増加した。主な輸出先国は、フィリピン（193.8 万トン）、中国（71.9 万トン）、インドネシア（62.3 万トン）、ガーナ（32.3 万トン）の順。

USDA 「Grain: World Markets and Trade」（2023.8.11）によれば、ベトナム産米（長粒種、5%碎米混入）の 8 月 8 日までの週の価格は、インドの輸出規制強化により前月の価格から 125 ドル/トン上昇して 644 ドル/トンと、2008 年 7 月以来の高値となった。

コメーベトナム

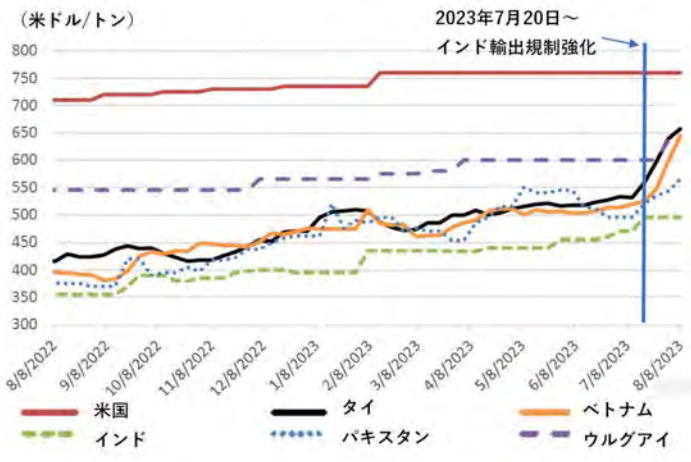
北部で二期作、南部で二期作・三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培

(単位: 百万精米トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (24年 1 月～24年12月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	26.7	27.0	27.0 (28.0)	-	-
消 費 量	21.5	21.5	21.5 (22.0)	▲ 0.2	-
輸 出 量	7.1	7.9	7.3 (7.3)	0.1	▲ 7.6
輸 入 量	1.7	1.5	1.4 (1.1)	▲ 0.3	▲ 6.7
期末在庫量	2.5	1.6	1.2 (3.0)	▲ 0.7	▲ 25.6
期末在庫率	8.6%	5.3%	4.0% (10.3%)	▲ 2.4	▲ 1.3
(参考)					
収穫面積(百万ha)	7.10	7.17	7.16 (7.10)	-	▲ 0.1
単収(もみt/ha)	6.01	6.03	6.03 (3.90)	-	-

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」 (11 August, 2023)
IGC 「Grain Market Report」 (20 July, 2023) (単収は精米t/ha)

図：長粒種の FOB 価格の推移



資料：USDA 「Grain：World Markets and Trade」（2023.8.11）より。

Ⅱ 油糧種子 大豆

(1) 国際的な大豆需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2023/24 年度

生産量 前年度比 前月比

・米国等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

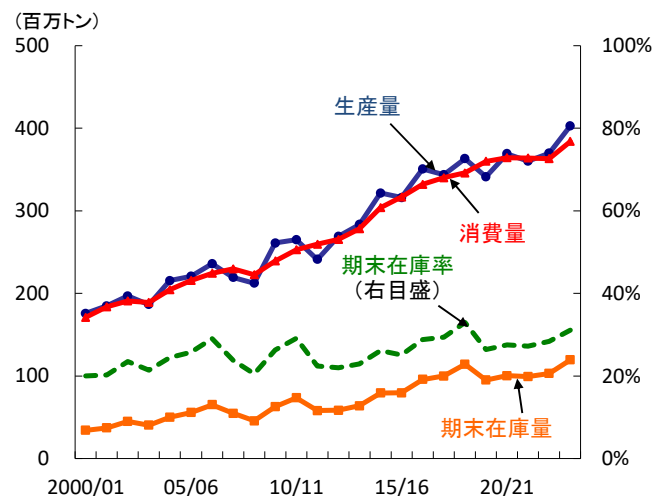
消費量 前年度比 前月比

・エジプト、バングラディッシュ、パキスタン等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 前月比

・パラグアイ等で上方修正されたものの、米国で下方修正され、前月から下方修正された。

期末在庫量 前年度比 前月比



◎ 世界の大豆需給

（単位：百万トン）

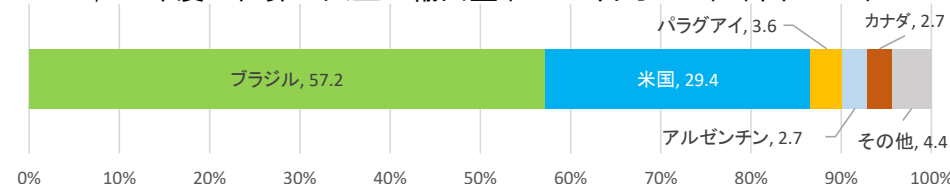
年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24		
			予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	360.2	369.7	402.8	▲ 2.5	8.9
消費量	364.0	363.3	383.9	▲ 0.6	5.7
うち搾油用	314.5	311.6	329.5	▲ 0.7	5.8
輸出量	153.9	169.0	168.8	▲ 0.5	▲ 0.1
輸入量	156.6	166.4	166.3	▲ 0.3	▲ 0.1
期末在庫量	99.1	103.1	119.4	▲ 1.6	15.8
期末在庫率	27.2%	28.4%	31.1%	▲ 0.4	2.7

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（11 August 2023）

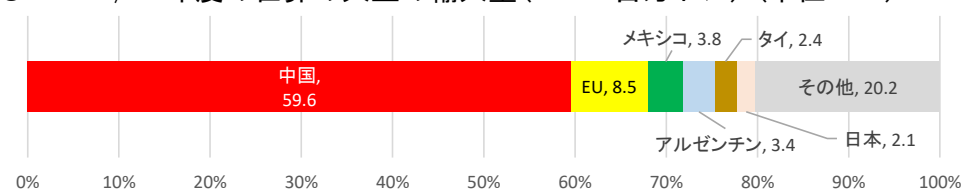
○ 2023/24 年度の世界の大豆の生産量(402.8 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度の世界の大豆の輸出量(168.8 百万トン) (単位：%)



○ 2023/24 年度の世界の大豆の輸入量(166.3 百万トン) (単位：%)



（２）国別の大豆の需給動向

＜ 米国 ＞ 単収の引下げを受け、生産量は 2.6 百万トン下方修正

【生育・生産状況】USDA によれば、2023/24 年度の実産量は、収穫面積の減少により前年度より 1.7%減の 114.5 百万トンの見通し。今年度第 1 回目の作柄実績調査によれば、単収が前月予測から 0.08 トン/ヘクタール引下げられたため、生産量は前月予測から 2.6 百万トン下方修正された。

USDA「Crop Progress」（2023.8.14）によれば、主要 18 州における 8 月 13 日現在の着莢進捗率は 78%と、前年同時期（72%）、過去 5 年平均（75%）を上回っている。また、作柄評価の「良～やや良」の比率は 59%となり、前年同時期（58%）を上回っている。6 月中旬の乾燥の影響で 7 月 2 日には 50%まで悪化したものの、7 月から 8 月上旬にかけての降雨を受け前年同時期並みに改善した。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、バイオ燃料・飼料用需要増による搾油の収益改善の見通しから、前年度より 3.6%増の 66.0 百万トンで史上最高の見込み。環境志向の高まりを受けて、バイオ燃料向けの搾油工場の新設による需要増が見込まれているものの、米国政府が 6 月 21 日に発表した最終的なバイオ燃料の混合義務は 2022 年に 2.82 億ガロン/年、2025 年に 3.35 億ガロン/年と、搾油工場の新設による供給増に見合うほど高くなく市場予測を下回った。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、生産量の下方修正による供給減により前月予測から 0.7 百万トン下方修正され、前年度より 7.8%減の 49.7 百万トンの見込み。史上最高の豊作見通しとなったブラジル産と比べ相対的な価格競争力が落ちていることが要因とみられる。

USDA によれば、2023/24 年度の期末在庫量は、単収の引下げを受け生産量が下方修正されたことにより、前月予測から 1.5 百万トン下方修正され、前年度より 5.8%減の 6.7 百万トンとなる見込み。期末在庫率は前月予測から 1.2 ポイント減の 5.8%で、引き続き低水準に留まる見通し。

USDA によれば、2023 年輸出量（2023 年 1 月 1 日～7 月 31 日）は 21.4 百万トンと、前年度同時期（2022 年 1 月 1 日～8 月 8 日）の 23.6 百万トンを下回っている。内訳は中国（11.0 百万トン）、メキシコ（2.3 百万トン）、ドイツ（1.7 百万トン）の順。

大豆－米国

（単位：百万トン）

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24（23年 9 月～24年 8 月）		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	121.5	116.4	114.5	▲ 2.6	▲ 1.7
消 費 量	62.9	63.7	66.0	－	3.6
うち搾油用	60.0	60.4	62.6	－	3.6
輸 出 量	58.6	53.9	49.7	▲ 0.7	▲ 7.8
輸 入 量	0.4	0.8	0.8	0.3	－
期末在庫量	7.5	7.1	6.7	▲ 1.5	▲ 5.8
期末在庫率	6.1%	6.0%	5.8%	▲ 1.2	▲ 0.3

（参考）

収穫面積(百万ha)	34.93	34.94	33.47	－	▲ 4.2
単収(t/ha)	3.48	3.33	3.50	▲ 0.08	5.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」（11 August 2023）

図：米国、ブラジル、アルゼンチン大豆輸出価格（FOB）の推移



< ブラジル > 2022/23 年度の収穫はほぼ完了し、生産量は史上最高の見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 10 月以降作付けが開始される 2023/24 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、作付面積が史上最大となる見通しから、前年度より 4.5%増の 163.0 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル食料供給公社 (CONAB) 月例報告 (2023.8.10) によれば、2022/23 年度の実産量は、前年度より 23.1%増の 154.6 百万トンと史上最高の見通し。最大生産州のマト・グロッソ州では、栽培技術の改善と良好な天候に恵まれ、増産となった。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の実消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料向けの大豆粕需要が増加することから、前年度より 5.1%増の 59.7 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、2 年連続で生産量が史上最高を更新し、価格競争力が高まる見込みから、前年度より 2.7%増の 96.5 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2023 年 1～7 月の輸出量は 73.5 百万トンで、前年同期 (60.5 百万トン) に比べ 21.5%増となっている。輸出先は、中国 (50.4 百万トン)、アルゼンチン (3.5 百万トン)、スペイン (2.4 百万トン) の順。堅調な中国向け輸出に加え、干ばつにより減産したアルゼンチンへの搾油用需要を満たすための輸出が大幅に増加した。

2023 年 6 月、北部のマラニョン州イタキ北部港とサンパウロ州サントス港を結ぶ南北鉄道が開通した。南北鉄道が稼働することで、最大生産州のマト・グロッソ州等の内陸の大豆・とうもろこしを効率的に輸送し、輸出のボトルネックを回避する一助になることが期待されている。

なお、「OIL WORLD Weekly」(2023.8.4) によれば、ブラジルの輸出港におけるとうもろこし輸出は既に本格化しており、とうもろこし輸出量は今後大豆輸出量を超えるとみられる。今後、ブラジルの輸出港のキャパシティについて、引き続き注視する必要がある。

大豆ーブラジル

(単位: 百万トン)

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	130.5	156.0	163.0 (160.0)	-	4.5	
消 費 量	54.0	56.8	59.7 (59.6)	-	5.1	
うち搾油用	50.7	53.0	55.8 (56.3)	-	5.2	
輸 出 量	79.1	94.0	96.5 (97.9)	-	2.7	
輸 入 量	0.5	0.2	0.5 (0.3)	-	200.0	
期末在庫量	27.6	33.0	40.2 (10.1)	▲ 0.1	22.0	
期末在庫率	20.7%	21.9%	25.7% (6.4%)	▲ 0.1	3.9	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	41.60	43.90	45.60 (41.49)	-	3.9	
単収(t/ha)	3.14	3.55	3.57 (3.86)	-	0.6	

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 August 2023)
IGC「Grain Market Report」(20 July 2023)

ブラジルのクロップカレンダー(中部から南部)

2022/23年度の実作付けは、2022年9月以降、順次開始。
2023年2月以降、大豆の収穫が行われ、その後、一部の圃場で冬とうもろこしを栽培。

2022/23年度	2022年												2023年								
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
夏とうもろこし	リオ・グランデ・ド・スール州等 作付 4.4(百万ha)												収穫 27.4(百万t) → 収穫夏冬作計 130.0百万t								
冬とうもろこし	作付面積夏冬作計 22.2百万ha ←												作付 17.8(百万ha) 収穫 102.6(百万t)								
大豆	マト・グロッソ州、パラナ州等 作付 44.1(百万ha)												大豆収穫後の一部の圃場で冬とうもろこし作付け 収穫 154.6(百万t)								

資料: CONAB穀物レポート (2023.8.10)

＜ アルゼンチン ＞ 2022/23 年度の輸入量は、減産により史上最高の見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 11 月以降作付けが開始される 2023/24 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、高温・乾燥の影響を大きく受けた前年度から回復する見通しから、92.0%増の 48.0 百万トンの見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所週報（2023.6.29）によれば、収穫が終了した 2022/23 年度の生産量は 21.0 百万トンと、過去 5 年平均（45.0 百万トン）より 53%減の低水準となった。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、増産に伴い搾油量が回復することから、前年度比 17.7%増の 43.0 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、国内生産量の増加に伴い輸入需要が減少することから、前年度より 38.0%減の 5.7 百万トンの見込み。

2022/23 年度の輸入量は、国内生産が減少したことを受け、搾油用需要を満たすためにブラジル産及びパラグアイ産の輸入が急増したため、0.5 百万トン上方修正され、9.2 百万トンで史上最高の見込み。アルゼンチン国家統計局によれば、2023 年 4～6 月の輸入量は 432.0 万トンで、前年同時期（157.6 万トン）の 2.7 倍。

2023/24 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、干ばつにより減産し価格競争力が弱まった前年度から生産量が回復する見込みから、前年度より 17.9%増の 4.6 百万トンの見込み。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、輸出税を設定している。2021 年 1 月以降、輸出税を大豆最大 33%、大豆油及び大豆粕 31%と設定。2022 年 3 月に、大豆油及び大豆粕の輸出税について 2022 年末まで 2 %引き上げたが、2023 年 1 月からは 31%に戻している。

アルゼンチン政府は、今般の干ばつ対策として、農業関係者に対し、融資や減税、割引手形の発行、各種税の支払い猶予措置などの救済施策を発表した。

なお、外貨獲得のため、4 月 10 日から 5 月 31 日までの間の 45 日間を超えない範囲で、大豆優遇為替レート（1 ドル＝300 ペソ）を適用した。

7 月 25 日、アルゼンチン政府は、輸出促進プログラムを発表し、優遇為替レート（1 ドル＝340 ペソ）（期限は 8 月 31 日まで）を発表したが、大豆は対象品目に含まれておらず、今後の動向を注視する必要がある。

大豆ーアルゼンチン

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年10月～24年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	43.9	25.0	48.0 (44.0)	-	92.0	
消 費 量	46.0	36.5	43.0 (42.8)	-	17.7	
うち搾油用	38.8	30.3	36.3 (39.0)	-	19.8	
輸 出 量	2.9	3.9	4.6 (5.1)	-	17.9	
輸 入 量	3.8	9.2	5.7 (5.5)	-	▲ 38.0	
期末在庫量	23.9	17.7	23.9 (3.6)	0.2	34.7	
期末在庫率	48.9%	43.8%	50.2% (7.6%)	0.3	6.3	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	15.90	15.00	16.40 (15.87)	-	9.3	
単収(t/ha)	2.76	1.67	2.93 (2.77)	-	75.4	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」 (11 August 2023)
IGC 「Grain Market Report」 (20 July 2023)

表：アルゼンチン大豆輸入量、輸入先国
（4 月以降、ブラジル産及びパラグアイ産の
輸入が急増）

2022/23年度 (2023年 4 月～6 月)			対前年度 同時期比 (%)
国名	輸入量 (万 t)	シェア (%)	
ブラジル	232.3	53.8	1,278.6
パラグアイ	178.7	41.4	149.7
ボリビア	21.1	4.9	25.4
計	432.0	100.0	174.1

資料：アルゼンチン国家統計局（INDEC）のデータ
をもとに農林水産省で作成。

＜ 中国 ＞ 2023/24 年度の生産量・消費量は史上最高

【生産・生育状況】USDA によれば、2023/24 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、単収が減少するものの、収穫面積が増加することから、全体として前年度より 1.1%増の 20.5 百万トンで史上最高の見込み。

2 月 13 日に公表された中国共産党・国務院（内閣に相当）の中央 1 号文件には、引き続き大豆の作付け拡大の取組等について記載された。

なお、7 月末現在、主産地の東北地区の黒竜江省等では莢伸長期を迎えている。

USDA によれば、7 月に黒竜江省南西部で降雨過多があった。ただし、降雨状況にばらつきがあり、黒竜江省北部では平年より降雨が少ない状況となっている。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、国内の大豆粕及び食料の需要が増加することにより、前年度より 3.8%増の 118.0 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 1.0%減の 99.0 百万トンと高水準を維持している。

農業農村部によれば、2023 年 1 ～ 6 月の間の輸入量は、前年同時期より 13.6%増の 5,257.6 万トン。内訳は、ブラジル（2,968.2 万トン）、米国（1,971.1 万トン）、アルゼンチン（142.9 万トン）の順。6 月のブラジル産輸入量は 953.3 万トン（前年同時期比 31.7%増）。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2023 年 6 月号」によれば、6 月の輸入価格（山東省の輸入大豆価格）は、前月（5,040 元/トン）から上昇し、5,060 元/トンとなった。6 月の国内価格（山東省の国産大豆工場渡し価格）も、前月（5,720 元/トン）から上昇し、5,740 元/トンとなった。黒竜江省等の産地で備蓄用の買入需要にも支えられ、わずかに上昇した。

USDA によれば、2023/24 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 3.8%増の 38.2 百万トンで史上最高の見込み。2023/24 年度の期末在庫率は、前月予測からの変更はなく、前年度並みの 32.3%となる見込み。

大豆－中国

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24（23年10月～24年9月）			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	16.4	20.3	20.5 (21.5)	－	1.1	
消 費 量	108.4	113.7	118.0 (117.4)	－	3.8	
うち搾油用	87.9	92.0	95.0 (97.5)	－	3.3	
輸 出 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	－	▲ 23.1	
輸 入 量	91.6	100.0	99.0 (97.8)	－	▲ 1.0	
期末在庫量	30.3	36.8	38.2 (32.5)	－	3.8	
期末在庫率	27.9%	32.3%	32.3% (27.6%)	－	0.0	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	8.42	10.24	10.45 (8.40)	－	2.1	
単収(t/ha)	1.95	1.98	1.96 (1.95)	－	▲ 1.0	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」 (11 August 2023)
IGC 「Grain Market Report」 (20 July 2023)

表：中国の大豆輸入量と輸入先国

2023年6月			2023年1月～2023年6月			2022年1月～2022年6月		
国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア
ブラジル	953.3	92.8	ブラジル	2968.2	56.5	ブラジル	2770.3	59.9
米国	52.8	5.1	米国	1971.1	37.5	米国	1754.2	37.9
ロシア	15.1	1.5	アルゼンチン	142.9	2.7	ロシア	30.0	0.6
エチオピア	2.1	0.2	カナダ	92.7	1.8	カナダ	26.3	0.6
ベナン	1.9	0.2	ロシア	63.5	1.2	ベナン	15.7	0.3
タンザニア	0.9	0.1	エチオピア	7.3	0.1	ウルグアイ	14.2	0.3
その他	0.9	0.0	その他	11.9	0.1	その他	17.2	0.3
計	1027.0	100	計	5257.6	100	計	4627.9	100

資料：中国農業農村部資料をもとに農林水産省で作成

＜ カナダ ＞ 作付面積の増加により、生産量は前年度から 6.1%増

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省（AAFC）「Outlook for Principal Field Crops」（2023.8.18）によれば、2023/24 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 6.1% 増の 6.9 百万トンの見込み。単収が 3.01 トン/ヘクタールと、高水準の単収だった前年度より低下するものの、収穫面積が 2.28 百万ヘクタールと前年度より 7.6%増と大幅に増加することによる。

USDA によれば、主産地のカナダ東部では、8 月 6 日～12 日にかけて降雨があり、着莢期を迎えている大豆の生育に適した天候となっているとみられる。

カナダの大豆生産は、小麦やなたねと異なり、東部のオンタリオ州が主産地で、生産量の半分以上のシェアを占める。このほか、オンタリオ州に隣接するマニトバ州、ケベック州でも生産されている。

【需要状況】USDA によれば、2023/24 年度の実消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 2.7%増の 2.7 百万トンの見込み。バイオ燃料需要増による搾油の収益改善が見込まれていることによる。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2023/24 年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、増産による輸出余力の増大を受けて、前年度より 5.8%増の 4.6 百万トンの見込み。

カナダ穀物委員会（Canadian Grain Commission）によれば、2022/23 年度（2022 年 8 月～2023 年 7 月）のうち、2022 年 8 月～2023 年 6 月の輸出量は 310.8 万トンで、前年度同時期（281.2 万トン）を上回っている。国別では、中国向け（128.8 万トン）が 41%を占め、続いてイラン（49.0 万トン）、アルジェリア（36.5 万トン）、イタリア（25.1 万トン）の順。

なお、カナダ産大豆は、主産地が小麦や菜種と異なりカナダ東部のため、カナダ産の主要な輸送ルートは、五大湖を通過してパナマ運河から東アジアに輸出されるルートとなっている。

AAFC によれば、2023/24 年度の実在庫量は、前月予測からの変更はなく、供給増から前年度から 14.3%増の 0.4 百万トンの見込み。

大豆－カナダ

年 度	2021/22	2022/23 (見込み)	2023/24 (23年8月～24年7月)			
			予測値、()はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	6.2	6.5	6.7 (6.9)	-	-	2.4
消 費 量	2.3	2.6	2.7 (2.5)	-	-	2.7
うち搾油用	1.8	1.8	1.9 (1.9)	-	-	3.8
輸 出 量	4.3	4.3	4.6 (4.8)	-	-	5.8
輸 入 量	0.5	0.5	0.5 (0.5)	-	▲	6.5
期末在庫量	0.4	0.6	0.6 (0.4)	0.1	-	-
期末在庫率	6.5%	9.1%	8.7% (5.5%)	0.8	▲	0.4

(参考)

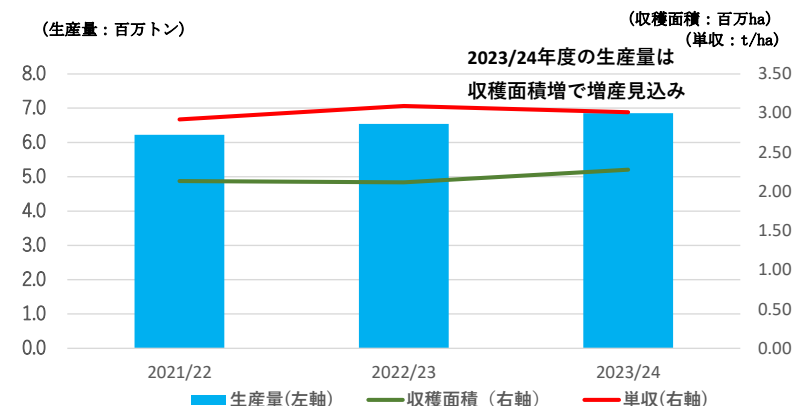
収穫面積(百万ha) 2.08 2.12 2.25 (2.28)
単収(t/ha) 2.99 3.09 2.98 (3.01)

資料：USDA「PS&D」

「World Agricultural Production」(11 August 2023)

AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(18 August 2023)

図：カナダの直近3か年の生産量等の推移



資料：AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(2023.8.18)をもとに農林水産省にて作成。

(参考1)本レポートに使用されている各国の穀物年度について (2023/24年度)

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	23年6月～24年5月	23年9月～24年8月	23年8月～24年7月	23年9月～24年8月
カナダ	23年8月～24年7月			23年8月～24年7月
豪州	23年10月～24年9月		24年3月～25年2月	
EU	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月		
中国	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月
ロシア	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月		23年9月～24年8月
ウクライナ	23年7月～24年6月	23年10月～24年9月		
ブラジル		24年3月～25年2月	24年4月～25年3月	23年10月～24年9月
アルゼンチン	23年12月～24年11月	24年3月～25年2月		23年10月～24年9月
タイ			24年1月～12月	
インド	23年4月～24年3月		23年10月～24年9月	
ベトナム			24年1月～12月	

注 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
 例えば、2023/24年度は、米国の小麦では2023年6月～2024年5月、ブラジルのとうもろこしでは2024年3月～2025年2月です。
 なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads> (「Reference Data」タブを参照)

(参考2)単位換算表

1 容積→重量

1 Bushel (ブッシェル) (穀物により異なる)	0.027216	メトリックトン	小麦、大豆	米国等
	0.021772	メトリックトン	大麦	
	0.025401	メトリックトン	とうもろこし	
	0.014515	メトリックトン	オーツ	
1 CWT(百ポンド)	0.045359	メトリックトン	コメ	米国等

2 面積

1Acre(エーカー)	0.40469	ヘクタール	米国等
1rai(ライ)	0.16	ヘクタール	タイ
1 亩(ムー)	0.0667	ヘクタール	中国

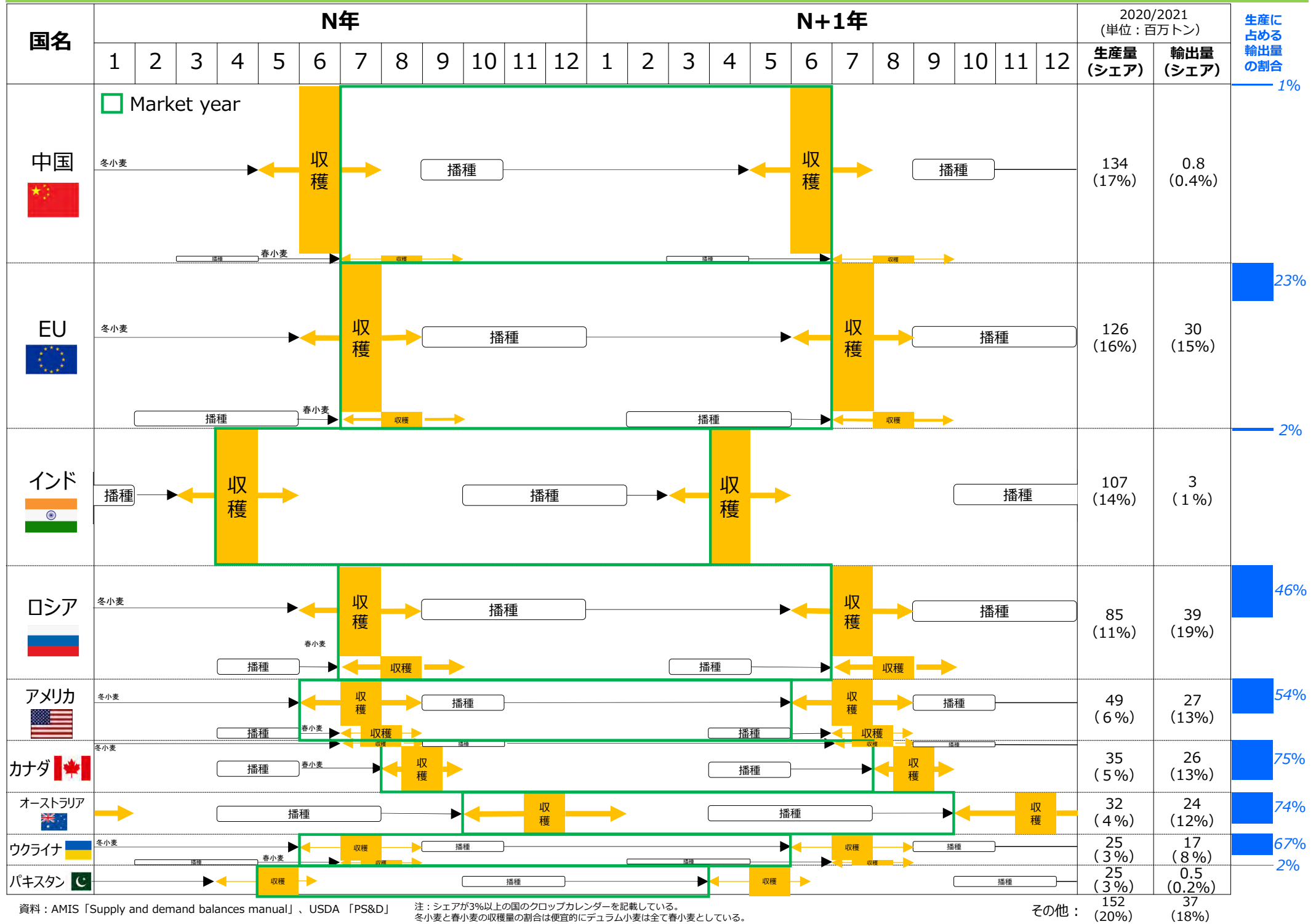
3 その他

1ガロン	4.536	リットル	英国
1ガロン	3.785	リットル	米国
1LAKH(ラーク)	10万	位取り	インド
1斤	500g	重量	中国
華氏→摂氏 : $^{\circ}\text{C} = (^{\circ}\text{F} - 32) \div 1.8$			

(参考3)各国のクロップカレンダー一覧(主要品目毎)

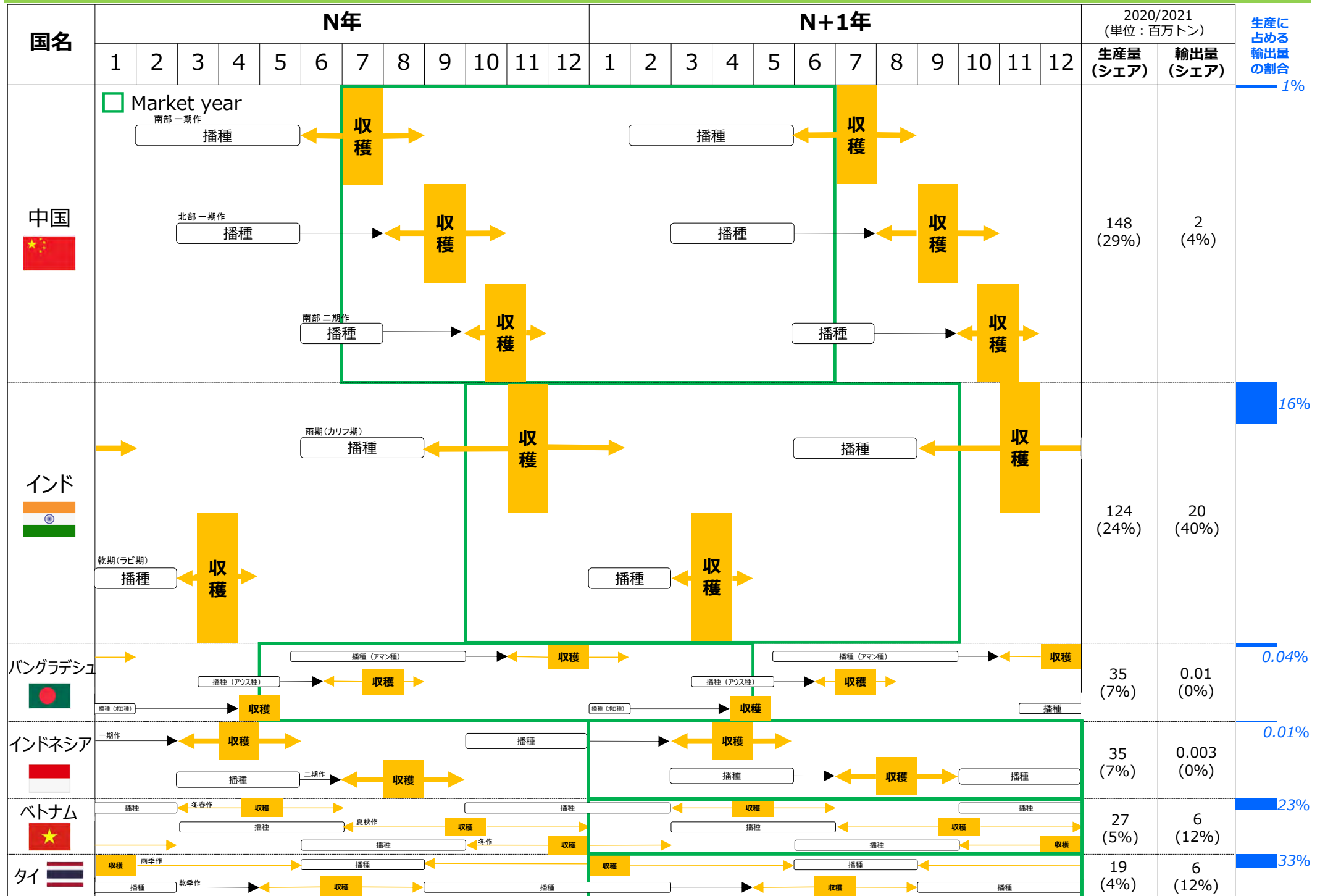
主要生産国のクロープカレンダー(小麦)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



主要生産国のクロップカレンダー(米)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「PS&D」

注：シェアが3%以上の国のクロップカレンダーを記載している。

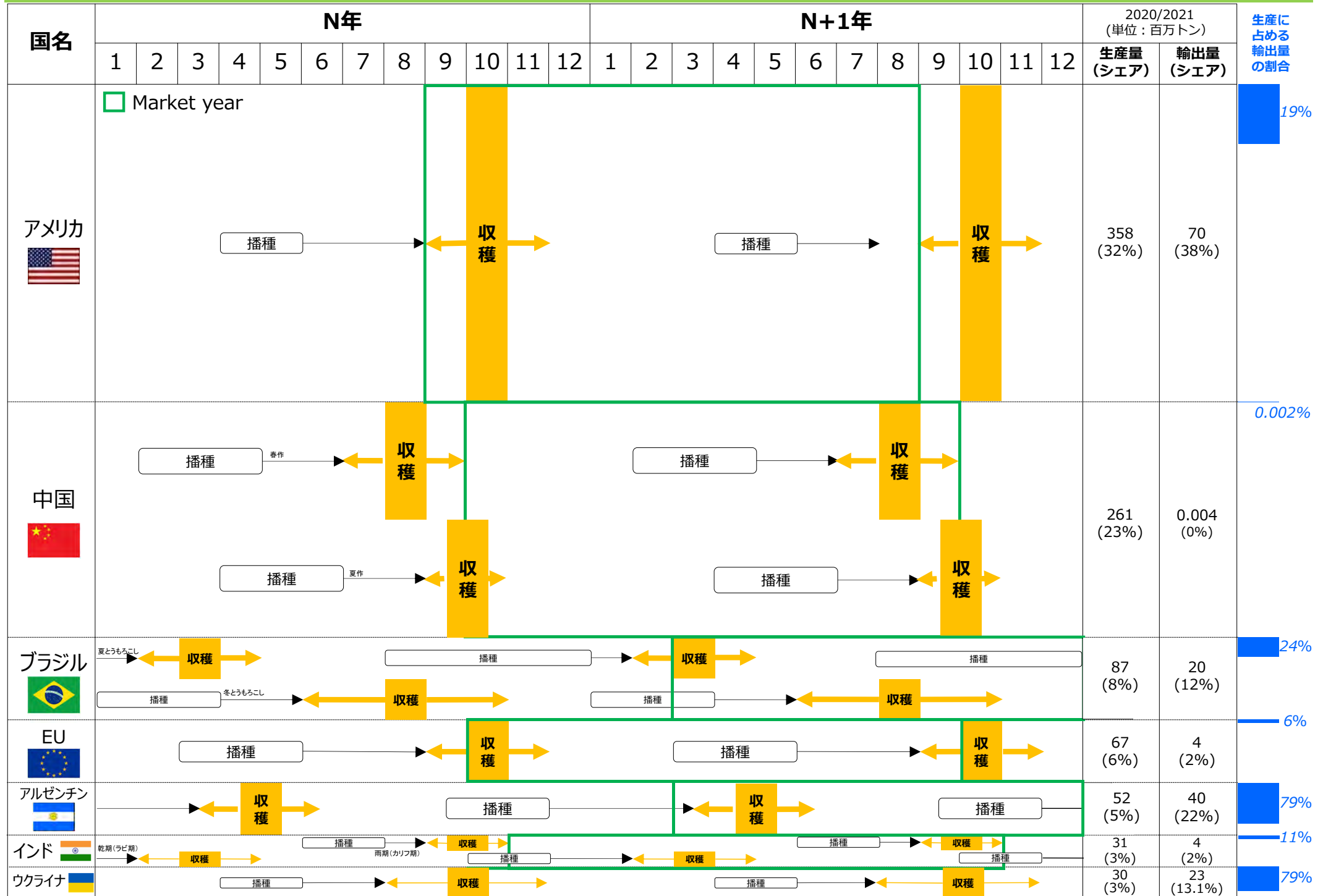
その他：

121
(24%)

16
(32%)

主要生産国のクロープカレンダー(とうもろこし)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



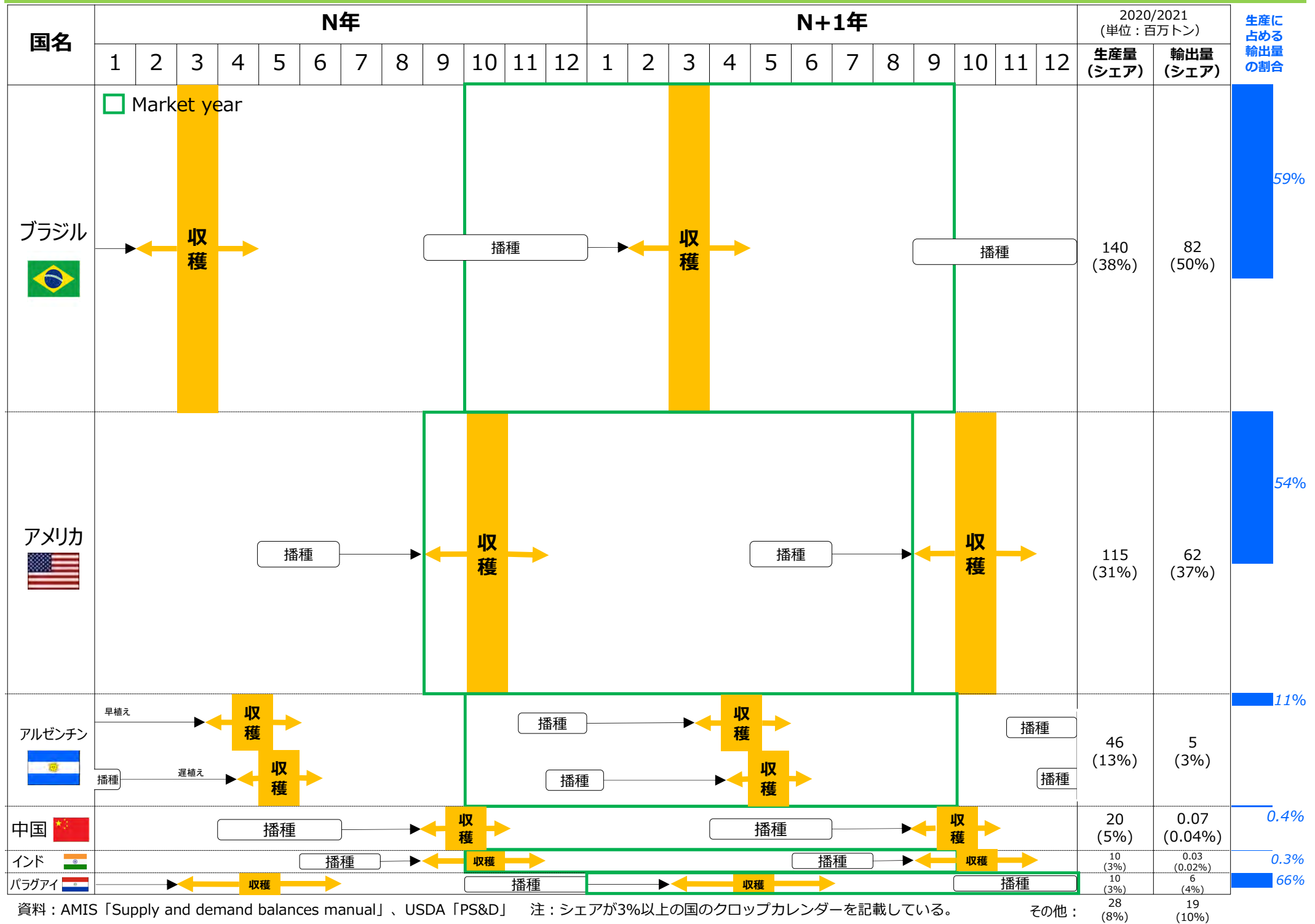
資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「PS&D」

注：シェアが3%以上の国のクロープカレンダーを記載している。

その他：242 (19%) 21 (11%)

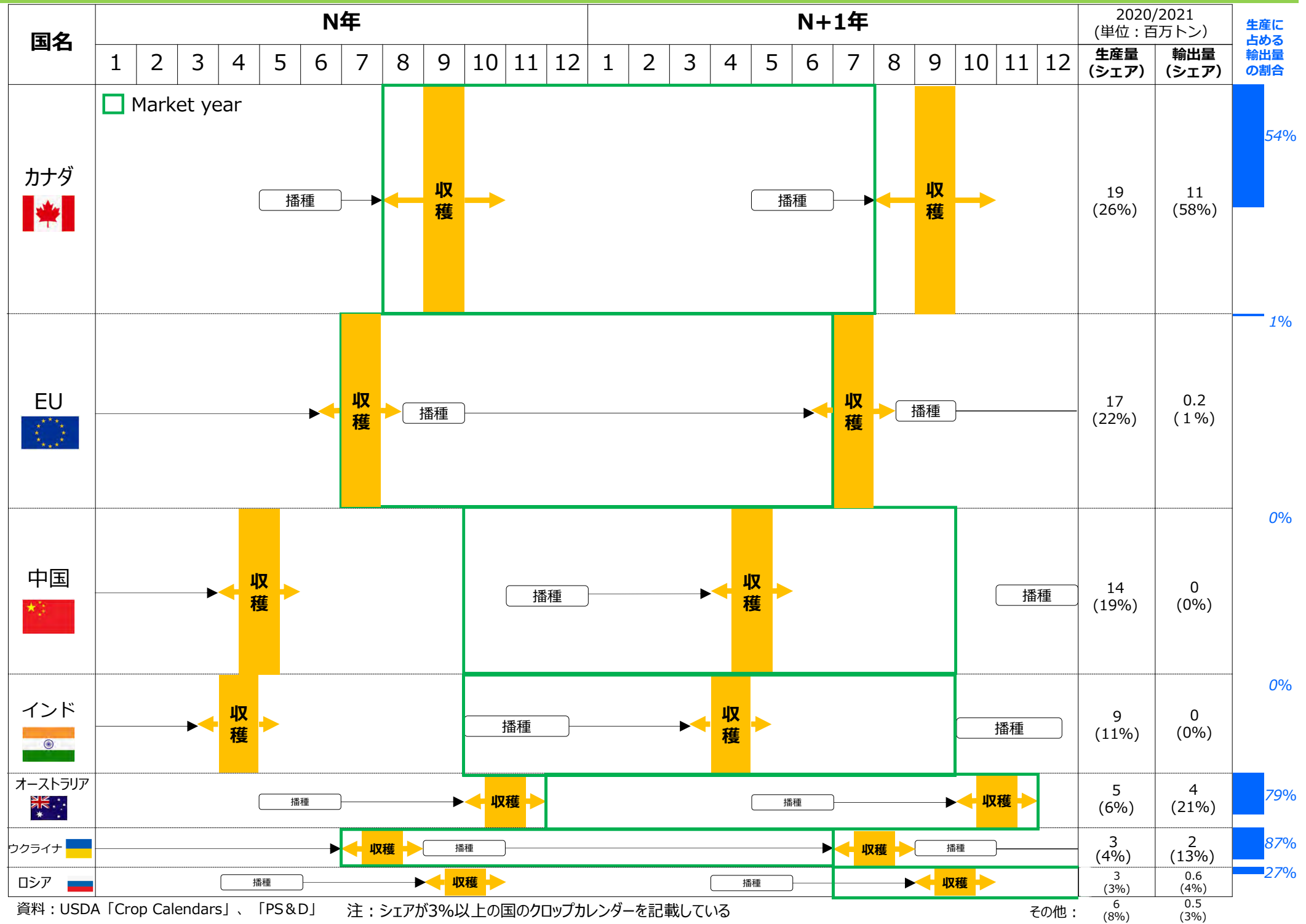
主要生産国のクロップカレンダー(大豆)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



主要生産国のクロップカレンダー(菜種)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



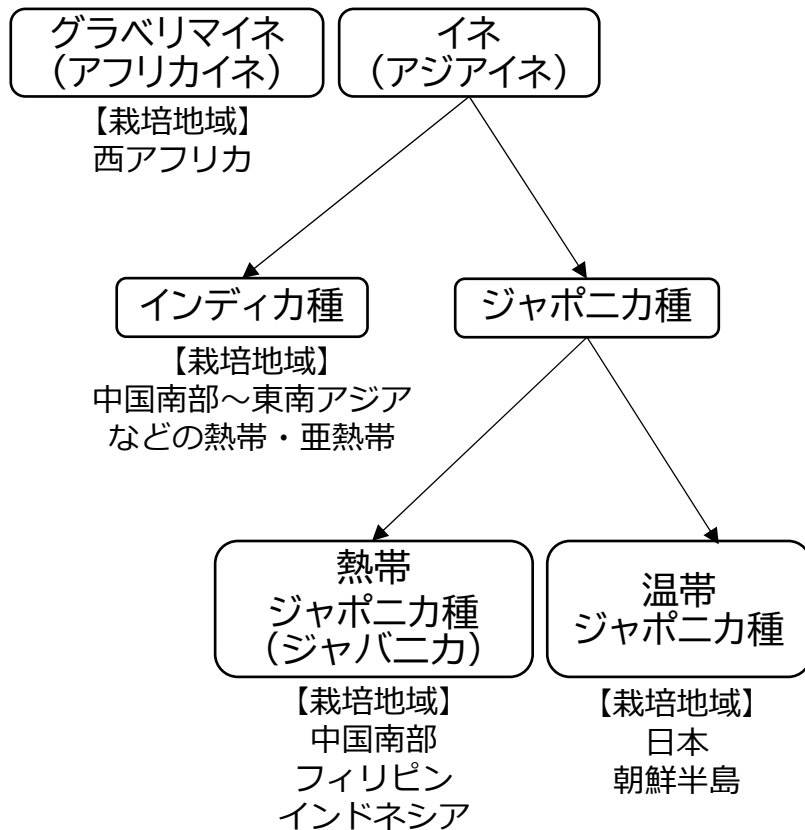
第26号特別分析トピック:世界のコメをめぐる事情

世界のコメをめぐる事情(基礎・全体編)

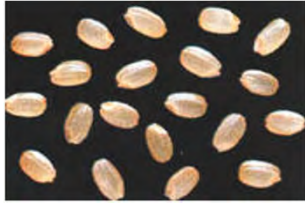
コメの特徴と分類

- 「イネ属」に含まれる20余りの種のうち、栽培種は「イネ(アジアイネ)」と「グラベリマイネ(アフリカイネ)」に大別。世界では主に「イネ(アジアイネ)」を栽培。
- このうちイネは、東南アジア等の熱帯・亜熱帯で栽培される「インディカ種」と、日本等の温帯で栽培される「ジャポニカ種」。更に「ジャポニカ種」は、「熱帯ジャポニカ種」と「温帯ジャポニカ種」に分類。

イネ属(栽培種)系統図



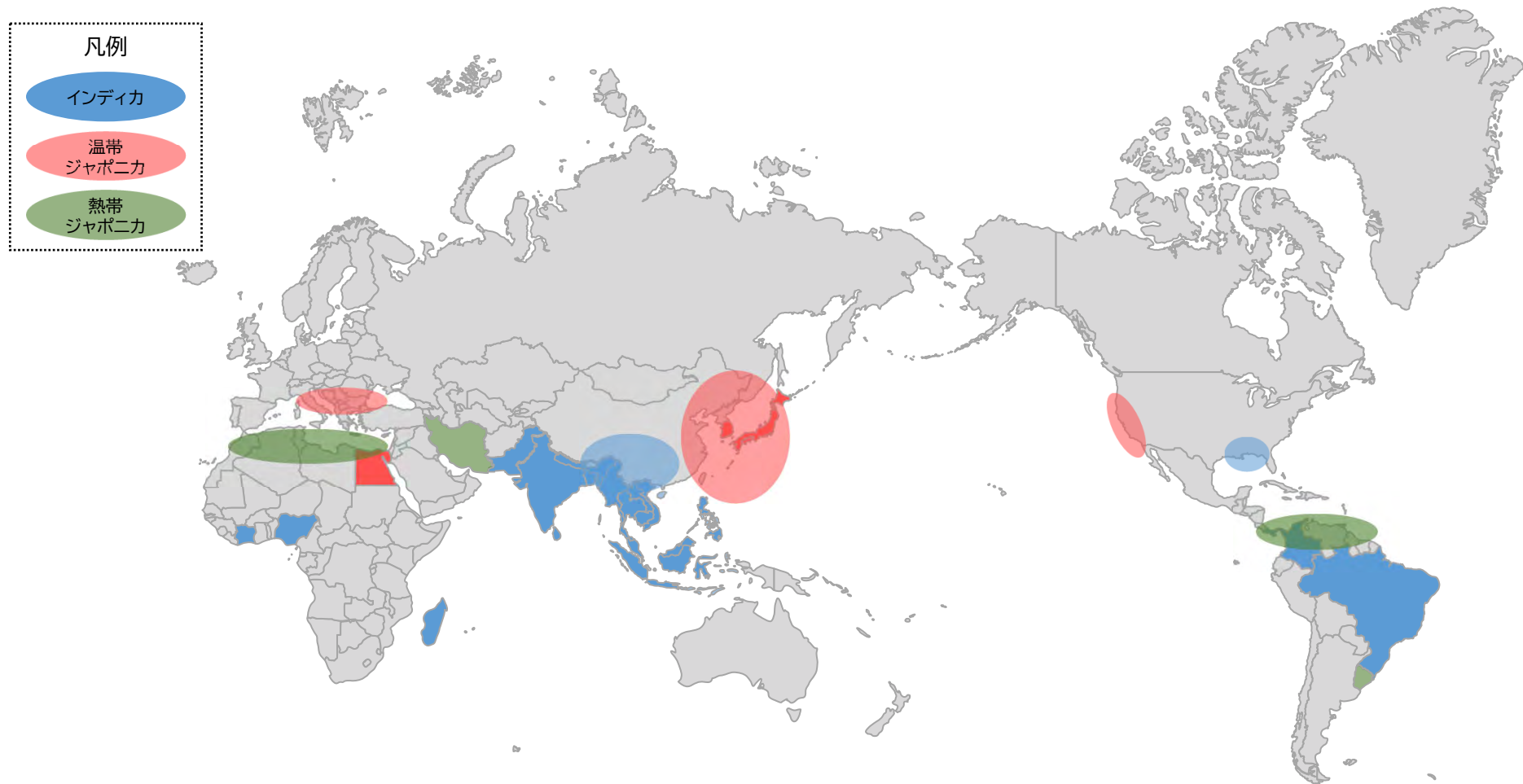
分類ごとの特徴

	ジャポニカ種		インディカ種
	温帯ジャポニカ	熱帯ジャポニカ	
玄米の 形質・特徴			
	短く円形に近い 炊くと粘りとつやが出る	幅が広く大粒 炊くと粘りがでる	細長い 炊くとパサパサとなる
草丈・葉色	低い・淡緑色	高い・淡緑色	高い・淡緑色
分げつ※	多い	少ない	多い
着粒性	多い	中間的	中間的
倒伏性	難～やや難	難～やや難	易
脱穀性	難	難	易
低温	抵抗性あり	抵抗性あり	抵抗性弱

※ イネ科作物の枝分かれのこと

世界のコメの産地

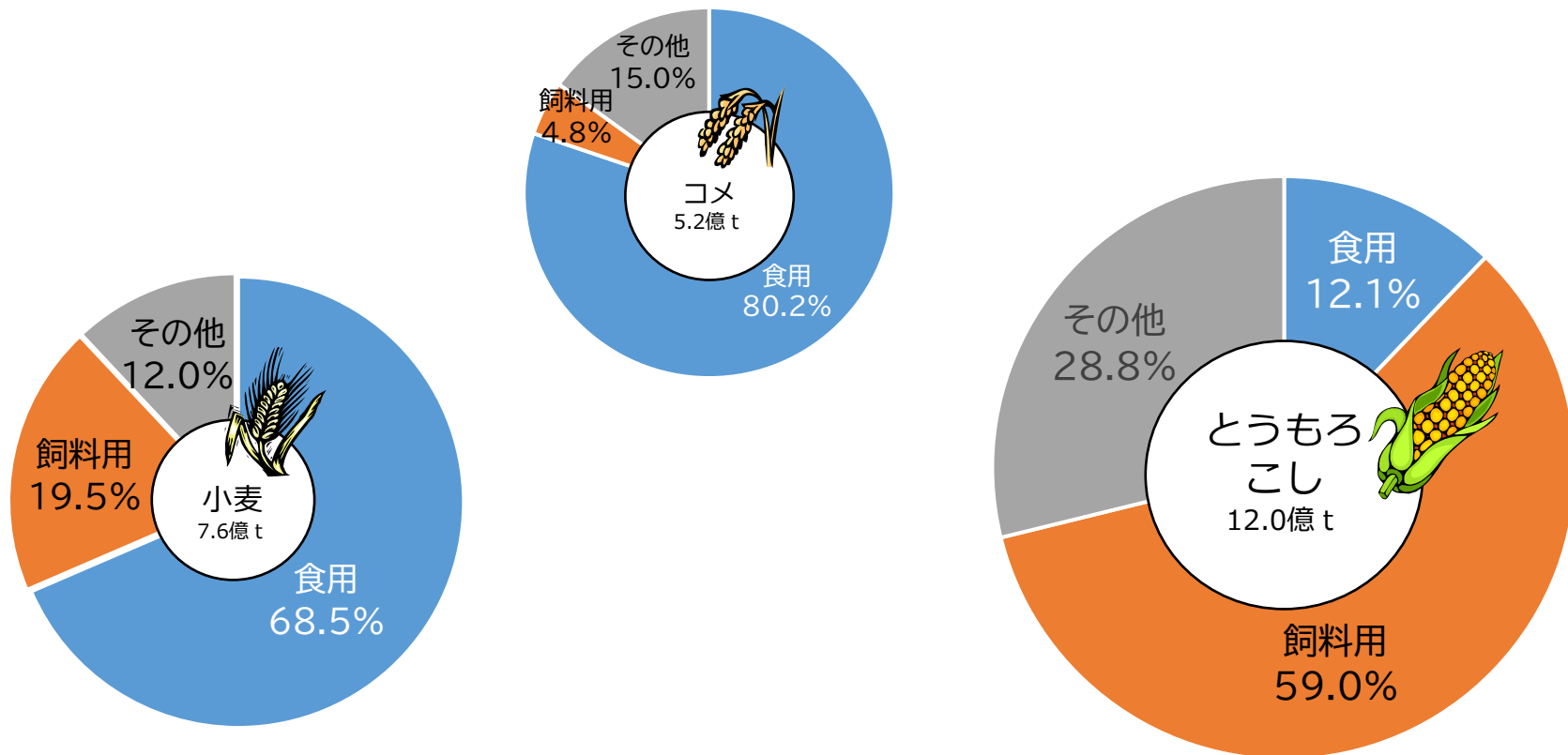
- 世界のコメ生産の中心地はアジアとアフリカ。また、「インディカ種」の生産量が最も多い。
- 栽培地域は品種によって様々。「インディカ種」は主に南アジア～東南アジア、「熱帯ジャポニカ種」は北アフリカ・南米の赤道付近で栽培。日本で栽培されている「温帯ジャポニカ種」は朝鮮半島や中国北部でも栽培。



世界のコメの消費別用途

- 世界のコメの消費量(5.2億t)は、主要穀物(コメ・小麦・とうもろこし)の中では最も少ない。
- コメの消費用途は8割が食用。飼料用途は約5%と他の穀物と比べても割合が小さい。

主要穀物の全世界消費に占める用途別内訳



出典：FAO提供データ(穀物年度:2020/2021)

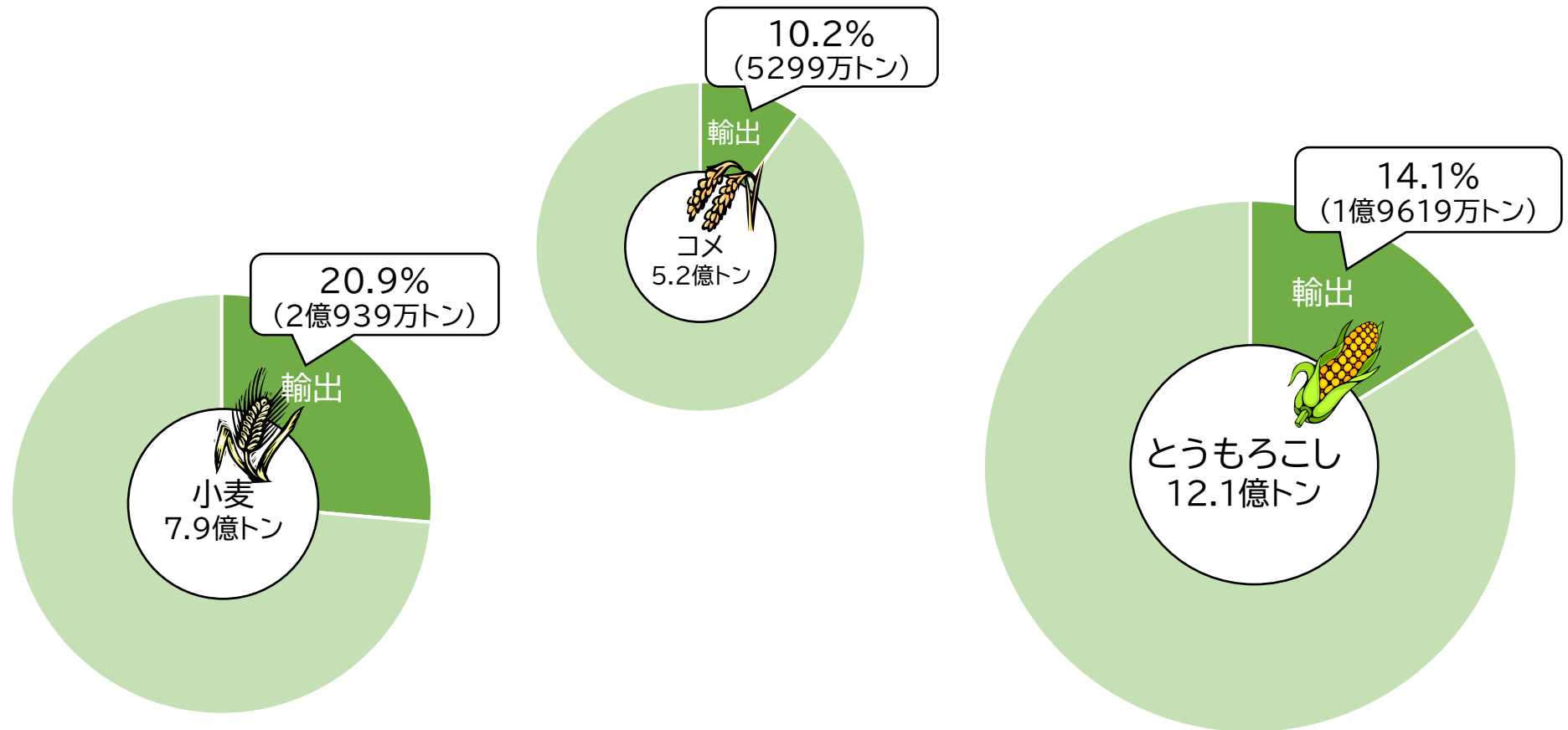
注1：小麦の消費量は、小麦粉の小麦換算分を含む。

注2：その他は、種子としての利用、ポストハーベストロス等。

世界のコメ貿易の特徴

- コメは自国での消費が多く、貿易(輸出)に仕向けられる割合は小さい。

主要穀物の生産量に占める輸出量の割合



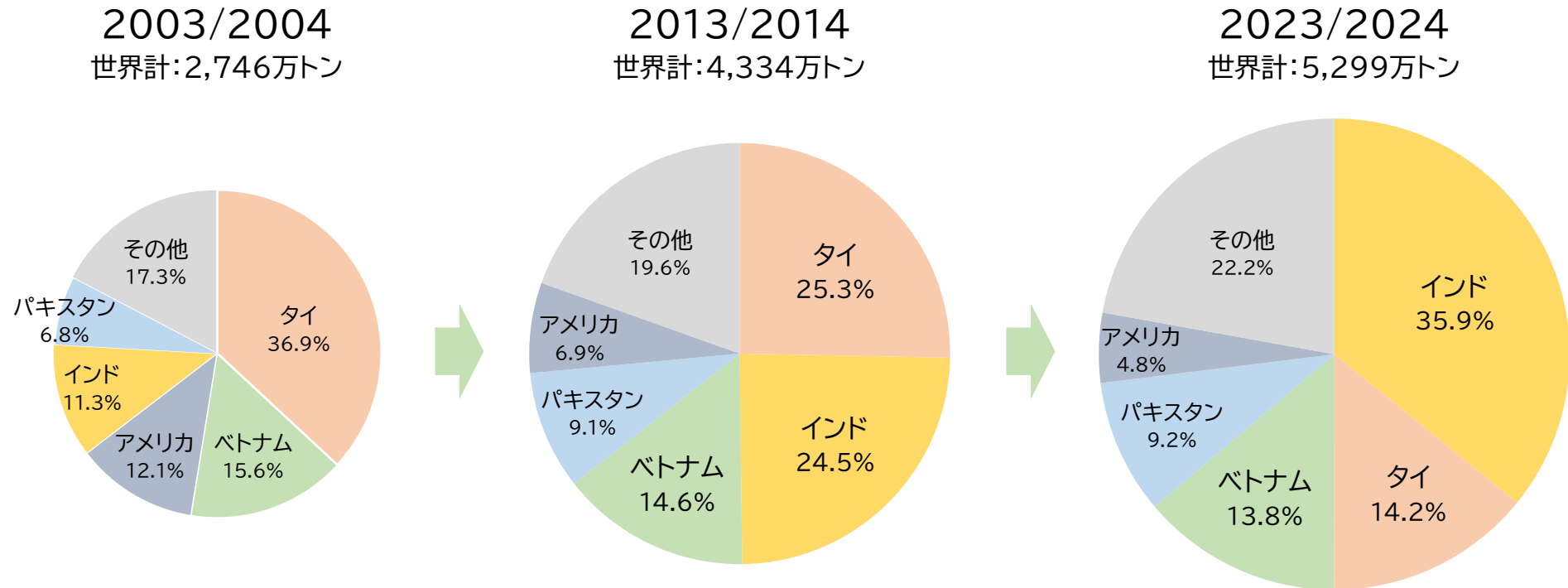
出典: USDA「PS&D(2023年8月)」(穀物年度: 2023/2024)

注: 貿易率は当該国の生産量を輸出量で除して算出

世界のコメ貿易(輸出)

- インドは世界のコメ輸出量の約4割を占め、2位のタイの約2.5倍を輸出。
- 主要なコメ輸出国は、20年前はタイ、ベトナムだったが、直近ではインドが最大の輸出国。

コメの全世界輸出量の国別割合の変化

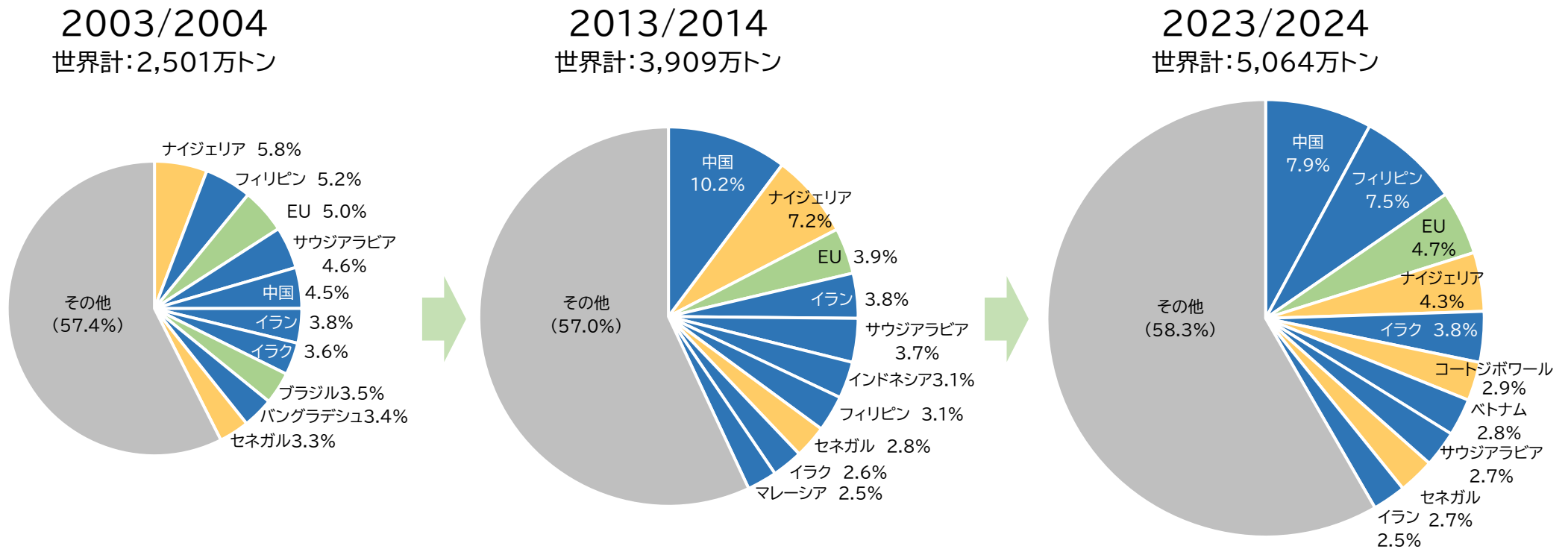


出典:USDA「PS&D(2023年8月)」(穀物年度)

世界のコメ貿易(輸入)

- 世界のコメ輸入量は、上位10カ国でも全体の4割程度と少なく、分散している。
- 主な輸入国は、アジア地域やアフリカ地域が中心。

コメの全世界輸入量の国別割合の変化

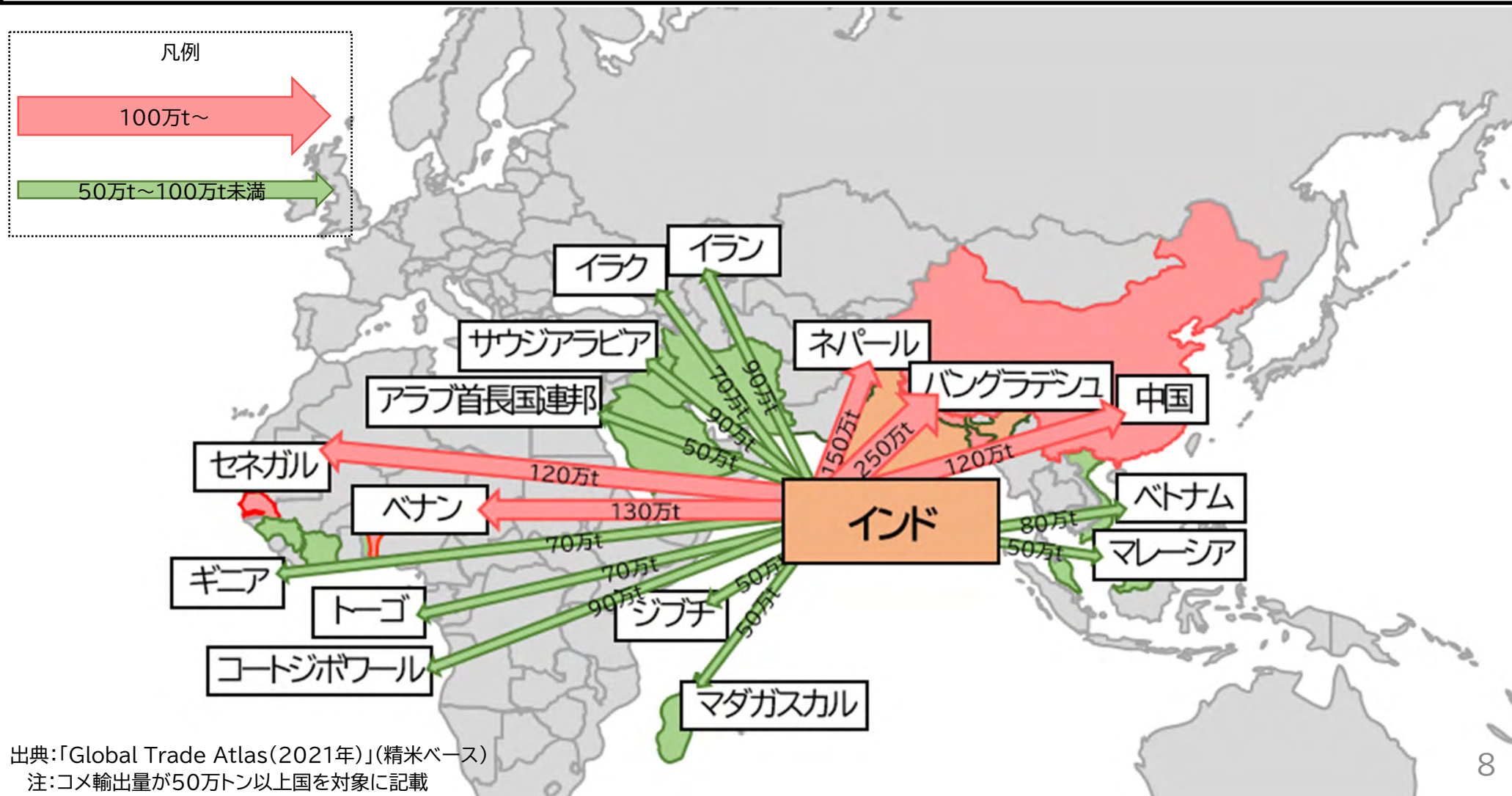


出典:USDA「PS&D(2023年8月)」(穀物年度)

注: グラフの色分け(輸入量上位10カ国)アジア地域が青色、アフリカ地域が黄色、その他地域が緑色。

コメの貿易フロー(インド)

- 世界のコメ輸出量(約5,500万トン)のうち、インドは約4割(約2,000万トン)を占め、世界一の輸出国。
- インドの輸出量は、主要輸出国(タイ、ベトナム、パキスタン)の合計量に匹敵。
- インドの輸出先は170か国以上に及び、隣国のバングラデシュやネパール等への輸出が上位。
また、ベナン、セネガル等の西アフリカ諸国で約4割を占める状況。



世界における最近のコメの輸出規制

- インドは、国内の主産地での降雨不足による減産から、2022年9月に碎米を原則として輸出禁止、バスマティ米・パーボイルド米以外のコメ(精米)に20%の輸出税を賦課する輸出規制措置を発動。
- また、2023年7月20日には、国内の物価高騰に対応するため、非バスマティ米(精米)を輸出禁止。これにより、年間輸出量の4分の1程度の600万トンが新たな輸出規制の対象。
- ロシアでは、国内市場の安定維持のため、2022年7月から2023年末までの間、コメ及びコメの粗挽き粉を輸出禁止。また、UAEでは、十分な国内供給量の確保のため、2023年7月28日から、コメ(パーボイルド米、玄米、精米、碎米)について暫定的に4か月の間、輸出禁止。(2023年8月20日時点)

最近のインドの輸出規制

(2022年9月～)

対象品目	措置内容
全てのコメの粳	輸出税(20%)
全てのコメの玄米	輸出税(20%)
バスマティ米の精米	12,000ルピー/t (日本円で約2万円/t)
パーボイルド米の精米	無税
その他	輸出税(20%)
碎米	輸出禁止



(2023年7月20日～)

対象品目	措置内容
全てのコメの粳	輸出税(20%)
全てのコメの玄米	輸出税(20%)
バスマティ米の精米	12,000ルピー/t (日本円で約2万円/t)
パーボイルド米の精米	無税
その他	輸出禁止
碎米	輸出禁止

(参考)バスマティ米とパーボイルド米の特徴

バスマティ米……インディカ米の一種で、インドを中心に栽培されてきた高価な品種で、強い香りが特徴

パーボイルド米…インディカ米をもみ殻のまま水に浸し、蒸して乾燥・精米した半調理済みのもので、調理時間が短く、虫がつきにくいことが特徴

注1:その他はバスマティ米・パーボイルド米を除いた精米

2:食料安全保障上の理由でインド政府が認める場合は、輸出を許可

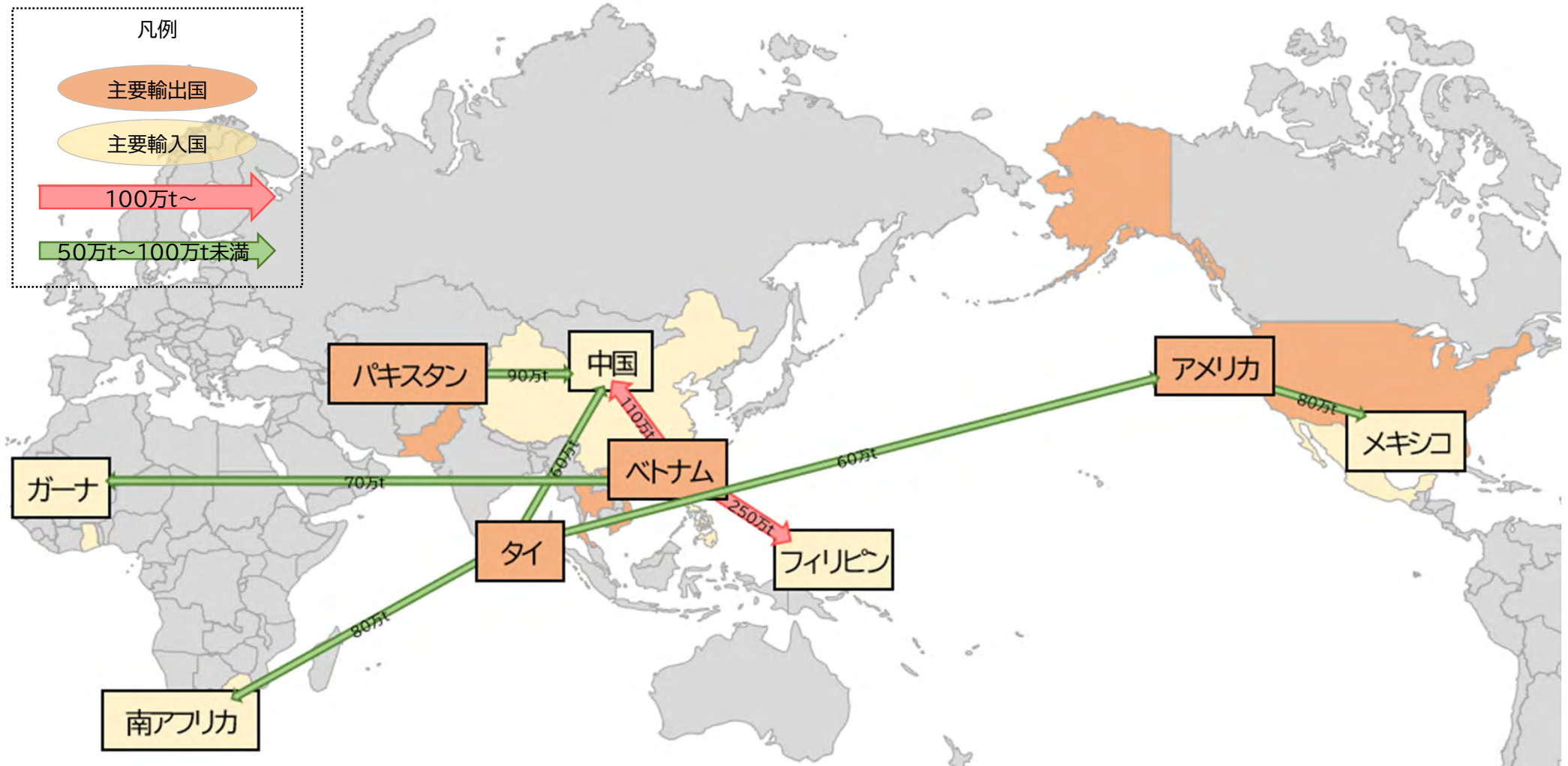
3:コメ以外の品目(小麦・小麦粉)についても、国内の物価高騰を抑制のため、2022年から輸出禁止

出典:インド商工省(Ministry of Commerce & Industry)

農産物・加工食品輸出開発庁(Agricultural & Processed Food Products Export Development Authority (APEDA))

コメの貿易フロー(インド以外)

○ インド以外の主要な輸出国であるタイは、南アフリカやアメリカ、中国への輸出が多く、ベトナムでは、フィリピンや中国といった近隣国への輸出が多いが、タイ、ベトナム、パキスタン、米国の輸出量は、いずれも1,000万トン未満。輸出先1か国当たりでは50万トン未満が6割を占める状況。



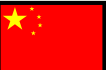
出典:「Global Trade Atlas(2021年)」精米ベース (パキスタン除く)

「UN COMTRADE (2021年)」(精米ベース) (パキスタン)

注: コメ輸出力が50万トン以上国を対象に記載

コメの主な輸出企業

○ コメは、穀物メジャー主体の取引である他の穀物と異なり、主要輸出国における「国家貿易企業」又は「輸出企業の加入する団体」を中心とした取引が主流。

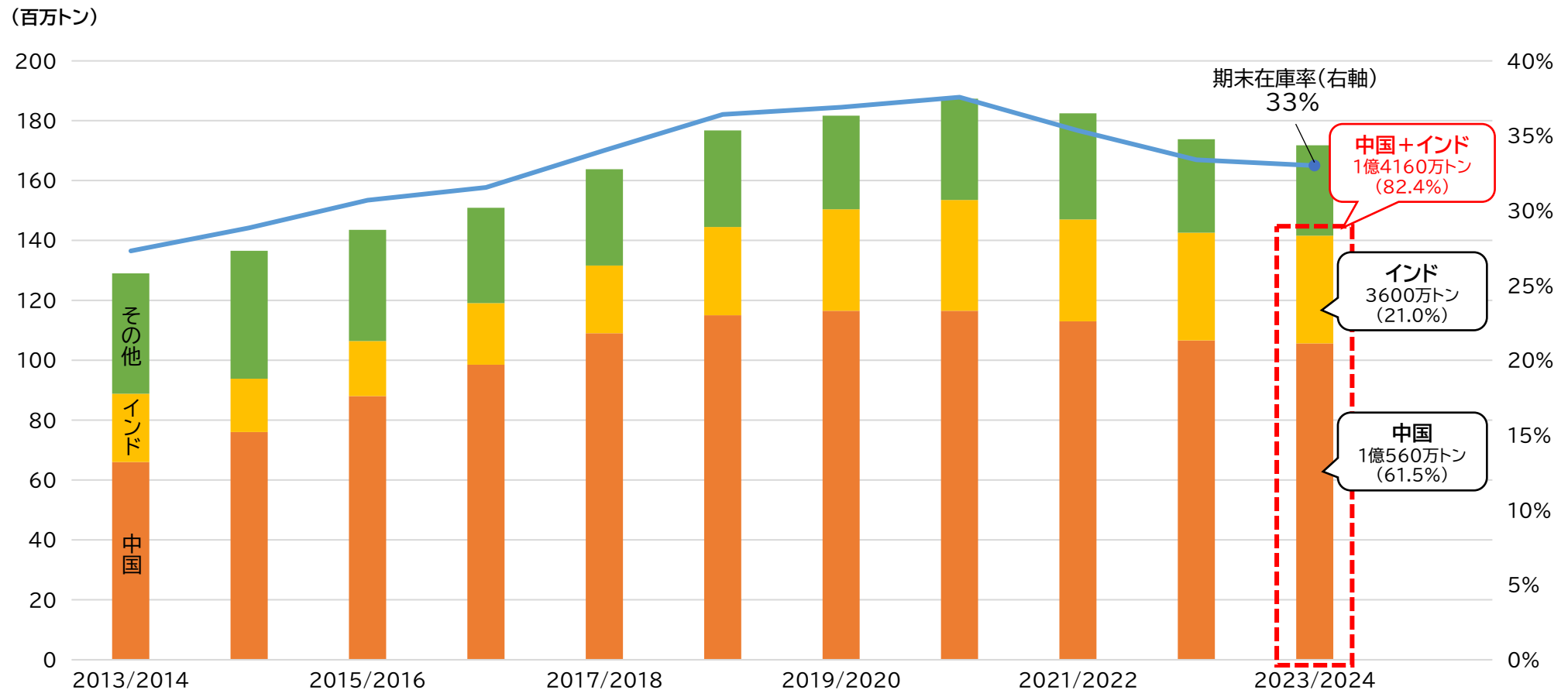
国名	輸出量 (百万t)	取引主体	業者概要
インド 	19.0	全インド米輸出業者協会 (The All India Rice Exporters' Association)	● 1989年にコメ輸出企業による民間団体として設立。 ● 農業・加工食品輸出開発局(Agricultural & Processed Food Products Export Development Authority)、商務省、農業省、国立植物防疫機関、州の農業局などと緊密に連携し、加盟する輸出企業を支援。 ● 特に、インド産バスマティ米の輸出促進に注力。
ベトナム 	7.3	ベトナム食品協会 (Vietnam Food Association (VFA))	● 1989年に産業貿易省(Ministry of Industry and Trade)により設立。 ● VFAは、家庭省及び農業・農村開発省の下で、食料の生産・加工・貿易を担当する企業で構成。 ● ベトナムのコメ輸出の90%以上のシェア。
タイ 	7.5	タイコメ輸出業者協会 (Thai Rice Exporters Association)	● 1918年にバンコク地区のコメ店が、同地区の米問屋を集め民間の協会を設立。 ● その後、協会会員は精米業者、コメ輸出企業等にまで拡大。 ● 商務省のほか、タイ貿易委員会、タイ商工会議所、タイ農民協会、タイ精米協会、その他の関連団体と協力し、協会傘下の企業がコメを輸出。 ● コメの国際価格の指標となるタイ産米価格を定期的に公表。
中国 	2.0	中国糧油グループ (China Oil and Foodstuffs Corporation (COFCO))	● 1949年に国家貿易企業として設立。 ● 中国最大の国際的な穀物企業として、穀物、石油、砂糖、綿花、肉、乳製品などの農産物・食品をコアビジネスとする。この他、金融業やホテル事業、不動産事業も展開。

出典:USDA「PS&D(2023年8月)」(穀物年度:2023/2024) (輸出量)
各協会ウェブサイト、WTO通報 (業者概要)

世界のコメの在庫量

- 世界におけるコメの期末在庫量は約1.7億トン。在庫率は約33%であり、コメ消費量全体の約4ヶ月分。
- このうち、中国が約1億トン(全体の約6割)、インドが3,500万トン(全体の約2割)であり、2国だけで世界のコメ期末在庫の約8割を占める。

世界のコメの期末在庫量



出典:USDA「PS&D」(2023年8月)(穀物年度)

注:在庫率=100×期末在庫量/消費量

(参考)中国の備蓄制度

- 中国は世界人口の約2割(14億人)を占める一方、耕地面積は世界全体の1割程度であり、食料安全保障対策は政府の最重要政策の1つ。
- 現在策定中の「中華人民共和国糧食安全保障法」の草案では、主要穀物の自給自足を基本としつつ、農家から中央政府まで、全国的に必要な備蓄を確保する政策を推進。

中国の備蓄制度の概要

目的	食糧需給の調整、食糧市場の安定、突発事態への対応等
担当機関	国務院(中央政府と地方政府の備蓄の総量管理)
対象品目	主要穀物……………小麦、コメ、トウモロコシ、大豆 経済的に重要な作物…食用油、綿花、種子 等

注1:一般的に、小麦は3～5年毎、米・とうもろこしは2～3年毎、豆類・食用油は1～2年毎に備蓄の入替
2:在庫放出された穀物は競売又は加工販売



大連港の穀物サイロ (写真奥)

中国の備蓄制度における分類

政府備蓄

中央政府(国内に約千か所)、地方政府、食料備蓄を政府から請け負った企業が実施主体となる備蓄。
穀物保管庫は2.1万か所、穀物貯蔵庫は20万か所(2019年現在)。

企業等の備蓄

一定規模以上の食料加工企業による備蓄のほか、農業経営体にも自主的な備蓄を奨励。

(参考)インドの食料配給制度とコメの在庫対策

- 食料配給制度(PDS:Public Distribution System、「国家食料安全保障法」等に基づく)で配分されるコメの年間数量は約6,000万トンと消費量全体の半分以上。食料の配給はインド食料公社(国営企業)が担い、在庫管理や輸入等も実施。
- 在庫政策は、コメを配分するための配給制度を前提とした「運用在庫」、政府調達不足に備えた「戦略的在庫」により運営。この他、一部州政府でもコメを備蓄。配給量の増加等に備え、配給に必要な2～3か月分程度を在庫。

インドの食料配給制度

運営主体		中央政府と28の州及び8つの連邦直轄領の共同責任により運営。
運営方法	中央政府	インド食料公社を通じ、州政府への食用穀物の調達、保管、輸送及び一括割当を実施。
	州政府等	州内の割当、対象者の特定、配給カードの発行等を実施。
配給品目		小麦、コメ、砂糖、灯油等 一部の州等では、豆類、食用油、ヨウ素添加塩、スパイス等も配給。

インドのコメの在庫最低数量

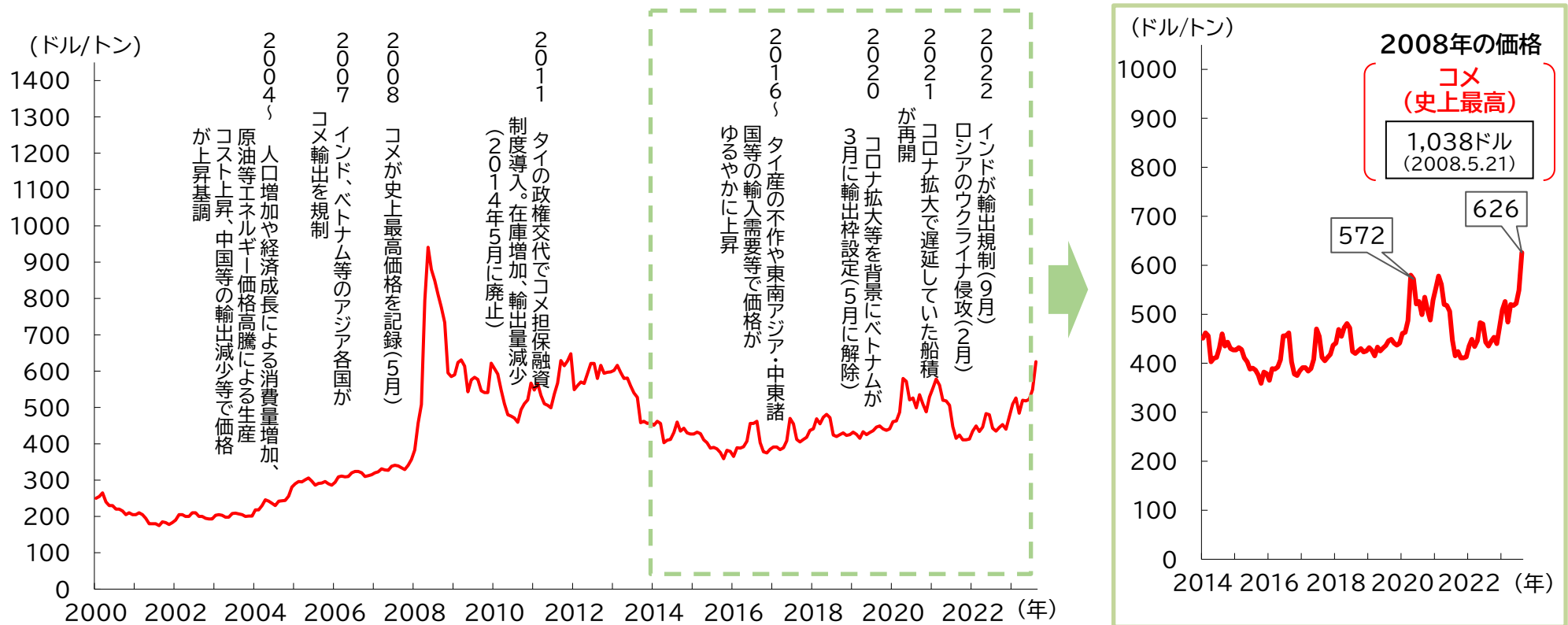
(単位:万トン)

各期首	運用在庫	戦略的在庫
4月	1,158	200
7月	1,154	200
10月	825	200
1月	561	200

注：戦略的在庫は各期首の最低水準であり、実際の在庫数量とは異なる。上記数量を上回る在庫量の確保が求められ、北東部の一部州政府もコメを備蓄

世界のコメ価格の推移

- コメの国際価格は、2007年6月以降、東南アジアや中東向けの輸出増加による需給の引き締まりを背景に、ベトナム、インド等による輸出規制も相まって、2008年5月に1,038ドル/トンと史上最高を記録。
- 2013年以降は低調に推移したものの、2016年から緩やかに上昇し、2020年のベトナムの輸出規制等により一時的に572ドル/トンまで上昇。
- 2022年9月以降は、インド国内の主産地での降雨不足による減産を受けた輸出規制(碎米の輸出禁止等)やインドネシアの需要増等から上昇傾向で推移。2023年7月のインドの輸出規制により、直近の価格は、規制前の+6.6%の626ドル/トンまで上昇。



出典:タイ国家貿易取引委員会公表資料を基に農林水産省作成

注:価格は、各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格(ただし、価格が未公表の月は、前月最終週の水曜日の価格)。

世界のコメをめぐる事情(国別編)

中国におけるコメの生産状況

- 直近の生産量(見込値)は、1.49億トンと平年より微増の見通し。また、同年の消費量(見込値)は、1.52億トンと微減の見通し。
- 生産地は、華南、華中、華東を中心に、東北にも分布。華南ではインディカ種の二期作、東北ではジャポニカ種の一期作での栽培。

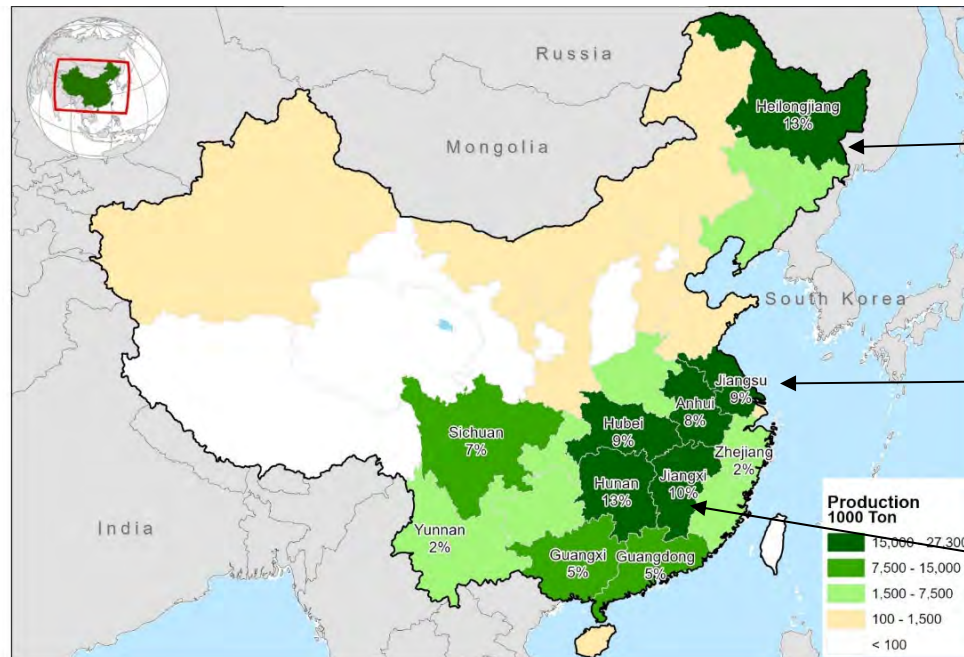
中国のコメ需給の動向推移

(単位:万トン)

	2019/2020	2020/2021	2021/2022	2022/2023	2023/2024
生産量	14,673	14,830	14,899	14,595	14,900
消費量	14,523	15,029	15,636	15,499	15,200

出典:USDA「PS&D(8月)」(穀物年度)

中国におけるコメの生産地



黒龍江省 2,263万トン
吉林省 544万トン
遼寧省 340万トン
中・短粒種を主に生産。

江蘇省 1,514万トン
中・短粒種を主に生産。

その他の地域
長粒種を主に生産。

出典(図) :USDA「National Agricultural Statistics Service」
出典(各地域の生産量):「海外食料需給レポート(2019年1月)」

注:各地域の生産量は2017年(玄米ベース)のデータ

インドにおけるコメの生産状況

- 直近の生産量(見込値)は、1.34億トンと昨年より微減の見通し。また、同年の消費量(見込値)は、1.14億トンと微増の見通し。
- 生産地は、インド洋沿岸を中心に、南インド、東インドから北インドにかけて分布。南部から東北地域では、インディカ種の二期作、北部地域では小麦との二毛作で栽培。

インドのコメ需給の動向推移

(単位:万トン)

	2019/2020	2020/2021	2021/2022	2022/2023	2023/2024
生産量	11,887	12,439	12,947	13,600	13,400
消費量	10,195	10,105	11,045	11,300	11,500

出典:USDA「PS&D(8月)」(穀物年度)

インドにおけるコメの生産地

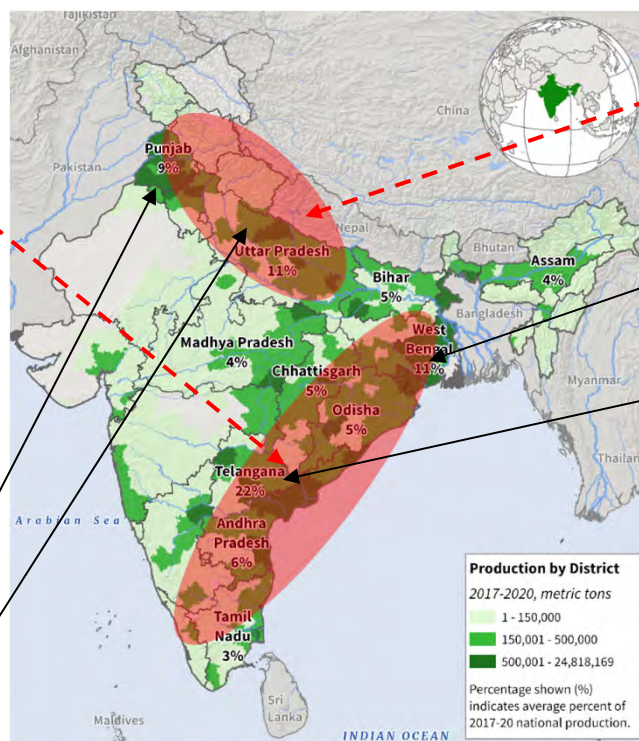
雨季にカリフ米と
乾季にラビ米を栽培。

※ カリフ米とラビ米の違いは、
播種の時期によるもの。米の
品種の違いによるものではない。

	播種	収穫
カリフ米	6月～8月	10月～1月
ラビ米	12月～1月	8～9月

パンジャブ州 9%

ウッタール・プラデーシュ州 11%



雨季にカリフ米と
乾季に小麦を栽培。

西ベンガル州 11%

テランガーナ州 22%

(参考)その他各州の生産量の割合

アーンドラ・プラデーシュ州	6%
チャティスガル州	5%
オディシャ州	5%
ビハール州	5%
アッサム州	4%
マディヤ・プラデーシュ州	4%
タミル・ナードゥ州	3%

ベトナムにおけるコメの生産状況

- 直近の生産量(見込値)は、2,700万トンと平年並みの見通し。また、同年の消費量(見込値)は、2,150万トンと平年より微増の見通し。
- 生産地は、南部のメコン川デルタを中心に、北中部、紅河デルタにも分布。冬春作と夏秋作等による二期作により、インディカ種を中心にしつつ、一部でジャポニカ種も栽培。

ベトナムのコメ需給の動向推移

(単位:万トン)

	2019/2020	2020/2021	2021/2022	2022/2023	2023/2024
生産量	2,710	2,738	2,667	2,700	2,700
消費量	2,125	2,145	2,150	2,150	2,150

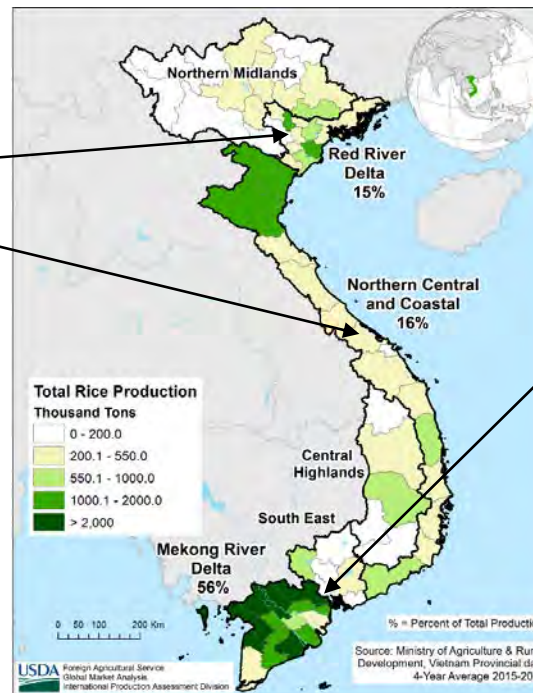
出典:USDA「PS&D(8月)」(穀物年度)

ベトナムにおけるコメの生産地

紅河デルタ地域 15%

中北部沿岸地域 16%

零細農家による自家消費用
が大半で、商業用は少ない。



メコンデルタ地域 56%

ベトナム最大のコメの生産地域。
冬春作と夏秋作等によりベトナムに
おけるコメ総生産の半分以上を占
める。

ベトナム全体では、インディカ種
(長粒種)を中心に生産しているが、
本地域ではジャポニカ種(短粒種)
も一部生産。

タイにおけるコメの生産状況

- 直近の生産量(見込値)は、1,970万トンと平年より微減の見通し。また、同年の消費量(見込値)も同様に1,250万トンと微減の見通し。
- 生産地は、東北部・北部を中心に、中央部にも分布。主要な栽培方法は、雨季作及び乾季作による二期作栽培。

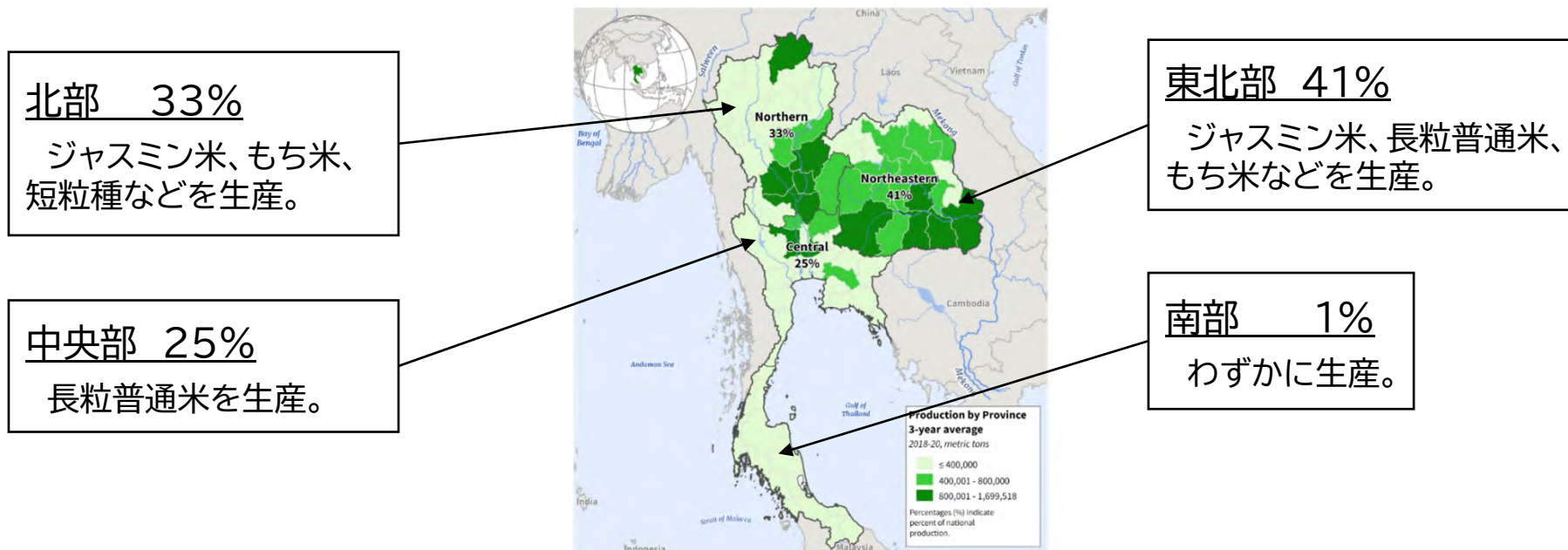
タイのコメ需給の動向推移

(単位:万トン)

	2019/2020	2020/2021	2021/2022	2022/2023	2023/2024
生産量	1,766	1,886	1,988	2,020	1,970
消費量	1,230	1,270	1,280	1,280	1,250

出典:USDA「PS&D(8月)」(穀物年度)

タイにおけるコメの生産地



出典:USDA「National Agricultural Statistics Service」

アメリカにおけるコメの生産状況

- 直近の生産量(見込値)は、638万トンと前年より約140万トン近く増加する見通し。また、同年の消費量(見込値)も、492万トンと前年より約16万トン増加する見通し。
- 生産地は、ミシシッピ川流域のアーカンソー州や、ルイジアナ州等で長粒種、カリフォルニア州で中粒種を主に栽培。

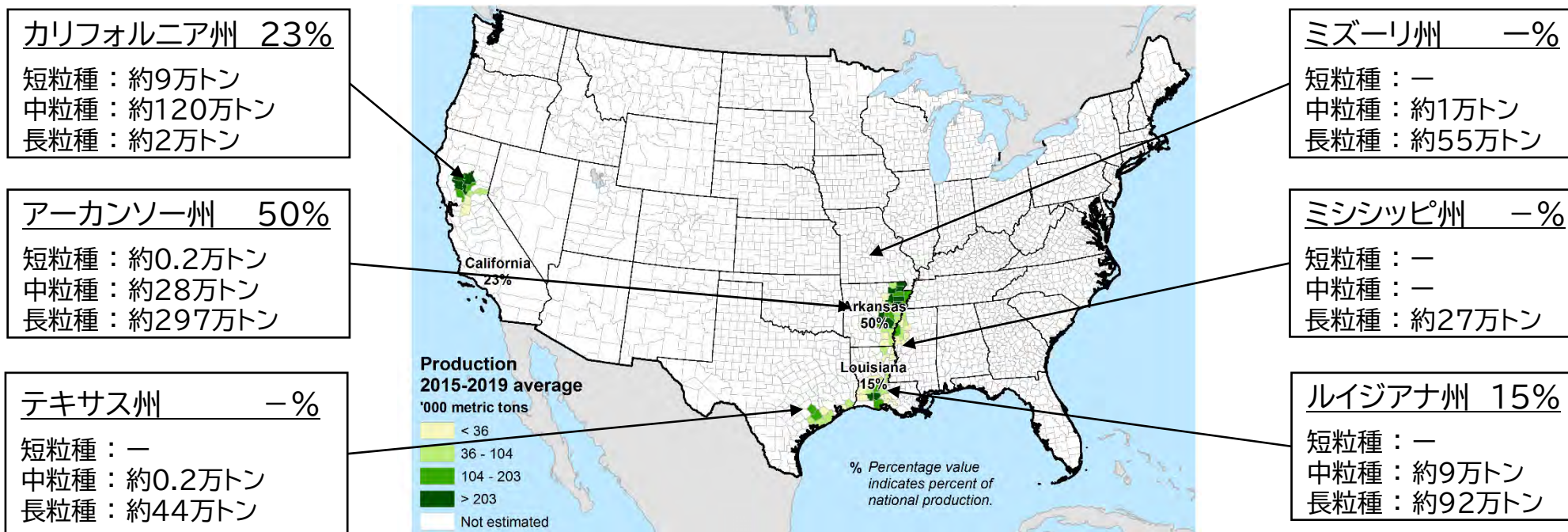
アメリカのコメ需給の動向推移

(単位:万トン)

	2019/2020	2020/2021	2021/2022	2022/2023	2023/2024
生産量	588	722	608	509	647
消費量	459	486	476	476	492

出典:USDA「PS&D(8月)」(穀物年度)

アメリカにおけるコメの生産地



出典(図) :USDA「National Agricultural Statistics Service」
 出典(各州の生産量):USDA「Crop Production Summary 2021」

【利用上の注意】

食料安全保障月報は、国際穀物需給に関し、在外公館からの情報、農林水産省が独自に各国の現地コンサルタント等を通じて入手した情報、公的機関（各国政府機関、FAO、IGC 等）の公表資料、Oil World 等民間の調査会社から購入した資料、その他、商社情報や新聞情報等から入手した情報を農林水産省の担当者において検証、整理、分析したものです。

○ 本月報に記載のない情報は以下を参照願います。

（１） 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・ 食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・ 食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・ 米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・ 食料需給見通し（農林水産政策研究所）：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

（２） 農林水産関係機関の情報（ALIC の情報サイト）：<https://www.alic.go.jp/>

- ・ 砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・ 野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・ 畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

（３） その他海外の機関（英語及び各国語となります）

ア 国際機関

- ・ 国連食糧農業機関（FAO）：<https://www.fao.org/home/en>
- ・ 国際穀物理事会（IGC）：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・ 経済協力開発機構（OECD）（農業分野）：<https://www.oecd.org/agriculture/>
- ・ 農業市場情報システム（AMIS）：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関（代表的なものです）

- ・ 米国農務省（USDA）：<https://www.usda.gov/>
- ・ ブラジル食料供給公社（CONAB）：<https://www.conab.gov.br/>
- ・ カナダ農務農産食品省（AAFC）：<https://agriculture.canada.ca/en/sector/crops/reports-statistics>
- ・ 豪州農業資源経済科学局（ABARES）：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

○ 食料安全保障月報で使用している統計数値は、主に米国農務省が 2023 年 8 月中旬までに発表した情報を引用しています。（最新年度 2023/24 年度です）

さらに詳細なデータ等が必要な場合は、米国農務省のホームページを参照願います。

http://www.usda.gov/wps/portal/usda/usdahome?navid=AGENCY_REPORTS

主な参考資料

「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

<http://www.usda.gov/oce/commodity/wasde/>

「Grain : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/grain-world-markets-and-trade>

「Oilseeds : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/oilseeds-world-markets-and-trade>

「World Agricultural Production」

<https://www.fas.usda.gov/data/world-agricultural-production>

「PS&D」

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/advQuery>

など

- **データは予測値であり、毎月各種データの更新を受けて改訂されます**ので留意してください。
- 資料原典で表示されるブッシェル及びエーカー等の単位は、それぞれトン及びヘクタールに換算して記載しています。
- 資料原典において現地通貨で表示される金額を円換算するにあたっては、日本銀行国際局・財務大臣公示の基準外国為替相場及び裁定外国為替相場等の換算レートを用いています。
- 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>
(注：同サイトの「Reference Data」を参照)
- 期末在庫率の対前年度増減率の欄は、前年度とのポイント差になります。なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合があります。
- 本資料の引用等につきましては、出所（農林水産省発行「食料安全保障月報」）を併記願います。

なお、生産見通し等の予測は、各国国際機関及び各国の農業機関によりそれぞれの分析手法に基づき行われるため、機関によってデータの相違がある場合があります。また、各国の農業機関の公表を受けて、国際機関の見通しが改訂される場合があります。

ロシアが占領しているウクライナのクリミアの生産量については、米国農務省はウクライナとして集計しています。

- 本月報の電子版は下記アドレスでご覧になれます。

農林水産省 食料安全保障月報

http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/index.html

- 本資料に関するご質問、ご意見等は、下記までお願いします。

連絡先	農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室 TEL : 03-6744-2368 (直通)
------------	--

「食料安全保障月報」に関するアンケート

いつも食料安全保障月報（以下、「月報」）を御愛読いただきありがとうございます。
今後のより良い月報の作成に生かすため、皆様の声を是非お聞かせください。

- 1 あなたの所属を教えてください。（選択式）
商社、食品・飼料メーカー、食品卸・小売業、調査会社、自治体、大学・研究機関、大学生・高校生、その他
- 2 あなたの所属する会社・組織が所在する地域を教えてください。（選択式）
北海道、東北、関東（東京以外）、東京、中部、近畿、中国、四国、九州・沖縄、海外
その他
- 3 月報をどこで知りましたか。（選択式）
口コミ、以前から（海外食料需給レポート時代から）、検索エンジン、農水省 HP、
書籍、その他
- 4 月報を書籍で知った場合、その書名が分かれば教えてください。
- 5 月報で一番関心／参考にしている項目は何ですか。（複数選択可）
概要編（今月の主な動き（穀物等の国際価格の動向）、今月の注目情報、その他）
品目別需給編（小麦、とうもろこし、コメ、油糧種子（大豆））
特別分析トピック
- 6 月報で一番関心／参考にしている項目のうち、特別分析トピックを選択された場合、特に関心があったテーマがあれば教えてください。
- 7 最近で最も興味を引いた／役立った記事は何ですか。（自由記載）
- 8 今後重点的に取り上げてほしいテーマは何ですか。（自由記載）
テーマ例：世界的な異常気象（干ばつ、洪水など）の穀物生産への影響
地域別の穀物需給動向（米国、南米、豪州、東南アジア等）
中国の需要・輸入動向
- 9 特別分析トピックで取り上げてほしいテーマは何ですか。（自由記載）
- 10 今後月報に期待することはありますか。（自由記載）



ご回答は以下 URL または右の QR コードよりアクセス願います。

https://www.contactus.maff.go.jp/j/form/kanbo/anpo/anpo_geppou_ankeeto.html